

609-374



1200501533999

9

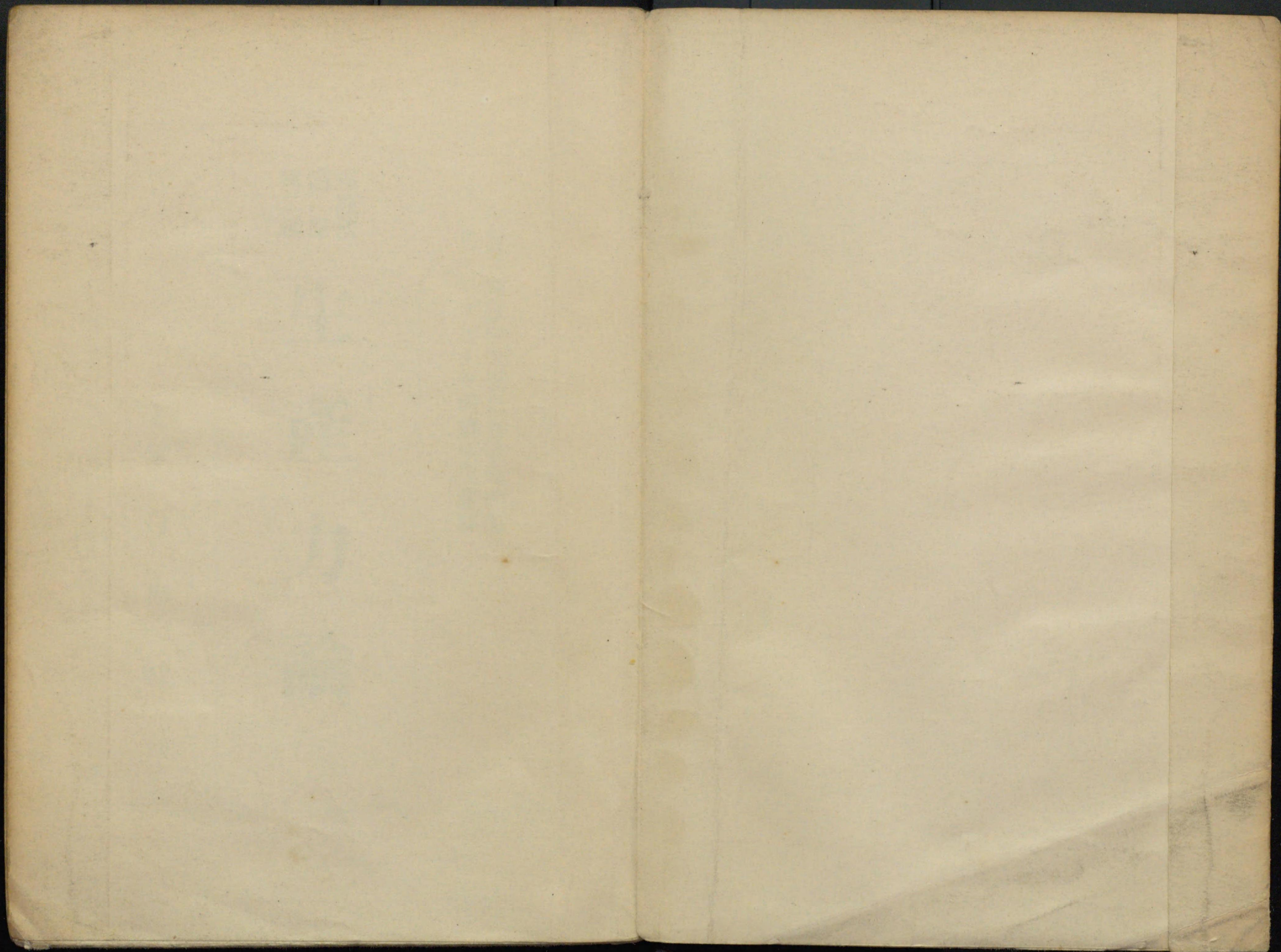
374

辯證法講座第二編

生産力論

ソ同盟共産黨中央委員會委囑編纂
プロ科ソヴェート同盟研究會譯

白揚社刊



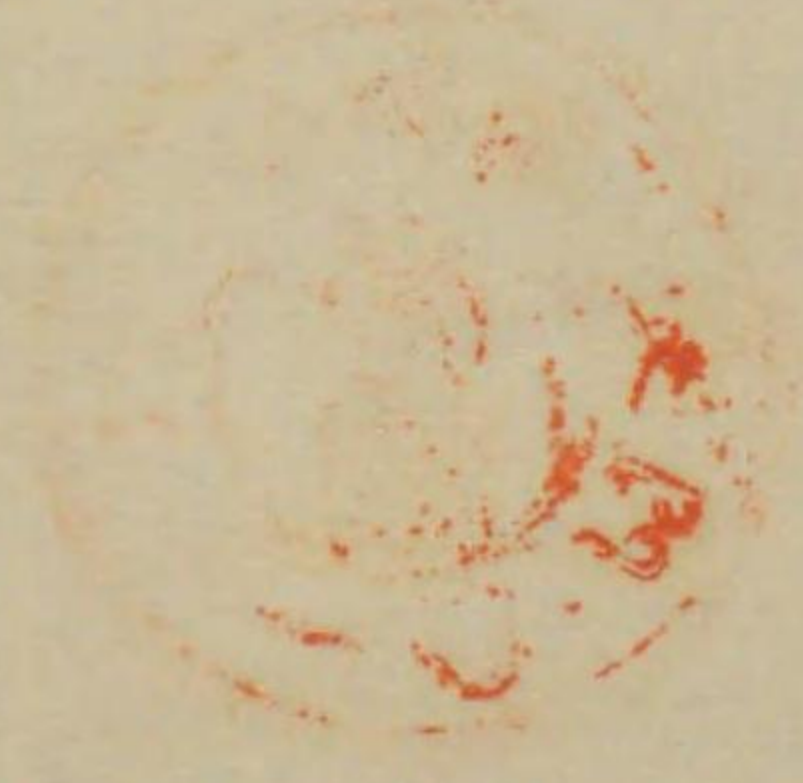
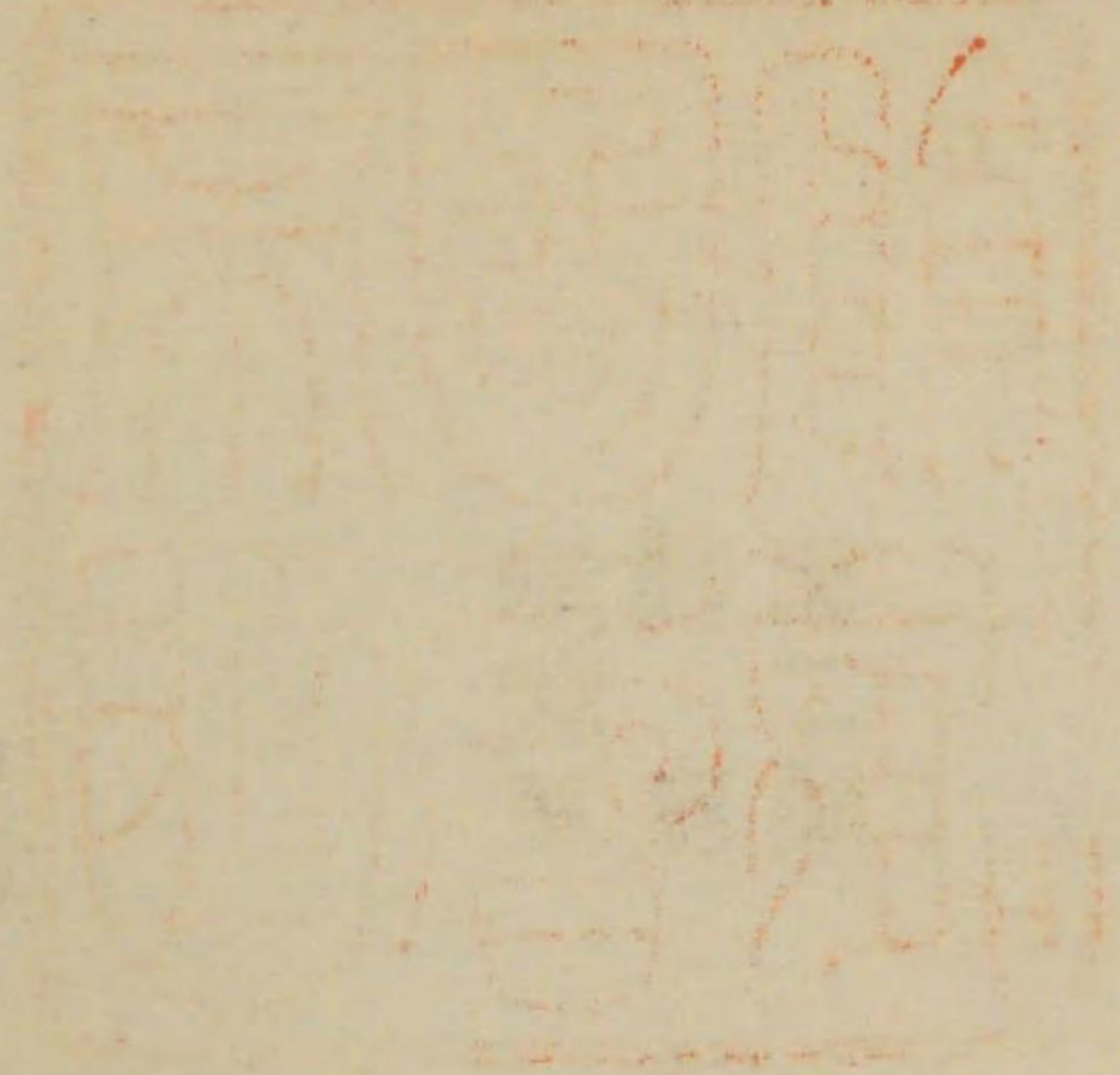


辯證法講座
第二編

ソ同盟共産黨中央委員會委囑編纂
プロ科・ソヴェート同盟研究會譯

生産力論

東京白揚社刊



~~598-61~~
609-374

譯者序

一、本書はさきに譯出した、全同盟共産黨中央委員會編輯、黨教育副讀本「辯證法講座」の第二冊目である。本書のテーマは「生産諸力と生産諸關係」である。

本書の特徴や長所は以前に譯者が述べた通りである。

二、只一言付け加へておきたいことは「唯物辯證法」において「生産諸力と生産諸關係」の問題が如何に、そしてまた現在では特に、主要なテーマであるかと云ふことである。「生産諸力と生産諸關係」のテーマはそれに関する正しい理解なくしては、實踐上の指導においても、社會經濟、政治上の理論の研鑽においても一步も我々が進み得ないのである。

然るに現在でも尙、ブハーリン的な「森と動物」に関するおとぎ話や、ブルジョアマルクス主義者の「唯物史觀の公式ゴツコ」などさへ跡を斷つてゐない有様である。このテーマに對する「一九三二年式」の曲歪についてはさらに云はないまでも。

これが特にとりいそいで我々が本書を譯出した理由である。

一九三二年五月二〇日

譯者

609
374

目次

第一部

テーマ生産諸力と生産諸關係……………三

一、自然と社會……………三

文献……………三

二、生産諸力と生産諸關係……………四

文献……………七

三、社會的・經濟的構成に關するマルクス・レーニンの學說……………七

文献……………八

四、ソヴェート同盟に於ける生産諸力と生産諸關係……………八

文献……………二

試問……………三

第一部のための研究資料……………一三

一、労働の過程——生産の過程……………一三

附録の一 『道具を作る動物』としての人間……………一三

附録の二 猿の人間化の過程に於ける労働の役割……………一六

附録の三 基礎的契機としての生産……………一九

二、生産諸力と生産諸関係……………三〇

附録の四 唯物史観……………三〇

附録の五 社會の發展に関するマルクスの學說……………三二

附録の六 労働の過程と生産諸力の諸要素……………四〇

附録の七 生産諸力の社會的特性……………五一

附録の八 生産の仕方……………五三

附録の九 生産諸関係……………五五

附録の十 生産諸関係が生産諸力の發達に及ぼす影響……………五七

附録の十一 土臺と上層建築との相互關係……………五八

附録の十二 生産諸力と生産諸關係のマクスレーニン主義的理解の機械論的修正と觀念論的修正……………七一

附録の十三 生産諸力の發展のメンシエヴィキ的理論に反對するレーニンの所說……………八四

三、社會的經濟的諸構成に関するマルクス

レーニンの學說……………八八

附録の十四 自然史的過程としての社會の發展……………八九

附録の十五 人類の歴史は各種の社會的有機體の交代である……………九一

附録の十六 經濟的社會的構成の歴史的經過的特性……………九三

附録の十七 諸種の社會的經濟的構成の特性的記述……………九五

階級前の社會……………九五

奴隸所有制……………九八

封建社會……………一〇二

附録の十八	資本主義的構成の特徴……………	一〇五
附録の十九	帝國主義……………	一一〇
附録の二十	同志ブハーリンの規定における社會……………	一一五

四、ソヴェート同盟における生産諸力と生産諸關係……………

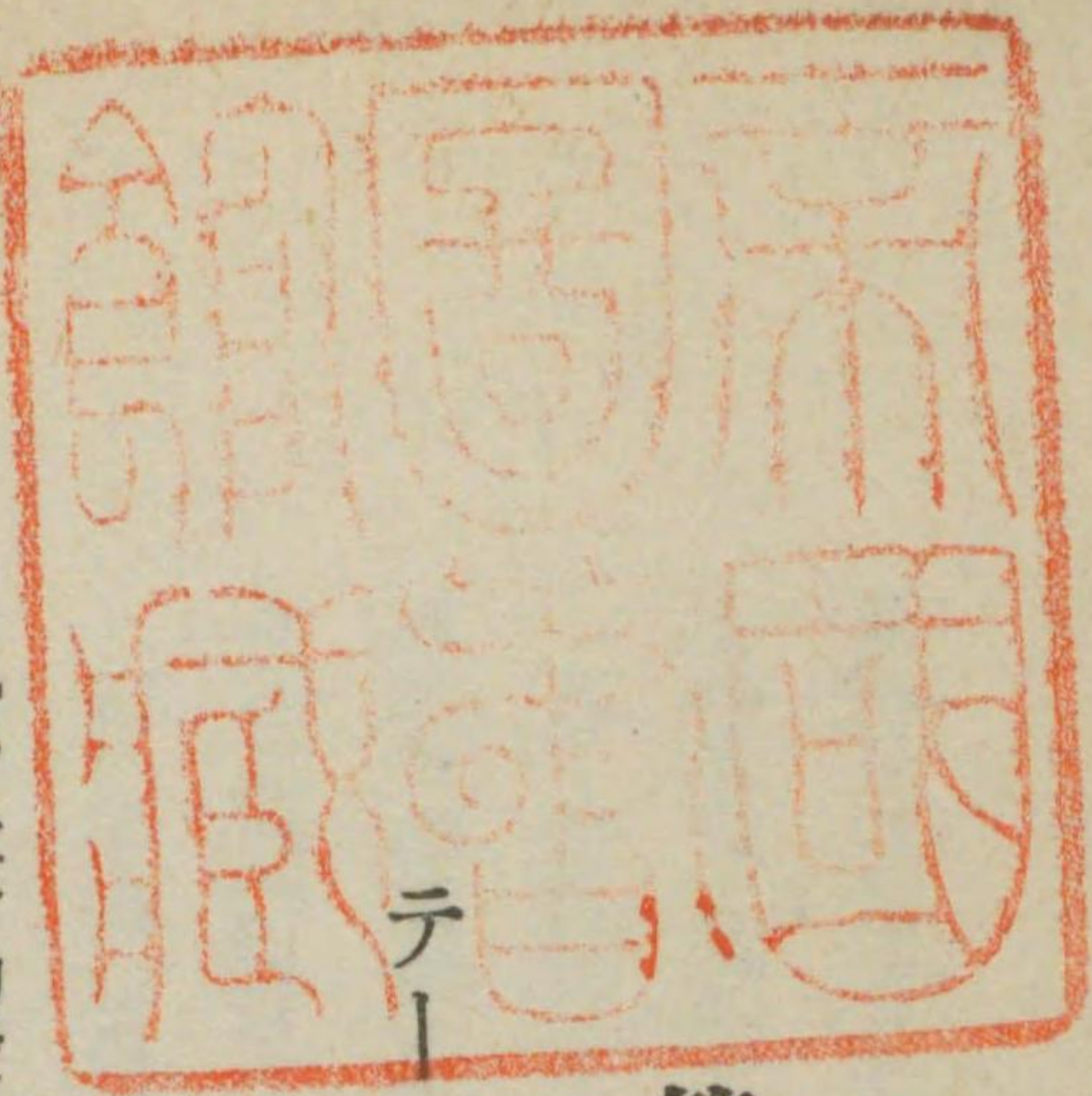
附録の二十一	過渡期の經濟組織に關するレーニンの特徴づけ……………	一二九
附録の二十二	我々は社會主義の時期に這入つた……………	一二〇
附録の二十三	資本主義的經濟體系と社會主義的經濟體系……………	一二三
附録の二十四	社會主義の生産諸力の發達に關するレーニンの所說……………	一二三
附録の二十五	社會主義の生産諸力の發展に關する同志スターリンの所說……………	一二四
附録の二十六	社會主義の經濟的基礎の創造とは何か……………	一二五
附録の二十七	社會主義の生産諸關係……………	一二七
附録の二十八	ソヴェート工業の原動力は何か……………	一二九
附録の二十九	コルホーズの性質について……………	一三五
附録の三十	社會主義競争……………	一五六

附録の三十一	計畫について……………	一五九
附録の三十二	富農的反革命の相貌……………	一六一

研究家のページ……………

(第三部への方法論的指示)……………	一七六
--------------------	-----

辯證法講座
第二篇
生產力論



第一部

テーマ、生産諸力と生産諸關係

一、自然と社會

- 一、社會的發展の歴史に適用された辯證法的唯物論としての史的唯物論。
- 二、動物界の生存競争及び社會的人間の生存競争の特性。社會的人間の自然への適應の能動的
特性。「道具を作る」動物としての人間。
- 三、猿に類する先祖から人間への轉化の過程に於ける労働の役割。
- 四、人間社會の生活的基礎としての社會的生産。

文献

研究資料。附録の一乃至三及び六

二、生産諸力と生産諸關係

一、物質的生產諸力の諸要素——生産手段及び勞働力、社會的生產の過程に於けるそれらの統一。
二、最も重要な生産力としての××的勞働者階級。社會の自然への能動的適應の表現としての勞働要具。

三、社會的現象としての物質的生產諸力。同志ブハーリン其他の機械論者に於ける生産諸力の技術への自然主義的還元の誤謬。

四、生産の過程に於ける人間の社會的關係としての生産諸關係。階級社會に於ける生産諸關係の階級的特性。「生きてゐる機械の配置」といふ、同志ブハーリンに於ける生産諸關係の機械論的理解。物質的内容を失つた、形態としての、ルービンに於ける生産諸關係の觀念論的理解。

五、社會的生產過程の内容としての物質的生產諸力と、その社會的形態としての生産諸關係との辯證法的統一。物質的生產諸力の發展の段階による、生産諸關係の被制約性。社會的發展の基礎及び社會的生活のマルクス主義的分析の出發點としての、物質的生產諸力と生産諸關係の辯

證法（社會的生產過程の形態と内容の辯證法）。デボーリン派（ゴニツクマン、ツイミヤンスキー、其他）に於ける、生産諸力と生産諸關係の辯證法の觀念論的取扱ひ。

六、物質的生產諸力の發展の内部的法則としての、社會的發展の指導的原理としての、生産諸關係。物質的生產諸力及び生産諸關係の歴史的確定性及び變動性。特定の歴史的發展段階に於ける生産諸關係の歴史的進歩的な、及び歴史的反動的な特性（生産諸關係は「社會的發展の桎梏」となる）。

七、變化した物質的生產諸力と老衰した生産諸關係との間の衝突としての、社會的物質的生產諸力の歴史的に壽命の盡きた形態の交代としての、××。社會的發展に於ける質的飛躍としての一つの社會的經濟的構成から他のそれへの××としての、××。社會的發展に於ける進化と××。八、「社會的經濟的構造」はそれの上に法律及び政治の上層建築がそびえ立つてゐるところの土臺である。そしてこの土臺に一定の社會的意識形態が對應してゐる。土臺による上層建築の被制約性、及び土臺への上層建築の反作用。

九、社會的發展に於ける地理的環境の役割。地理的環境の役割についてのブレハーノフの見解の批判。

十、社會的發展及び革命の「前提」のメニシエヴィーキ的理解の批判。メンシエヴィーキに於ける、社會的發展に於いて生産諸關係の演ずる指導的役割の無理解、及びこれを生産諸力の受働的結果として取扱つてゐること、最も重要な生産諸力としての××的労働者階級の役割の無理解。上層建築が土臺へ反作用を及ぼすことの否定（經濟的唯物論）。デボーリン派に於ける、「受働的結果」としての生産諸關係のメニシエヴィーキ的「スハーノフ的理解」。

十一、社會的發展の法則のナロドニキ的理解（ミハイロフスキーの「主觀的社會學」）に對するレーニンの批判。社會的必然性と歴史に於ける個人の役割。社會的發展の客觀的及び主觀的諸要因メニシエヴィーキ的宿運論と主觀的要因（プロレタリアートの組織性、ボリシエヴィーキ黨、職業的革命家の幹部、新聞、等々の存在）の革命的役割。デボーリン派（カーレフ）に於ける、意思の自由の理解についてのメニシエヴィーキ的宿命論。

十二、社會的發展の内的法則としての物質的生產諸力と生産諸關係の辯證法の代りにブハーリンに於ける社會的發展の諸法則の機械論的理解。——即ち社會と外部的環境との間の均衡の理論、自然から社會へのエネルギーの流入といふボグダーノフ的理論、「自然流出性」の理論及び生産諸關係を「受働的結果」と見るメニシエヴィーキの見解とのこの理論の類似。同志ブハーリ

ンの社會的發展の法則に關する見解と關聯して、狭い箇所、組織された資本主義、等々の彼の理論にあらはれた政治的日和見主義。

文 献

研究資料。附録の四乃至十三

三、社會的「經濟的構成」に關するマルクス——レーニンの學說

一、種々の「社會的有機體」の、種々の社會的「經濟的構成」の、交代としての歴史的發展。社會的發展の諸法則の歴史の有限性。ブハーリンに於ける社會及び社會の諸法則の抽象的スコラ哲學的理解（「自然に於ける諸要素の體系」）

二、生産諸關係の型による社會的「經濟的構成」の區別。生産諸力と生産諸關係との統一の歴史的に規定された型の表現としての「生産の仕方（方法）」（「労働力の生産手段との結合の仕方」）。労働要具の特性による諸構成の區別。

三、歴史的発展の特定段階に於ける社會の生きた形像としての、構成のレーニンの理解。資本主義的構成の『生きた形像』としてのマルクスの『資本論』。

四、社會的—經濟的構成の歴史的諸型^{タイプ}。前階級的社會。階級社會の諸構成——奴隸所有制、封建制、資本主義。無階級××主義社會。資本主義的構成の特性記述。資本主義の最高段階としての、社會主義の前夜としての帝國主義。

五、古い構成の内部に於ける新しい構成の成熟。一つの構成に他の構成が交代する形態としての××。社會××。社會主義××。

六、資本主義から社會主義への過渡に當つての、××と××の時代。プロレタリアート××の諸國に於ける、資本主義から社會主義への過渡時代。

文 献

研究資料。附録の五、六、八及び十四乃至二十、並びに階級の部の附録の七。

四、ソヴェート同盟に於ける生産諸力と生産諸關係

一、新經濟政策の當初に於けるソヴェート同盟の過渡的經濟についてのレーニンの特性記述——五つの社會的經濟的秩序。これらの秩序の生産諸力及び生産諸關係の特性記述。壓倒的な秩序としての小商品的秩序、指導的な秩序としての社會主義的秩序。

二、社會主義建設の、過去の諸段階の特性記述。新經濟政策とソヴェート同盟に於ける經濟的發展の諸段階——復興期及び再建期。新經濟政策の階級的性質。ソヴェート同盟の經濟に於ける社會主義的諸要素の成長——社會主義的工業及び商業の成長、ソフホーズ及びコルホーズの建設、農村經濟の社會主義的再組織。私的資本主義の諸要素の驅逐及び制限。富農の政治からの驅逐及び制限から、全面的協同經營化の基礎の上にたつ富農の清算への移行。社會主義の時期への序幕としての現段階。社會主義經濟の基礎の充分な建設。

三、社會主義の物質的生產諸力。社會主義の基礎としての高度の技術と大工業。ソヴェート同盟の工業化。先進資本主義諸國に追いつき、追ひこすといふ任務。工業化のテンポの諸問題。ソヴェート同盟の生産諸力の發展に於ける技術の役割。再建期へ入るに當つての技術の決定的役割。農村經濟の社會主義的再組織の基礎としての工業化。

四、資本主義的經濟體系及び社會主義的經濟體系。資本主義の現在の腐敗及び近づきつつある

没落を表現するものとしての資本主義諸國に於ける現在の經濟恐慌。人類、技術、科學の一層の發展にとつてのブレイキとしての資本主義的生産諸關係。

五、生産諸力の強力な發展を促進する所の社會關係の形態としての社會主義的生産諸關係。生産の徹底的社會主義的型としての、國營企業に於ける社會主義的生産諸關係。國營企業に於ける搾取の缺如。勞働の社會主義的形態——社會主義競争、突撃隊、對抗計畫。國營企業に於ける『國家資本主義的』特性及び階級的搾取と云ふトロツキー主義者の理論。コルホーズ及び農業コムミュンに於ける生産諸關係の特性記述。

六、社會主義的生産諸力の發展に於いて、プロレタリア××の國家及び××の演ずる役割。社會主義の建設に於いて、計畫及び計畫的經濟政策の演ずる役割。資本主義的方法の行はれる所に於ける無政府状態と、ソヴェート同盟の經濟に於ける計畫的端初の成長。ソヴェート同盟に於ける價值的諸關係の性質——勞賃、價格、利潤、等々。社會主義の行はるる所に於ける經濟生活の計畫的意識的統制。

七、社會主義の時期へのソヴェート同盟の突入、社會主義的經濟の基礎の充分な建設（一九三一年に於ける）。社會主義の時代への突入と關聯しての新經濟政策。各經營獨立會計（ハズラス

チョート）について。ソヴェート同盟に於ける前社會主義的諸關係の殘存と、その改造に關する黨の諸任務。

八、ソヴェート經濟についての妨害者の諸理論（コンドラチエフ、スハーノフ、グロマン、其他）及び過渡的經濟の右翼日和見主義的理解とのこれらの理論の血縁關係。社會主義的生産諸力の發展といふことの代りに、生産諸力『一般』（富農をあてにする）の發展といふ右翼日和見主義的理論。ソヴェート同盟の工業化の、及び協同經營化のテンボの低下といふ右翼日和見主義的理論。トロツキー主義者の超工業化の諸理論との黨の闘争。協同經營化の實施に際しての『左翼』の半トロツキー主義及び『左翼的』偏向との闘争。二つの戦線に於ける黨の闘争——偏向及び偏向者に對する妥協派に對する。與へられた段階に於ける主要な危険性としての右翼的危険性。

文 献

研究資料、附録の二十一——三十一

スターリン、經營家の諸任務について

スターリン、右翼的偏向について。『レーニン主義の諸問題』

スターリン、全同盟共産黨（ボリシエヴィキ）第十六回大會に於ける同中央委員會の政治報告
全同盟共産黨（ボリシエヴィキ）中央委員會プレナムの資料

試問

- 一、社會的人間の自然への適應は動物と比較してどの點に差異があるか？
- 二、何故に社會發展は自然の諸法則によつては説明できないか？
- 三、直接に技術の水準によつて生産の社會的形態を説明できるか？（ソヴェート同盟に於ける生産諸力と先進資本主義諸國に於けるそれとを、又兩者の生産諸關係の型を比較せよ。）
- 四、何故に生産諸力と生産諸關係とは社會的諸現象の説明に於いて出發點でなければならぬか？
- 五、ソヴェート同盟に於ける生産諸力の發展法則と資本主義諸國に於けるそれとの差異。

第一部のための研究資料

一、労働の過程——生産の過程

附録の一

『道具を作る動物』としての人間。

フランクリンは人間を『道具を作る動物』と名付けた。道具の使用と生産とは實に人間の區別的特徴をなしてゐる。ダーウインは人間のみが道具の使用を爲しうるといふ見解に異論を唱へてゐる。彼は、萌芽的な形態に於いて道具の使用が數多の哺乳動物に固有であることを示すところの、澤山の實例を擧げてゐる。勿論彼の見地からならば、即ち所謂『人間の天性』の中には動物のどれかの種に見られないやうな一つの特徴もないといふ意味、又それ故に人間を何等か特異な生物と見るべき、人間を特別の「界」に入れるべき、如何なる根據も斷じて無いといふ意味に於いてならば、彼の言ふことは完全に正しい。然しながら、量的差異が質的差異に推移するもので

あることを忘れてはならぬ。ある動物種に於て萌芽として存在するものが、他の動物種の区別的徴標となり得るものである。このことは特に、道具の使用について言ふ場合に、あてはまる。象は樹の枝を折り、それで以て蠅を拂ひのける。これは興味のある、そして教訓的な事實である。然しながら『象』といふ種の発展の歴史に於いて、蠅との闘争に於ける樹の枝の使用といふことは、確かに、何ら本質的な役割を演じはしなかつた。即ち象は、多少とも象に似たその先祖が樹の枝でもつて蠅を拂ひのけたが故に象となつたのではない。人間の場合はこれと異なつてゐる。オーストラリアの土人の全存在はそのブーメラングに依存し、又現代イギリスの全存在はその機械に依存する。オーストラリア人からそのブーメラングを取り上げて、彼等を農夫にして見よ。そうすれば彼等は必然的に、その全生活様式を、その全習慣を、その全考へ方を、その全『天性』を、變へるであらう。

我々は、農夫にして見よ、と言つた。農業の例で、自然に對する人間の生産的働きかけの過程が、労働要具のみを前提とするものでないことは、明白である。労働要具は生産の爲めに必要な諸手段の一部分たるに過ぎぬ。それ故に労働要具の發達について語らずに、一般的に生産手段の、生産諸力の、發達について語つた方がより正確であらう。尤もこの發達に於ける最も重要な役割

は特に労働要具が引き受けてゐる、或は少くとも今日に至るまで（重要な化學的生産の出現に至るまで）は引き受けてゐたことは、全く疑のないことではあるけれども。

労働要具に於いて人間は、自分の解剖的構造を變へるところの謂はゞ新たな器官を、得るのである。労働要具を使用するまでに發展を遂げた時以來、人間はその發展の歴史に全く新たな外觀をつけ加へた。以前には人間の歴史は、あらゆる他の動物に於けると同じく、その自然的器官の變形といふ事柄に歸着したが、今では人間の歴史は何よりも先づ、その人工的諸器官の完成の歴史、その生産諸力の成長の歴史となつてゐる。

人間——即ち道具を造る動物——はまた同時に、數多の世代の間種々の範圍の大群をなして生活してゐた先祖から出てきたところの、社會的動物である。我々にとつては、何故に我々の先祖が群をなして生活する様になつたかといふことは重要でない、——それは動物學者が説明すべきことであり又現に説明してゐることである——、けれども歴史哲學の見地からは、人間の人工的諸器官がその生活に於いて決定的な役割を演ずるやうになつた時以來、人間の社會的生活そのものが彼の生産諸力の發展の進行に依存して變形するやうになつたと云ふ點を、指摘することが最も重要なことである。（ブレハーンフ、「歴史の一元論的解釋の發展の問題に就いて」）

猿の人間化の過程に於ける労働の役割

労働は凡ての富の源泉である、と經濟學者達は言ふ。労働は、労働に材料を供給するところの自然と並んで、その材料を富に轉化せしめるところのものである。然し労働はまた無限にこれ以上のものである。労働は全人類生活の第一の根本的條件である。まことに或る意味に於ては、労働は人間そのものを創つたと言はねばならない程である。

幾十萬年の昔、地質學者が第三紀と呼ぶ所の地質時代に於ける、正確には未だ分らないところの或る時期に、多分その終りの頃、熱帯の何處かに——恐らく今日ではインド洋の底に沈んでしまつた一つの大きな大陸の上に——特に著しく發達した類人猿の一種族が棲んでゐた。ダーウィンはこの我々の先祖について事實に近い記述を我々に與へてゐる。彼等は非常に毛深く、髯や尖つた耳をもち、樹上に群をなして生活して居つた。

恐らく先づ最初に、この猿は樹によち登る際に手を足とは全く違つた仕事に使ふ生活方法が動

機となつて、平地に於て歩行する際には、次第に手の助けをかりることをやめ直立して歩行するやうになつた。かくして猿から人間への推移の爲めの決定的な進歩がなされた。

今尙ほ生存してゐるすべての類人猿は直立することも出來、兩脚のみで歩行することも出來る。然しそれは出來ると云ふだけのことでありまた非常にたよらない足取りだ。彼等の自然な歩行は半直立の姿勢で、兩手を使つて行ふのである。……然し彼等のいづれにあつても二本足での歩行は臨時の手段以上のものとはならなかつた。

我々の毛深い先祖の間でこの直立歩行が始めて普通となり、時の経過と共に必然的なものとなつたとするならば、これは、手が既に次第に別の仕事をするやうになつてゐたことを豫想する。猿にあつてもまた既に手と足の或る程度に分業が行はれてゐる。既に述べた通り手は樹木をよぢ登る際に、足とは違つた方法で用ゐられる。手は主として、既に下等な哺乳動物が前肢で行ふ如く、食料を摘み取つたり、搦んだりする役目をする。手を以て、或る種の猿は樹間に巢をつくり、殊にチンパンジの如きは雨風を防ぐために樹間に屋根をはる。手を以て、彼等は敵を防ぐ爲めに棒切れを握り、或は果實や石を投げつける。手を以て、彼等は檻の中で、人間のするやうな様々の簡単な作業をする。然しながらまさに茲に於て類人猿の未發達の手と幾十萬年來の労働によ

つて完成された人間の手との間に如何に大なる懸隔があるかが判かる。骨と筋肉の數及びその一般的な排列は兩者とも一致してゐる。しかし最下級の未開人の手さへ如何なる猿の手も眞似ることのできない數百の作業をなすことができる。未だ嘗て如何なる猿の手も、最も粗雑な石小刀をすら造りはしなかつた。

従つて我々の先祖が猿から人間への移行に際し數千年に亘つて次第にその手を適應させるに至つた作業も最初は頗る簡單なものに過ぎなかつたであらう。肉體的の退化と同時に動物に近い状態へ復歸しつゝあると推測されるやうな最下級の野蠻人すらなほこの猿から人間への過渡的生物よりは遙かに高い段階にある。人間の手によつて燧石で始めて小刀が作られるまでには、我々に知られてゐる歴史の時間などは到底お話にならない程の永い年月が経過したであらう。然し決定的な進歩がなされたのであつた。——手は自由となり、ます／＼器用となり、それと共に得られた手の自由な屈伸性が遺傳され、代を重ねるにつれて増大した。

かくして手は労働の器官であるばかりでなく、労働の生産物でもある。たゞ労働により、常に新しい作業への適應により、それによつて獲られた筋肉や靱帯の、永い間にはまた骨格の、特別な發達の遺傳により、更にこれ等の遺傳された進歩を新たな常に複雑化する諸作業に對して應用す

ることによつてのみ、——これらすべての事によつてのみ、ラファエルの繪畫やトルワルドセンの彫像やバガニーニの音樂をつくり出す程の高度の完成を遂げたのである。

然しながら手はそれ丈で孤立してゐるのではない。手は、一個の全體としての且つ最も複雑に組織された有機體の一肢に過ぎなかつた。そして手を發達せしめたものはまた、手がその仕事をしつゝた身體全部を發達せしめた——而かも二重の方法で。

先づ最初に、ダーウインの所謂成長相關法則によつて。この法則によれば、一つの有機體の個々の部分の或る特殊の形態は、常に、その特殊の形態とは一見何の關係もないかのやうな他の部分の一定の形態と關聯してゐる。例へば細胞核を持たない赤血球を有し、後頭が二個の髑狀突起によつて第一の脊椎骨と結合されてゐる總ての動物は、同時に例外なく仔兒の哺乳の爲めの乳腺をもつてゐる。同じく哺乳類にあつて分趾蹄を有するものは通常、反芻の爲めの數個の部分に分たれた胃をもつてゐる。或る形態の變化は他の身體部分の形態の變化をひき起す——たとひ我々はその關係を説明することが未だできないにしても。青い眼をもつた白猫は常に、或は殆ど常につんぼである。人間の手の漸次の完成、及びそれに伴つて足の直立歩行に適應するやうにの發達は、この相關法則によつて有機體の他の部分の上に疑もなく反作用を及ぼしたであらう。けれどもこ

の作用の研究はまだ甚だ少いので、我々はこゝではそれを一般的に確認する以上のことを爲し得ない。

更に一層重要なのは、手の發達が他の有機體に及ぼす直接の明白な反作用である。既に述べたやうに、我々の猿に近い先祖は社會的であつた。あらゆる動物の中で最も社會的な人間が非社會的な直接の先祖から發したものであり得ないことは明かである。手の發達、勞働の發達と共に開始された自然に對する支配は、新しい進歩のある毎に人間の視野を擴大した。人間は自然の對象について絶えず新しい未知の諸性質を發見した。他方、勞働の發達は相互扶助、共同的協力の場合を頻繁ならしめ、この協力の有用なことを各個人に自覺せしむることによつて、必然的に社會の各構成員を相互に接近せしむることに貢献した。要するに、出來かけの人類は、相互に物を言ひ合はねばならぬやうになつた。かゝる必要はその必要を充たす爲めの器官をつくつた。猿の未發達の喉頭は、絶えず強まり行つた抑揚を重ねる事によつて、徐々に、だが確實に變化して行き、口腔諸器官も次第に、區切つた音節を續けて發音することを覺えるに至つた。……

先づ最初に勞働、つゞいて言語——この二つが最も本質的な衝動となつて、その影響の下に猿の脳髓は、根本的構造に於て類似してゐるとは云へ、遙かに大きな、遙かに完全な人間の脳髓

へと次第に轉化していつた。脳髓の發達につれて、その最も密接に關係せる器官即ち感覺器官が發達した。漸次に發達して來た言語がそれに應ずる聽覺器官を必然的に精妙ならしめたのと同じく、脳髓一般の發達は全感覺器官の完成をもたらした。鸞は人間よりも遙かに遠方を見るこゝとが出来るが、人間の眼は鸞の眼より遙かに多くのことを事物に就て見ることが出来る。犬は人間よりも遙かに鋭い鼻をもつてゐるが、人間にとつて諸種の事物の一定の特徴として役立つてゐるやうな香の百分の一も嗅ぎ分けることが出来ない。猿にあつてはその最も未發達の萌芽としてすら殆ど存在してゐない觸覺も、人間の手そのものによつて、勞働を通じて發達してきたのである。脳髓及びそれに附屬する諸感覺、益々明確になつて行く意識、抽象力、推理力等の發達が勞働及び言語に及ぼす反作用は、兩者により大なる發達への常に新しい衝動を與へた。そしてこの發達は、人類が猿から決定的に分化するや否や中止されると云ふやうなことはなく、反つてそれ以來、種々の民族により種々の時代に於てその發達の程度及び方向を異にし、また時によつては局部的な一時的な退歩の爲め中斷されることさへあるが、全體としては更に前進したのであつた。——完成した人類の出現と共に加はつて來た一要素即ち社會によつて、一方に於ては力強く促進され、また他方に於てはより一層特定の方向へと導かれつゝ、前進したのであつた。

樹上に棲んでゐる猿の群から人間の社會が発生するまでには確かに幾十萬年——これは地球の歴史に於ては人間の一生に於ける一秒にも當らない——が経過した。然し遂に人間の社會が出現した。さて猿の群と人間の社會との間に存する著しい差異は何であるか？ 労働である。猿の群は地理的狀態や、或ひは近隣の他の群との抗争によつて割り當てられた食料區域の食料を喰ひつくすだけで満足した。彼等は新しい食料區域を求めて放浪し、争闘するが、然し自然の提供するより以上に——たゞその食料區域を糞小使で無意識に施肥する事はあるが——多くを其の食料區域から獲得することはできなかつた。すべての可能な食料區域が占領されてしまふと、もはや猿の増加は不可能となり、この動物の数はたか／＼増しもせず減りもせずであり得るに過ぎない。然しながらすべての動物の間に食料の濫費が極端に行はれ、これと同時に食料のその後の成長を萌芽の中に絶滅させることがある。狼は獵師と異なり、翌年には仔鹿を供給するであらうところの牝鹿を見逃しはしない。ギリシヤの山羊は若い灌木が成長しきらないうちに食ひつくしてその國のすべての山を禿山にしてしまつた。動物のかゝる『濫採』は種の漸次的な變化に對して重要な役割を演ずる。即ち、その結果これ迄に慣れ來つた食物以外の食物に適應することを餘儀なくされ、これによつて彼等の血液に今までと異つた化學的組成を與へ、かくして全體質も次第に異

つて來るのである。これにひきかへ一旦固定されてしまつた種は絶滅してしまふのである。我々の先祖の人間化に當つてもこの濫採が多大の貢獻をしたことは疑ひない。智慧及び適應力において他のあらゆる動物に遙かに優れてゐたところの或る種の猿族において、この濫採の爲めに食用植物の數が次第に擴大され、その中で食用に適する部分は絶えず食ひ盡くされて行き、要するに食料は益々多様となり、それと共に體內に入りこむ物質、即ち人間化の爲めの化學的諸條件もまた益々多様になつて來らざるを得なかつた。しかしこれら總てはまだ何等本來の労働ではなかつた。労働は道具の製造と共に始まる。我々が發見した中で最も古い道具は何であるか？ 有史以前の人間の發見された世襲財産によつて、及び歴史上最古の諸民族並びに今日存在する最も原始的な野蠻人の生活様式によつて、判斷し得る所の最古の道具は何であるか？ それは狩獵及び漁撈の道具であつた。前者は同時に最初の武器でもあつた。所で狩獵及び漁撈は單純な菜食から肉類の併食への移行行きを前提とする。こゝにまた人間化の重要な一步が進められた。肉食は、身體がその新陳代謝に必要とするところの最も主要な物質を、殆んど出來上つた状態で含んでゐる。肉食は消化並びに、身體内の他の植物性、即ち植物に於ても行はれるやうな諸過程を短縮し、かくして本來の動物性生活の活動の爲めに、より多くの時間、物質及び欲望を獲得し得たの

である。出来かゝつた人間が、植物から離れ、ば離れるほど、それだけ益々彼は動物をも凌駕した。肉食と共に菜食をもする習慣が野性の猫や犬を人間の従僕とした様に、菜食と共に肉食をもする習慣が、出来かゝつた人間に體力と獨立性とを賦與することに主として貢献した。然し最も重要なことは、肉食が腦髓に及ぼした作用であつた。即ち今やこの腦髓の營養と發達とに必要な諸物質が、以前よりも遙かに豊富に腦髓に供給され、それ故に腦髓は代を經るに従つて、より速かに、より完全に發達することができた。……

肉食は重大な意義を有する二つの新しい進歩に導いた。即ち火の使用と動物の飼育とであつた。火の使用は、食物を謂はゞ半消化の形で口の中へ送りこむことによつて消化の過程を益々短縮せしめたし、動物の飼育は、狩獵と並んでこれに代る新しい規則的な仕入元を開くことによつて、肉食物を一層豊富にし、更にそのみでなく乳及びその製品の形で一つの新しい、營養素含有の點で肉類と少くとも同じ價値のある營養品を供給したのであつた。かくしてこの兩者は直接的には人間にとつて新しい解放手段となつた。その間接的な作用を個々の點にまで立入つて論ずるとは、此處ではやめるが、とも角兩者は人間及び社會の發達にとつて非常に重要なものであつた。人間はすべての食用に供し得べきものを食することを知つたと同様に、またあらゆる氣候の下

に生活することをも知つた。人間は地球上の住み得る場所の全部に擴がつた。人間こそ、このことを爲しうる唯一の動物である。あらゆる氣候に慣れてゐる他の諸動物は、自分でそれを覺えたのではなくて、たゞ人間に従つてこれを覺えたに過ぎない。例へば家畜や害蟲の如きがそれである。そして年中同一の高溫の最初の故郷から、一年が夏と冬とに分れてゐるより寒い地方への移住は新しい諸欲望。即ち寒氣及び濕氣を防ぐ爲めの住居及び衣服を生み、それは新しい勞働領域、従つて新しい活動を生んだのであつた。此の新活動は又人間を益々動物から區別せしめた。

個人に於けるばかりでなく社會に於ても亦、人間は手、發聲器官及び腦髓の共同作業によつて益々複雑な操作を行ひ、益々高い目標を樹立しそれに到達することが出来るやうになつた。勞働そのものも代を經るに従つて、異なつた、より完全な、より多方面なものとなつた。狩獵及び牧畜に次いで耕作が現はれ、さらに紡績及び織布、金屬の加工、製陶、航海が現はれた。商業及び工業と並んで終には藝術及び科學が現はれ、種族から民族及び國家が生まれた。法律及び政治が發達し、かくてこれ等と共に、人間的存在の人間の頭腦の中に於ける空想的映像、即ち宗教が生まれた。先づ最初に頭腦の產物として現はれ人間社會を支配するかに見えたすべてこれ等の映像の爲めに、勞働する手の地味な生産物は背後にかくれてしまつた。勞働を計畫する頭腦の所有者は既

に社會發展の極く初期の段階に於てすら、(例へば單純な家族に於てすら)計畫された勞働を彼自身以外の他の者の手によつて行はしめることが出來たので、この傾向はますます大となつた。急速に進歩した物質文明に於けるすべての功績は頭腦に、即ち腦髓の發達と活動に歸せしめられた。人間は自己の行爲をその欲望からでなく(その際欲望は頭腦に反映し、意識される)、思惟から説明することに慣れて來た——斯くして時の經過につれて、特に古代世界の没落以來人々の頭を支配したかの觀念論的世界觀が生れた。觀念論的世界觀は今日でも尙ごく一般に行はれて居り、その結果ダーウイン學派の唯物論的自然科學者すらも人類の發生について何等明確な觀念を持ち得ないのである。といふのは彼等がかゝるイデオロギーの影響によりて、勞働がその際に演じた所の役割を認識しないからである。

動物は、既に述べたやうに、人間ほどにはないが、やはりその活動によつて外界の自然を變化する。そして我々が既に見た如く彼等によつて完成された環境の變化はまた逆に、始め變化を與へた者の上へ反作用を及ぼす。何となれば自然に於ては如何なるものも個々別々には生起しないから。あらゆるものは他のものに作用し、また逆に作用される。そしてこれ等の全面的な運動及び交互作用の忘却が主として、我が自然科學者等に最も簡單な事物をさへ明確に洞察すること

を妨げてゐるのである。我々は山羊が如何にギリシヤの森林の繁茂を妨げたかを見た。またセントヘレナ島に於ては最初の上陸者が残して行つた山羊や豚の爲めに、島の昔からの植物が殆ど絶滅してしまつたが、その爲めに、後の航海者や植民者が持つてきた植物が繁茂し得るやうな土壤が用意されたのであつた。然し動物はその環境に對して繼續的な作用を及ぼしはしても、それは計畫的に行はれたのではなく、この動物自身にとつてすら偶然的である。然るに人間が動物から遠ざかれば遠ざかる程、それだけ益々人間の自然に及ぼす作用は豫定的計畫的な、前以て知られた一定の目標に向けられた行爲の性質を帯びてくる。動物はそれが何ういふ結果になるかを知らずして、一定の地域の植物を絶滅させる。人間も植物を絶滅させるが、それはたゞそのあとの土地に穀物の種を播き、或は樹木や葡萄を栽培するが爲めであり、彼はこれによつて播種の數倍を收穫することができることを知つてゐるのである。人間は有用植物や家畜を一地方から他の地方に移し、かくして全世界の植物及び動物の生活を變化させる。そればかりではない。動植物は人間の手で、人工的飼育、培養によつて、再び元の動植物と似もつかぬまでに變化させられる。我々の穀物の先祖である野生の植物は今日ではいくら探しても見つからない。非常に種類の多い今日の犬や、同じく無數の種類今日の馬が、如何なる野生の動物から出てきたかは、未だに争

はれてゐる。

なほまた、計畫的豫定的な行爲の能力を動物に認めないのは以ての外であることも、もとより自明である。その反對である。すでに原形質、即ち生命をもつた蛋白質が存在し且つ反應する所、換言すれば原形質が外部からの一定の刺激の結果として單純ではあるが特定の運動を起す所ではどこでもこの計畫的な行爲が常に萌芽として存在してゐるのである。斯かる反作用は、神経細胞については言はずもが未だ如何なる細胞も存在してゐない所にも現はれる。食蟲植物がその餌物を捕へる方法は全く無意識的ではあるが、同時にまた或る點に於ては計畫的のものとして現はれる。動物にあつては、意識的計畫的な活動の能力が、神経系統の發達に應じて發達し、哺乳類に於てはこの發達は既に高度の段階にまで達してゐる。イギリスの狐狩に於ては狐がその追手から逃がれる爲めに土地に關する廣い知識を如何に正確に利用するかを知つて居り、また足跡をくらますあらゆる地の利を如何によく知つて居り且つ巧妙に利用するかを、毎日觀察することが出来るであらう。人間との接觸によつてより高度に發達した今日の家畜に於ては、我々は人間の小兒と全く同一の水準にあるところの狡猾な悪戯を日々見ることが出来る。……然しすべての動物の如何なる計畫行爲も彼等の意志の刻印を地上に押すことを爲し遂げ得なかつた。これは人間の

みが爲し得た所であつた。

要するに動物はたゞ外界の自然を利用し、且つたゞ自らの存在によつて自然の中に變化を生ぜしめるに過ぎぬ。然るに人間は自然を變化せしめてそれを自己の目的に役立て、それを支配する。そして此れが人間と他の諸動物との間に於ける最後の本質的な差異であり、而してこの差異を生ぜしめるものは、こゝでもまた労働である（向上）。（ヘンゲルス、自然辯證法）

附録の三

基礎的契機としての生産

唯物史觀は、生産が及び生産に次では生産物の交換が一切の社會秩序の基礎であると云ふ命題、即ち歴史上に現はれたあらゆる社會に於て生産物の分配、及びこの分配と共に階級への又は身分への社會の分岐は、何が如何に生産され又その生産された物が如何に交換されるかによつて定まるといふ命題から出發する。これに従へば、一切の社會的變動及び政治的變革の窮極の原因は、人間の頭腦の中に求むべきでなく、即ち永劫の眞理や正義を洞察することの進歩の中に求む

べきでなく、生産方法及び交換方法の變動の中に求むべきである、換言すればそれは哲學の中に求むべきでなく、當該の時代の經濟の中に求むべきである。(エンゲルス、反チューリング論)

一 生産諸力と生産諸關係

附録の四

唯物史觀

人間は彼等の生活の社會的生產をなすに當つて、特定の、必然的の、彼等の意思から獨立した諸關係、即ち生産諸關係——彼等の物質的生產諸力の或る特定の發展段階に對應するところの生産諸關係——を結び合ふ。この生産諸關係の總和は、社會の經濟的構造、即ち實在的基礎——この基礎の上に法律及び政治の上層建築が聳え立ち、又この基礎に特定の社會的意識諸形態が對應する——を形づくつてゐる。物質的生活の生産方法は社會的の、政治的の、及び精神的の生活過程一般を制約する。人間の意識が彼等の存在を規定するのではなくて、逆に人間の社會的存在が

彼等の意識を規定する。社會の物質的生產諸力はその發展のある一定の段階に於て、現在の生産諸關係——その内部でこの時まで生産諸力が發展してきたところの——と或はたゞこれの法律的表現に過ぎないのであるが、所有諸關係と矛盾するやうになる。この諸關係は、生産諸力の發展形態から、その桎梏と變ずる。そこで社會××の時代が到來する。經濟的基礎の變動と共に、巨大な上層建築の總てが、或は徐々に或は急激に變革される。斯かる變革を考察するに當つては常に、經濟的生產諸條件についての自然科学的に正確に確證せらるべき物質的變革と、かの法律的、政治的、宗教的、藝術的、或は哲學的の、簡單に言へば觀念的の諸形態によつて人間がこの「生産諸力と生産諸關係との現實の——譯者」衝突を意識し、そしてこれと闘ふこと、とは區別しなければならぬ。或る個人の人となりを判斷するに當つて、其の人が自分自身のことを何う考へてゐるかには據らないのと同じで、斯かる變革の時代をその時代の意識から判斷することはできない。むしろこの意識が、物質的生活の諸矛盾から、社會的生產諸力と生産諸關係との間に現存する衝突から説明されなければならぬ。ある社會構成は、その構成で窮屈でないところのあらゆる生産諸力が發展してしまふ以前には、決して滅亡しないし、また新たな、より高度な生産諸關係は、その存在の爲めの物質的諸條件が舊社會そのもの、胎内で成熟するまでは決して代つて出

くるものではない。だから人類は常に自から解決しうる課題をのみ問題とする。何となれば、一そう正確に観察すると、何時でも課題そのものが、その解決の爲めの物質的諸条件の既に存在してゐる——或は少くとも生成の過程にある——場合にのみ發生することになつてゐるからである。

極く大づかみに言へば、アジア的生産方法、古代的生産方法、封建的生産方法、及び近代ブルジョア的の生産方法を、社會の經濟的構成の進歩の段階であるといふことができる。ブルジョア的生産諸關係は、社會的生産過程の敵對的形態の最後のものである。ここに敵對的と云ふのは個人的敵對の意味ではなくて、個人の社會的生活條件から生ずる敵對の意味であるが、然しブルジョア社會の胎内で發展して行く生産諸力は、同時にこの敵對の克服の爲めの物質的條件を創造して行くのである。だからこの社會構成で、人類社會の前史が終結する。(マルクス「經濟學の批判の爲め」)

附録の五

社會の發展に關するマルクスの學說

「資本論」においてマルクスは、博學と論理的力との結合の見本を與へた」とミハイロフスキー氏は言ふ。斯く言ふミハイロフスキー氏は、すばらしい空論と空虚な内容との結合の見本を吾々に與へた——と或るマルクス主義者は指摘した。しかもこの指摘は全く正しい。事實、マルクスの此の論理的力は何處に現はれたか？ それは如何なる結果を與へたか？ 右引用のミハイロフスキー氏の長講義を讀むと、すべてこの論理的力が最も狹義の「經濟理論」に向けられてゐた、而もそれだけであつたかと思はせるかも知れぬ。ミハイロフスキー氏はマルクスがその論理的力を發揮せる領域の狹隘なる限界をより力強く描き出す爲めに、「隅から隅まで行届いた精密さ、緻密さ、誰にも知られてゐなかつた理論家達」等を強調する。そこでマルクスは宛も本質的に價值ある新しい陳述を何等、此等の諸理論の構成方法の中に齎さなかつたかの如くである。また彼は宛も經濟科學の諸領域を從來の經濟學者の手にあつた舊態のままにしておいて、それを擴大せず、此の科學そのものの「全然、新規の」理解を導き入れなかつたかの如くである。所が「資本論」を讀んだ者は何人もこの事が大間違である事を知つてゐる。此の事については十六年前にミハイロフスキー氏が小ブルジョアのユー・ジュコフスキー氏と論戦した時に、マルクスについて書いた事を思ひ出さざるを得ない。當時は時世が異つて居り、彼の感受性がつと新鮮であつた

のかも知れぬが、兎も角も然しミイハイロフスキー氏の論文の論調と内容のみは全然、かくの如きものではなかつた。

『この著作の窮極の目的は近代社會の發展法則(原本には、經濟的運動法則とある)を示すことである、とカール・マルクスはその「資本論」の中に於て語つてゐる。彼は自己の綱領を嚴格に守つてゐる』とミイハイロフスキー氏は一八七七年にはかく答へた。吾々は此の批評家の認むる所の嚴格に守られたこの綱領なるものをより綿密に考察しよう。この綱領は「近代社會の經濟的發達法則を曝露する」ことを目的とする。

既にこの公式そのものが説明を要する若干の問題を吾々に當面せしむる。マルクス以前のすべての經濟學者が社會一般に就いて説明してゐる時、何故にマルクスはかく「近代」社會に就いて語つてゐるか？ 彼は如何なる意味で「近代」なる言葉を使用するか？ 彼はこの近代社會を如何なる徵表に依つて特に分別するか？ 更にまた社會の經濟的運動法則とは一體何を意味するか？ 吾々は經濟學者から始終次の事を聞かされてきた——而もこれは「ルースコエ・ボカツトヴ」に所屬する一派の政論家及び經濟學者諸君の、分けても好む所の一つの觀念である——即ち諸々の價値の生産のみは唯一の經濟的法則に従ふが他方、分配は政治に依屬する、即ち官憲、及イ

ンテリゲンチヤ等の側よりの社會に對する作用を構成する所のものに依屬すると。マルクスは如何なる意味で社會的運動の經濟的法則を語り同時にこの法則を自然法則と稱するか？ 社會現象の領域は特に自然史的現象の領域とは異なる。従てまた前者の研究の爲には「社會學に於ける全く特殊の主觀的方法」を適用しなければならぬといふ事について、かくも多くの吾國の社會學者諸君が夥しい紙片を書き盡してゐる時、マルクスの意味は如何に理解すべきであるか？

すべて此等の疑惑は自然的に、また必然的に生じてくる。勿論、完全な無智のみは「資本論」を語り乍ら、此等の疑惑を見逃し得るのである。此等の問題を考究する爲に、吾々は「資本論」の同じ序文の中から尙一箇所を豫め引用して置く——それは全部で下の如き數行である。

『私の見地は——とマルクスは言ふ——社會の經濟的構成の發達を自然史的過程として見る所に在る。』

まさしく茲に「資本論」の根本觀念が含まれて居る事、また——吾々が聞いた如く——嚴として且つ稀に見る論理的力を以て此の根本觀念が描かれてゐる事を知る爲には、序文の中の前記引用の僅かの二箇所だけを簡單に對比するだけで充分である。吾々はすべて此の事に就ては先づ何より二つの事情を指摘する。マルクスは一個の「社會」經濟的構成、資本主義的構成のみに就て



語つてゐる、即ちマルクスは此の構成のみの發達法則を研究したのであつて、その外の構成の發達法則は研究してゐない事を語つてゐる。これが第一の事情である。第二に吾々はマルクスに依る彼の結論仕上げの方法を指摘する。此等の方法は、吾々が今、ミハイロフスキー氏から聞いたやうに、『對應せる事實の綿密なる研究』より成つてゐた。

扱て今度は吾が主觀的哲學者がかくも巧妙に度外視しようと企てた『資本論』の此の根本觀念の分析に移らう。社會の經濟的構成なる概念は本來、何を意味するか？ また如何にしてかかる構成の發展を自然史的過程と見做すことが出來、且つ見做さねばならぬか？——これが今吾々に當面する問題である。私の既に示して置いた如く、舊式の（ロシヤにとつてではない）經濟學者及び社會學者の立場よりは社會Ⅱ經濟的構成の概念は全然、無用のものである、彼等は社會一般に就いて説く。彼等は社會一般とは何ぞや？ 社會一般の目的及び本質は如何？ 等々に就てスペンサー一派と論争する。かゝる議論に於ては此等の主觀的社會學者は次の如き論據の上に立つてゐる。即ち社會の目的はその全成員の利益である、従つてまた正義はかかる組織を要求する。

此の理想的（「社會學は或るユトローピヤより出發しなければならぬ」——主觀的方法の著述家の一人、ミハイロフスキー氏の此等の言葉は彼等の態度の本質を立派に特色づけてゐる）組織に相應し

い秩序は變則的のものであつて、排除すべきである、と。『社會學の本質的任務は——と例へばミハイロフスキー氏は推論する——「社會的條件——その下に於て人間の本性のあれやこれやの要求が満足を受するやうな社會的條件——の闡明にある」と。諸君は見るであらう。此の社會學者に關心を持たせるものは、人間性を満足せしむる社會のみである。彼は少數者による多數者の奴隷化の如き『人間の本性』に相應しない現象に基き得る或る社會構成には全く關心しないのである。諸君はまた同じやうに見るであらう。此の社會學者の立場よりは社會の發展を自然史的過程として見る事は問題となり得ないのである。『社會學者は或るものを望ましきもの、或ひは望ましからざるものとして認めた後、此の望ましきものの實現條件、或は望ましからざるものの排除條件』——『斯くくの理想の實現』條件——を發見せねばならぬ、と同じミハイロフスキー氏は推論してゐる。それのみではない、發展さへをも問題となし得ないのである。『望ましきもの』からの種々なる背馳、即ち人間が聰明でなく、人間の本性の要求するものを充分に理解し得ず、またかかる理性的秩序の實現條件を發見し得なかつた結果、歴史上に起る『缺陷』、これのみが問題となり得るのである。社會Ⅱ經濟的構成の自然史的過程に關するマルクスの根本觀念が社會學の名を僭稱するこの小供らしい修身を根底から覆すものであることは明白である。マルクスは如何にして此

の根本觀念を完成したか？ 彼は社會生活の種々の領域より經濟的領域を區分することによつて即ちあらゆる社會的諸關係から、『生産諸關係』を爾餘の總ての諸關係を決定する基礎的、本原的諸關係として、區分する事に依つてそれを爲した。マルクス自身は此の問題に關する自己の立論行程を次の如く書いた。

「私が私を悩んだ疑問を解決する爲に取りかかつた第一の仕事はヘーゲルの法律哲學に對する批評的分析であつた。此の仕事は私を次の結果に導いた。即ち法律的關係は政治形態と全く同じく只一つの法制的及び政治的基礎から導き出したり、説明したりすることは出来ない。所謂人間精神の一般的發展からこれを導き出し、説明する事は尙更に不可能である。それらの根底は只一つの物質的、生活的、諸關係の中に包含されてゐる。それ等の諸關係の總體を、ヘーゲルは十八世紀の英國著述家の例にならつて、『市民的社會』と名付けてゐる。市民的社會の解剖はこれを經濟學の中に求むべきである。後者の研究が私を導いた所の結果は次のやうに簡略に公式化する事が出来る。人類は物質的生産に於て或る相互關係に、即ち「生産諸關係に」、入りこまねばならぬ。後者は常に彼等の經濟的力が所與の時代に於て有する生産性、發展段階に相應する。此等の生産諸關係の總和は社會の經濟的構造、眞正の基礎をなすものであつて、その上に政治上及び法制上の

上層建築が聳え立ち、またそれに一定の社會的意識形態が相應する。斯くして生産的秩序が社會的、政治的の、また精神的の、一般生活過程を條件づける。人間の存在がその意識に依存しないばかりでなく、反對に後者そのものが人間の存在に依存するのである。然し生産力はその發展の或る段階に於て、人間の生産關係との相互衝突に到達する。此の結果、生産力は生産關係の法制的表現の役をなすもの、即ち財産的秩序に矛盾し始める。その時、生産關係は生産性に適應することをやめて、それを妨害し始める。茲に於て社會的變革の時代が始まる。經濟的基礎の變化と共にその上に聳え立つところのあらゆる巨大な上層建築も多かれ少かれ徐々に或は急激に變化する。此等の變革を觀察するに當つては、自然科学的に論證され得る所の生産條件上の物質的××と法制的、政治的、宗教的、藝術的、哲學的、つまりイデオロギイ的形態に於ける××とを常に嚴格に區別せねばならぬ。此等のイデオロギイ的形態に於て此の矛盾に關する思想が人間の意識の中へはいり、此の矛盾の中から隱然たる形で闘争が発生する。吾々は個人を判斷するに當つて、その人の自ら考ふる所に依らないのと同じく、變革時代を判斷するにもその時代自身の自己意識に依つて判斷するは不可能である。反對に此の自己意識は物質的生活の矛盾、即ち生産條件と生産性の條件との間の衝突に依つて説明さるべきである。……大體より見たアジア的、近代の、封建的

及び近代ブルジョアの、生産秩序は社會の經濟的構成史に於ける列次的時代として觀察することが出来る。』(此の節の内容は上掲の附録の四のそれと同じ。附録の四はマルクスの原文から直接に譯し、此處ではレーニンのロシア譯から譯したから文句が所々相異してゐる——譯者)

社會學に於ける唯物論の此の觀念そのものが既に天才的觀念であつた。勿論、「一時は」此の觀念はまだ假説に過ぎなかつた。だがその假説は歴史的、並びに社會的問題に對する嚴格なる科學的態度の可能性を始めて作り出したものであつた。今日に至るまで社會學者諸君は最も簡單なる而も生産關係の如き本源的なる關係にまで下降することが出來ずに、直ちに政治、法制的形態の探查、研究に携はつた。彼等は此等の諸形態が一定時代に於ける人類の或る觀念から發生せる事實に當面した——而も彼等はそこで停屯した。されば社會的諸關係は宛も人間に依つて意識的に構成さるるかの如き結果になつた。然し「社會契約」の觀念(此の觀念の痕跡は空想的社會主義のあらゆる體系の中に極めて明白である)の中に完全なる表現を見出した此の結論は凡ゆる歴史の觀察に全く矛盾するものであつた。社會の諸成員が彼等の生存を支配する所の社會的諸關係の總體を、確定的な、統一的な、かゝる原則に依つて一貫せられた、或るものとして表象した事は嘗てなかつた、また現代でもさうである。反對に大衆は此の諸關係に無意識的に適應する。彼等

は特殊的歴史的社會關係に關する表象と同じく此等の諸關係に關する表象を持つことは少い。だから例へば人間がその下に永い世紀の間、生活して來た交換關係の説明は極く最近に至つて始めて與へられたのである。唯物論は人間の此等の社會的觀念そのものの起源に對して、ヨリ深刻な分析を續けて、此の矛盾を排除した。觀念の行程が事物の行程に依屬するといふ唯物論の結論のみが科學的心理學に一致する。更にまた他面、此の假説は社會學に依つて始めて科學の段階にまで高め上げられた。今日まで社會學者達は、社會現象の錯綜せる網の中に於て、重要な現象と重要ならざる現象とを分けること(これが社會學に於ける主觀主義の根本である)に苦心した。而も彼等はかゝる區分の爲めの客觀的規準を見出し得なかつた。唯物論は「生産的諸關係」を社會の構造として取り出し、また此等の關係へ反復性の一般科學的規準(これの社會學への適用は主觀主義者の否定せる所である)の適用を可能ならしめて、完全なる客觀的規準を與へた。社會學者達がイデオロギー的社會關係、即ち現實的に生起する前に人間の意識(即ち云ふまでもなく「社會關係」の意識を常に問題としてゐるのであつて、その外のものの意識を問題としてゐるのではない)を通過する關係、に局限されてゐた間は、彼等は種々の國に於ける社會現象上の反復性と法則性を發見し得なかつた。彼等の學は精々、此等の現象の記述、素材の蒐集に過ぎなかつた。物質的社

會關係、即ち人間の意識を通過せず形成さるゝ關係（人間は生産品を交換しつゝ、其處に社會的生產關係があるといふ事は意識さへせず、生産關係へ入り込めるものである）の分析は反復性と法則性を認知し、且つ種々の國の諸秩序を「社會構成」と云ふ一個の根本概念に普遍化する可能性を直ちに與へた。かゝる普遍化のみが社會現象の記述（及び理想の見地よりの評價）より轉じて、その嚴密なる科學的分析へ移り行く可能性、例へば「何が」甲の資本主義國と乙の資本主義國とを區別せしむるかを辯別し、またすべて此等の諸國に「何が」共通なるかを研究するが如き、嚴密なる科學的分析へ移り行く可能性を與へた。

最後に第三に、社會諸關係の生産諸關係への還元、後者の生産力の水準への還元、のみが自然歴史的過程としての社會構成發展の表象の爲の強固なる基礎を與へたが爲に、此の假説が始めて科學的社會學の可能性を創造したのである。かゝる見解がなくては社會科學の不可能なる事は自明の理である。（例へば主觀主義者は歴史現象の合法則性を承認し乍ら、尙もその進化を自然史的過程として考察する事が出来なかつた——それは彼等が人間の社會的觀念及び目的に停屯して此等の觀念及び目的を物質的社會的諸關係に還元し得なかつたからこそである。）

所で四〇年代に此の假説を發表したマルクスは材料の實際的研究に向つたのである。彼は諸々

の社會＝經濟的構成の中から一つの形態、即ち商品經濟の體系を取上げる、そして（彼が廿五年以上も研究した）莫大な材料に基いて、此の形態の作用及び其の發展の諸法則を最も詳密に分析する。此の分析は社會の成員間の生産的諸關係に局限された。マルクスは問題を説明しようとして、此等の生産的諸關係の外に立つ所の或るモメントに一度も訴ふることなく、社會的經濟の商品的組織は如何にして發達するか？ それは（既に生産關係の領域内に於て）ブルジョア及びプロレタリアートの對立的諸階級を創造しつつ、如何にして資本主義的組織に轉化するか？ またそれは如何にして社會的勞働の生産性を發展せしめ、且つ如何にしてその事自身に依つて此の資本主義的組織そのものゝ基礎に對して和解除し難き矛盾となるところの要素を齎すか？ 等々を知る可能性を與へる。

これが「資本論」の「骨組」である。だが問題の主要點はマルクスが此の骨組に満足しなかつた事、普通の意味の一個の「經濟理論」に局限されなかつた事、所與の社會構成の構成と發展を「専ら」生産關係に依つて「説明」し乍ら、尙も此等の生産諸關係に適應する上層建築を常にそして到る處、精査し、血と肉を以て此の骨組を包んだといふ事の中にある。斯くして「資本論」は偉大なる成功を收めた。故に「ドイツ經濟學者」の此の著書はあらゆる資本主義的社會構成を、その

實生活的方面、生産關係に内屬する階級對立の現實的社會現象、資本家階級の支配を擁護するブルジョア的的政治的上層建築、自由、平等、等々のブルジョア觀念、及びブルジョアの家族關係を含む[、]きたま[、]を讀者に開陳した。ダーウインとの比較が全く適切である事は今や明白である。

「資本論」は實際的資料の全モンブラン山の如き大量を蔽ふところの相互に最も緊密に連繋せる普遍化觀念の若干に外ならぬ。若し何人か「資本論」を讀んで此等の普遍化觀念を發見し得なかつたとしても、それはも早やマルクスの罪ではない。彼は序文に於てすら——吾々が見たやうに——此等の觀念を示してゐるのである。そのみではない、かゝる比較は外面的（何故にこの外面が特にミハイロフスキー氏に興味を持たせたかは分からない）許りでなく、内面的にも正當である。ダーウインは動植物の種を、何等連繋する所のない、偶然的な、「神の造り給ふた」不變的なものとして見る見解を廢して、初めて生物學を完全なる科學的土臺の上に置き、種の可變性とそれ等の種の間^に於ける遺傳性を定立した。それと同じくマルクスも支配者の意志（或は全く同じ事だが、上流社會及び政府の意思）に依るあらゆる變革を容認する所の、また偶然的に生れて偶然的に變化する所の、個人の機械的集體として社會を見る見解を廢して、初めて社會學を科學的土臺の上に置いた、そして社會＝經濟的構成の概念を所與の生産諸關係の總和として定立し、

またかゝる諸構成の發展が自然史的過程である事を定立した。

現在では——「資本論」の出現以來——唯物史觀はも早や假説ではなくて、科學的に立證せられた理論である、吾々が或る社會構成——正しく社會構成を云ふのであつて、或る國、或は國民或は進んで階級等々の状態を云ふのではない——の作用及び發展を科學的に説明する別の企てをしない限り、即ち唯物論が爲し得たのと全く同じく、「適應せる事實」の中に秩序を齎し、また嚴密なる科學的説明の下に或る構成の生ける形像を與へると云ふ如き別の企てをしない限りは、それは唯物史觀は社會科學と同義語であらう。唯物論はミハイロフスキー氏が考へるやうに、「とり分け歴史の科學的理解」を示すものではなくて、歴史の唯一の科學的理解を示すものである。（レニン、人民の友とは何ぞや、川内唯彦譯）

附録の六

労働の過程と、生産諸力の諸要素

労働は先づ第一に人間と自然との間の過程、人間が自然との物質代謝を自分自身の行爲によつて媒介し、規制し、統制するところの過程である。人間は自分自身、一の自然力として自然の物質に立ち向つて行くのである。彼は自分の身體についてゐる自然的諸力、腕と脚、頭と手を動か

して自然の物質を自分の生活に用ゐ得る様な形態で手に入れる。彼はこの運動によつて彼の外にある自然に働きかけそして自然を變化させ、これによつて同時に自分自身の性質を變化させる。彼は自分の性質の中に眠つてゐる諸能力を發展させ、彼の諸力の放任的活動を彼自身の制御に服せしめる。我々は此處では、最初の、動物的な、本能的な労働形態は問題としない。労働者が彼自身の労働力の販賣者として市場に出てくるところの状態と並ぶと、人間労働が未だその最初の本能的形態を脱ぎ棄て、しまつてゐなかつたところの状態は、原始的背景の中へ押しつけられてしまつてゐる。我々は、全く人間のみが有する労働形態をとつてゐるところの労働を前提とする。蜘蛛は機織工の作業に類似する作業をなし、蜜蜂はその蜜蠟の巢の構築によつて幾多の人間の建築師を恥ぢしめる。けれども最劣等の建築師をすらも最初から、最優秀の蜜蜂よりも秀れさせるところのものは、建築師は蜂の巢を蜜蠟で構築する以前に彼の頭の中で構築してゐるといふ點である。労働過程の最後には、その過程の最初に當つて既に労働者の表象の中に、即ち既に觀念的に存在してゐたところの結果が出てくるのだ。彼はたゞ、自然のものの形態變化を生ぜしめるに止まるものではない。彼は自然のものの中に於て、同時に彼の目的を實現する。この目的を彼は意識してゐるのであり、この目的が法則として彼の行動の特性及び仕方を規定するのであり、こ

の目的に彼は彼の意思を從屬させなければならぬのである。そしてこの從屬は孤立した行爲ではない。労働をするところの諸器官の緊張の他に、合目的な意思——これは注意として外部に現はれる——が労働の全繼續期間にわたつて必要である。しかもこれは、その労働がそれ自身の内容及び遂行の方法の點で労働者を惹きつけることが少ければ少いほど、また從て労働者がその労働を彼自身の肉體的及び精神的の諸力の放任的活動として享樂することが少ければ少いほど、それだけ益々さうなのである。

労働過程の簡單な諸契機は第一、合目的な動き、即ち労働そのもの、第二、労働が働きかけるところの對象、それから第三、労働が働きかけるに當つて用ゐられるところの手段。

土地（經濟的には水もまたこの中に含まれる）は、人間に始源的に食料、即ち出來上つた生活資料を與へてゐるものであつて、人間が何もしなくても人間労働の一般的對象として存在してゐる。一切の物は、労働によつてその物を土地との直接的關聯から引き離すに過ぎない場合には、天然に存在する労働對象である。魚がその生棲元素、水から引き離される、即ち捕へられる場合、樹が原始林で伐り倒される場合、鑽石が鑛脈から碎きとられる場合がそれである。これに反して労働對象がそれ自身既に、謂はゞ以前の労働によつて濾過されてゐる場合には、我々はそれを原

料と名付ける。例へば砕きとつた鑽石が、今度は洗滌されることになる、さうである。すべての原料は労働対象である、だがあらゆる労働対象が原料なのではない。労働対象は、既に労働の媒介によつて或る變化を受けてゐるときにのみ、原料なのである。

労働手段は物又は物の集合であつて、それを労働者が自分と労働対象との間へ押しこんで、この対象へ働きを傳達するのに使ふものである。労働者は、物の機械的、物理的、化學的の諸性質を利用し、以てこれらの物を力的手段として他の物に對して、彼の目的通りに、働きかけさせるのである。労働者が直接に支配する対象は——出來上つてゐる生活資料例へば果實をとる場合を除き（この場合には彼自身の身體諸器官だけが労働手段として用ひられてゐるのである）——労働対象ではなくて、労働手段である。斯くて彼は彼の周圍の物を、彼の働きの器官に變ずるのである。この器官を彼は彼自身の肉體諸器官にくつつけ、聖書には何と書いてあらうと、彼の自然的姿體を延長するのである。土地は彼の始源的な食料品庫であると共に、彼の労働手段の始源的な武器庫である。土地は彼に例へば石を與へ、彼はこの石を、投げたり、こすつたり、壓したり、切つたりなどするのに使ふ。土地そのものが労働手段になる、が土地が農業に於て労働手段として用ひられるのには更に全系列の他の労働手段、及び既に比較的高度の發展を遂げた労働

力、を前提する。苟も労働過程が多小なりとも發展してさへゐるならば、もう加工された労働手段が必要である。最古の洞窟の中にすら我々は石の道具や石の武器を見出すのである。人間の歴史の最初に於ては加工された石、木材、骨、貝と相並んで馴らされたところの、即ちそれ自らが既に労働によつて變化され、飼育されてゐるところの、動物が労働手段としての主たる役割を演じてゐる。労働手段の使用と創造とは——萌芽としてこそ既に或る種の動物の具ふるところであるとは言へ——人間獨特の労働過程の特徴をなすものである、だからフランクリンは人間を、「道具を作る動物」と定義するのである。労働手段の遺物は滅亡した經濟的社會構成を判斷するについて、遺骨の構造が滅亡した動物の身體を認識するについて有するのと同じの重要性を、持つてゐる。經濟上の各時代を區別するものは、何が作られるかではなく、如何にして、如何なる労働手段を以て作られるかといふことである。労働手段は人間の労働力の發展の測度器であるに止まらず、労働が爲される際に於ける社會的諸關係の表示器でもある。労働手段そのもの、中では、總體として生産の骨格系統及び筋肉系統と名づけ得るところの機械的労働手段の方がかの單に労働対象の容器として役立つに過ぎないところの、總括して生産の脈管系統と言ひ得るところの労働手段、例へば管、樽、籠、瓶等々よりも、一定の社會的生產時代の特徴として遙かに決定的なも

のである。後の方の労働手段は、化学工業が行はれるやうになつて始めて重要な役割を演ずるやうになるのである。

廣義に於ては労働過程の手段といふ中には、労働の働きかけをその対象へ媒介し、従つて何等かの仕方での活動の導體として役立つ物のほか、苟も労働過程が行はれる爲めに必要な一切の對象的諸條件がはいる。斯かる對象的諸條件は直接に労働過程へ入りこむものではないけれども、然しそれなくしては労働過程は全く、又は不完全にしか、行はれ得ないのである。この種の労働手段の中で労働によつて既に媒介されてゐるものは、例へば建物、運河、道路等々である。

斯くて労働過程に於ては人間の活動が、労働對象について最初から目的とされてゐたところの變化か、労働手段を通して惹き起すのである。そして労働過程は生産物となつて消え失せる。労働過程の生産物は使用價值、即ち形態の變化によつて人間の欲望に適合せしめられた自然の材料である。労働は斯くしてその対象と結合したのである。労働は對象化され、対象は労働で加工されたのである。労働者の側では動の形態で現象した所のものが、今や生産物の側では靜的性質として、存在の形態で現象する。労働者は紡績したのであり、そしてその生産物が紡績品である。

(カール・マルクス、資本論第一卷第三篇第五章)

附録の七

生産諸力の社會的特性

労働過程の中で役立てられてゐない機械は無用である。無用であるのみでなく、自然的物質代謝の破壊力の擒となる。鐵は錆び木材は朽ちる。織られない糸、編まれない糸は無駄になつた綿である。生きた労働がこれ等の物を捉へて、死から呼び醒まし、これを單に可能的な使用價值から現實的の、働きのある使用價值に轉化しなければならぬ。これ等の物は労働の火に洗禮され、労働の肉體として取られて了ひ、労働過程の中でその労働の概念と職分に應ずるところの諸機能を吹きこまれ、斯くして消耗されて了ふには相違ない、けれどもそれは、立派な目的があつて即ち新たな使用價值を、換言すれば生活資料として個人的消費の中へ又は生産手段として新たな労働過程の中へ入りこみ得るところの新たな生産物を、形成する爲めの要素として消費されるのである。(マルクス、資本論、第一卷第三篇第五章一)

……資本は物ではない、一定の歴史的社會構成に屬する或る一定の社會的生產關係であり、これが物で表現されて、この物に特殊の社會的性質を附與してゐるものである。資本は、物質的な

生産された生産手段の總和ではない。資本は、生産手段が資本に轉形されたものであり、生産手段はそれ自身に於ては資本でないこと恰も金又は銀がそれ自身に於ては貨幣でないのと同じである。資本は、社會の或る一部分によつて獨占された生産手段が、生きた勞働力に對立して獨立化されたこの勞働力の諸生産物と實現諸條件とが、この對立を通して資本に體化されたところのものである。資本は單に勞働者の諸生産物が獨立せる權力に轉化されたといふだけのものではなく、……(不明)更にこの勞働の形態がその生産物の性質として勞働者に對立するに至つたものである。斯くして茲に、歴史的につくられた社會的生產過程がもつところの、一見極めて神祕的な社會的形態が與へられるのである。(マルクス、資本論、第三卷)

〔註一〕 周知の如く、『資本論』第三卷は既にマルクスの死んだ後に出版された。マルクスが此の卷の原稿を書いてゐたのを、エンゲルスが印刷の爲めに仕上げをしたのである。マルクスの原稿中の若干の言葉は字が讀めなかつた。上掲の中斷の個所には斯かる不明の言葉があり、それを點線と留保とで補つてある。(編輯者註)。

附録の八

生産の仕方

生産の社會的形態は何うであらうとも、勞働者と生産手段とは常に生産の要因たるを失はない、だが勞働者も生産手段も、兩者が相離れた状態に於てはたゞ可能的にのみ生産の要因たるに過ぎない。苟くも生産が爲される爲めには兩者が結合されなければならぬ。この結合が行はれる場合の特殊な仕方によつて、社會の構造について諸種の經濟的時代が區別される。此處の場合では、自由なる勞働者の、彼の生産手段からの分離と云ふことが與へられた出發點であつて、この二つのものが資本家の手の中で如何にして又如何なる條件の下に結合されるかは、我々の既に見た所である——即ち、彼の資本の生産的な存在仕方として結合される。従つて、斯くして結合された人的及び物的の商品形成要因が相共に結び合つて進めて行くところの現實の過程、即ち生産過程はそれ自身資本の一機能となる——資本家的生産過程がそれである。資本家的生産過程の性質は本書の第一卷に於て詳述した所である。あらゆる商品生産の經營は同時にまた勞働力搾取の經營である。けれども資本家的商品生産に至つて始めて劃時代的な搾取の仕方となる。即ちこれはその

一層の歴史的発展の中に於て、労働過程を組織化すること及び技術を巨人的に發達せしむることによつて、社會の全經濟的構造を××し、斯くして一切の從來の××を比較にならぬ程ひき離して聳を立つのである。

前貸された資本價值としての限りに於ては生産手段及び労働力は、それ等が生産過程に於て價値の形成に就て、従つてまた餘剩價値の生産について演ずるところの役割の差異によつて、一は不變資本、他は可變資本として區別される。更に生産資本の相異つた構成成分としては此の兩者は生産手段の方は資本家が所持する限り生産過程の外部にあつても彼の資本たることを失はないのであるが、労働力の方は生産過程の内部に於てのみ個別的資本の存在形態となるといふことによつて、區別される。労働力はその賣主即ち賃労働者の手の中に在る時にのみ商品であり、逆にその買主即ち資本家の手の中に在る時にのみ資本となる。而して生産手段そのものは生産資本の人的な存在形態としての労働力が生産手段に合體し得るものとなつた瞬間からのみ、生産資本の對象的な姿態又は生産資本となるのである。人間の労働力が性質上資本なのではないのと同じく、生産手段も性質上資本なのではない。生産手段は特定の、歴史的に發展した諸條件の下に於てのみ、この特殊な社會的特性を受けとるのであること、恰かも斯くの如き諸條件の下に於てのみ貴金屬

が貨幣の特性を刻印され又は貨幣が貨幣資本の特性を刻印されると同様である。(マルクス、資本

論第二卷第一篇第一章)

附録の九

生産諸關係

生産において人間は自然に働きかけるのみでなく、相互に働きかけ合ふ。彼等は共同的活動のために、自分の活動の相互的交換のために一定の方法で結合することなしには生産を行ふことはできない。生産を行ふためには人々は一定の關聯及び關係のうちにはいり、これらの社會的關聯並びに關係を通じてのみ自然に對する彼等の關係が存在し、生産が起る。生産手段のそれ或ひはこの性質に應じて勿論生産者が相互にはいり込む社會關係も變り、彼等が自分の活動を交換し、總體的生産に参加する諸條件も變つてくる。新しい戦争要具、火器の發明と共に、軍隊のあらゆる内部的組織も必然的に變化せざるを得なかつたし、それを基礎として各個人が軍隊に結合せられ、軍隊として影響を及ぼし得る諸關係、各種の軍隊の相互關係も變化せざるを得なかつた。

従つてそこにおいて人々が生産に従ふ社會諸關係は物質的生產手段の變化及び發展につれて變

化し、變革する。その總體において所謂社會諸關係、社會なるものを形造り、歴史的發展の一定段階の上に存在する社會——獨特の特徴を持つ——を形造る。古代社會、封建社會、ブルジョア社會は生産諸關係のかゝる總體——それらの各々が同時に人類の歴史における特別の發展段階をしるしづける——である。

資本は生産の社會的關係、即ち生産のブルジョア的關係、ブルジョア社會における生産の關係である。資本の構成部分——生活手段、労働要具、原料——はあたへられた社會的諸條件の外に、一定の社會的諸關係の外にも生産されまた蓄積されるではないか？ あたへられた社會的諸條件のうちでなく、同じ一定の社會的諸關係のもとにおいてでなくともそれらは新しい生産の上を用ひられるではないか？ そしてこの一定の社會的性質が新しい生産のために役立つ諸生産物を資本に變ずるのではないのか？

資本は生活手段、労働要具及び原料からのみ、即ち物質的諸生産物からのみ成りたつのではない。それは同時に交換價值より成り立つてゐる。資本が成りたつあらゆる生産物は商品である。資本は従つて物質的諸生産物の合計たるのみではなく、商品、交換價值、社會的な大いさの合計である。

「K・マルクス、P・V・アネンコフへの手紙、一九二六年十二月二十八日付（マルクス、エンゲルス全集、ロシア版、第五卷、四二九—四三〇頁。）」

附録の十

生産諸關係が生産諸力の發達に及ぼす影響

人間は自由に彼の生産諸力——これは彼の全歴史の基礎である——を選ぶものではない、何故かと言ふとあらゆる生産力はかち獲られた力、即ち以前の活動の生産物であるからだ。だから生産諸力は人間のエネルギーが使用されて出來た結果である。所でこのエネルギーそのものは、人間が現にその中にゐる所の諸關係により、既得の生産諸力により、彼の眼前に存在する所の、だから彼が創造するのではない所の、前代の所産である所の、社會形態によつて制約されてゐる。あらゆる次の代が以前にかち獲られた生産諸力を自己の前に見出し、これを新たな生産のために原料として用ゐるものであるといふ、この簡單な事實によつて、人間の歴史の中に關聯が發生し、人類の歴史が形成されるのだ。そしてこの人類の歴史たるや、人間の生産諸力が、従つて又人間の社會的諸關係が成長してゐればしてゐるだけ、それだけ益々人類の歴史たる所以を發揮する。

この事からして必然的に——人間がそれを意識するとしなないと拘らず、人間の社會的歴史は常にたゞ人間の個人的發展の歴史たるに過ぎぬといふこと——が出てくる。人間の物質的諸關係が、彼のあらゆる諸關係の基礎である。而してこの物質的諸關係は、人間の物質的及び個人的活動が自己を實現するに當つての必然的な諸形態に過ぎないのだ。

ブルードン君は理念と事物とを混同する。人間は彼が勝ち得た所のものを決して拋棄するやうな事はない、だがこの事は、人間が一定の生産諸力を勝ち得た際に於ける一定の社會的形態を決して拋棄するやうなことがないことではない。人間は、到達した結果を奪はれざらんが爲めに、文明の果實を失はざらんが爲めに、彼の取引交通の様式が勝ち得られた生産諸力にもはや適應しなくなるモメントに於て、彼のあらゆる傳來の社會的諸形態を變へることを餘儀なくされる。

(マルクス、一八四六三月二十八日。アネンエフへの手紙)

附録の十一

土台と上層建築との相互關係

「唯物史觀によれば、歴史に於ける窮極の規定的契機は現實的生活の生産及再び生産である。

マルクスも、又私も、これ以上のことをば未だ嘗て主張しなかつた。何人かがこれを曲歪して經濟的契機が唯一の規定的契機であると云ふならば、それはかの命題を無意味な抽象的な背理的な空辭に轉化するものだ。經濟的狀態は土台である、だが上層建築の種々な契機——階級闘争の政治的諸形態及び諸結果、勝利せる階級が戦闘の後に於て定むる諸憲法、法律諸形態、更にはこれら總ての現實的闘争の、關與者の頭腦に於ける反映、即ち政治上、法律上、哲學上の諸理論、宗教的見解及びその更に發展して出來た教義の諸體系——も亦歴史上の諸闘争の經過に作用を及ぼし、數多の場合主としてこれら闘争の形態を規定する。

これら總ての諸契機の相互作用の中に於てこそ、あらゆる無數の偶然(即ち諸事物及び諸事件につきその相互の內的關聯が疎遠若くは指摘し難くしてこの內的關聯を存在せざるものと看做し、閉却することを得る場合)を通して窮極に於て必然として經濟的運動が自己を貫徹するのだ。若しさうでなかつたとしたら理論を任意の歴史時期に適用することは、實に單純な一次方程式を解くよりも容易いことだらう。

「我々は自から我々の歴史をつくる、だが第一に、それは極く規定された諸前提と諸條件の下に於てなのだ。その中で窮極の決定者が經濟的諸前提及び諸條件だ。だが政治的等々のそれも亦、

否、かの人間の頭腦の中に現はれるところの傳統すらも、役割を演じはする、決定的な役割ではな
いけれども。プロシヤ國家も寔に歴史的な、窮極に於ては經濟的な諸原因によつて成立し且つ發
展した。だが北ドイツの數多の小國の中で正さにブランデンブルグが經濟的必然によつて、そし
て他の諸契機(就中プロシヤ領有によるポーランドとの、從て國際政治諸關係との纏れ合ひ——實
に此の國際政治諸關係はオーストリア王朝權力の形成に當つても決定者であつたのだ)によるこ
となくして、強國となるべく規定され、こゝに經濟的差異、言語的差異、又宗教改革以後に於て
は北部と南部との宗教的差異が體化されたと主張するならば、それは街學たるを免かれ難いだら
う。ドイツの過去及び現在に於ける各小國の存在、又は高地ドイツ語に於ける子音の變動——即
ちズデーテンからタウヌスに至る山脈によつて出來てゐる地理的劃壁と相待つて、ドイツを貫く
劃然たる裂け目となつてゐるもの——の起源、を經濟的に説明することは、物笑ひとなることな
くしては出來難いだらう。』(ヘンゲルス、一八九〇年九月二十一日附、プロホへの手紙)

社會的規模に於ける分業の行はるる所、そこにはまた部分労働者相互の間に於ける獨立化が存
在する。生産は窮極に於ける決定者だ。だが生産物の交易に従事する商業が本來の生産に對して
獨立するものとなるに至るや否や、その商業は、大體に於ては生産に支配される所の、だが細か

い點に於て及びこの一般的從屬の範圍内に於ては更に獨自の法則——この新たな要因の本性に含ま
れてゐるところの——にも從ふ所の、運動に従ふやうになる。しかもこの運動たるやそれ獨自の
様相を具へそれ自身の側に於ても生産の運動に對して再び反作用を及ぼすのだ。アメリカ發見は
貨幣饑饉——貨幣饑饉は以前既にポルトガル人をアフリカへ驅りやつた——のお蔭であつた、何
故かと云ふと第十四世紀及び第十五世紀に於てかくも強大な發展をなしたヨーロッパの産業と、
この産業に對應するところの商業とは、一四五〇年から一五五〇年へかけての大銀産國ドイツが
供給し得るよりも以上の交換手段を、必要としたからであつた。

一五〇〇年から一八〇〇年へかけてのポルトガル人、オランダ人、イギリス人のインド征服は
インドからの輸入を目的とするものであつた。インドへの輸出は何人も考へはしなかつた。しか
もそれにも拘らず、何といふ巨大な反作用であらう、この純粹に商業上の利益によつて制約され
た諸發見や諸征服——かの上掲の諸國への輸出の爲めに行はれた所の——は(ヨーロッパに)大
産業を創造し且つ發展させたのであつた。

貨幣市場についても亦然りである。貨幣商業(銀行業)が商品商業から分離するや否や貨幣商
業は——生産及び商品商業によつて定められた一定の諸條件の下に、且つこの限界の内部に於て

——独自の發展をなし、それに独自の本性によつて規定された特殊の法則に従ひ、又特別の様相を具ふるに至る。さて更に、貨幣商業が斯うした發展を續けて有價證券商業にまでなると、この有價證券が單に公債證書に止まらず工業株や交通株がその中へ加はつてくると、從て貨幣商業がそれを——大體に於て——支配するところの産業の一部分に對する直接的支配を獲得することになると、さうすると貨幣商業が生産に及ぼす反作用は一層強大且つ複雑となる。貨幣商業者は鐵道、鑛山製鐵所、等々の所有者だ。これらの生産手段は二重の外觀を具ふるに至る——その經營は或は直接的生産の利益に従つて決せられ、或はまた貨幣商業者たる限りに於ての株主の欲求に従つても決せられる。その最も顯著な實例は北アメリカの諸鐵道だ。これらの鐵道の經營は全く、ゼイ・グールド、ヴァンダービルト等々なる者の行ふ瞬間的な取引所の立會——特殊の鐵道や交通手段としての其の鐵道の利益やにとつては全く無關係であるところの——に依存してゐるのだ。このイギリスに於ても種々の鐵道會社が繩張り争ひの爲めに幾十年の間鬭争を續け、この鬭争で莫大な貨幣が煙と消えたのであつた——但し生産及び交通の利益の爲めにはなくて、たゞ單に競争の爲め——大體は株式を有する貨幣商業者の取引所の立會を可能ならしめることをのみ目的としたところの競争の爲め——にであつた。

私は生産の商品商業に對する關係及び兩者の貨幣商業(銀行業)に對する關係についての私の見解に關しこれら二三の指摘をなすことによつて、根本に於ては既に、史的唯物論一般に關する貴下の質問に對しても答辯をしたことになる。この問題は分業の立場からすれば最も分かり易い。社會は一定の共同的諸機能を生産する、社會は斯かる機能を缺き得ないのだ。この目的の爲に任命された人々は社會の内部に於ける分業の一つの新しい枝となる。それと共に彼等は彼等の任命者に對しても特殊な利益を持つ事になり、彼等に對して獨立となる、斯くして國家ができる。そこで商品商業に於けると、又後には貨幣商業に於けると類似のことが起る——この新たな獨立的權力は固より大體に於ては生産の運動に従はなければならないが、なほまたその權力に内在する所の即ち一度びその權力に委付された後次第に益々發展した所の、相對的獨立性の爲めに、更に生産の諸條件及び進行に對して再び反作用を及ぼす。これは二つの不平等な力の間の相互作用である——一方では經濟的運動と、他方ではできるだけの獨立を求めつゝある所の、そして一度び口火を切られたが故に独自の運動を賦與されてもゐる所の、政治的權力との。經濟的運動は大體に於ては自己を貫徹する、けれども經濟的運動自身で口火を切つた所の、そして相對的獨立性を賦與されてゐる所の政治的運動——一方では國家權力の運動、他方では國家權力と同時に生産された

所の反對派の運動——からの反作用を受けもしなければならぬ。産業市場の運動が大體に於て且つ上に指摘した諸留保の下に於て貨幣市場に反映——勿論捻ぢ、曲げられて——する如く、以前から既に存在し且つ鬭争しつゝある所の階級の間の鬭争は、政府と反對派との間の鬭争に反映——但し同じく捻ぢ曲げられて、直接的にはなく間接的に、階級鬭争としてではなく政治上の主義の爲めの鬭争として、しかも我々が再びその真相を看破するまでには數千年を費やしたほどにも捻ぢ曲げられて——する。

國家權力が經濟的發展の上に及ぼす反作用は三通りあり得る。同じ方向に向つて行はれることがあり得る。その場合には益々速くなる。反對して行はれることがあり得る、その場合には今日では永い間には大きな國民の何れに於てもその×××の方が減ぶ。或はまた經濟的發展がとつてゐる所の特定の方向を切斷して他の方向を與へることもあり得る、この場合は結局前二者の中の何れかに歸着する。だが第二及び第三の場合に於て政治的權力が經濟的發展に對して非常な害をなし、大衆の間に力及び物質の浪費を招くことがあり得ることは明白だ。

更になほ經濟的資源を占領し絶滅させる場合があり、以前には時によつてはその地方又は全國の全經濟的發展が破滅することもあり得た。今日では此の場合には概して以前とは正反對の作用

がある、少くとも大きな諸國民にあつてはさうだ——永い間には往々にして敗北者の方が勝利者よりも經濟的、政治的、精神的に却て得をする。

法律についても同様である。職業的、法律家をつくる分業が必要となるや否や、またはや獨立の新領域が開けてくる、そしてこの新領域は生産及び商業へのそのあらゆる一般的從屬にも拘らずこれらの領域に對して特別の反作用を及ぼす能力をも有するのだ。近代の國家に於ては法律は一般的經濟情勢に適應するに止まらず、一般的經濟的狀勢の表現たるに止まらず、內的な矛盾によつて自ら自分の顔を潰すやうなことをしない所の、それ自身としての、內的聯絡をもつた表現でなければならぬ、一所でこれを完全にやらうとすると、經濟的諸關係を反映することは益々その精密さを失つてくる。しかもこれは法典が一階級の支配の峻嚴な、緩和されない、偽なき表現であること——この事自身が既に法律概念に反することであらう——が稀となればなるだけ、それだけ益々然りである。一七九二年乃至九六年に於ける革命的ブルジョアジーの純粹な徹底的な法律概念は既に早くもナポレオン法典に於て幾多の方面にわたつて偽造せられてゐる、またこの法律概念がその中に體化せられてゐる限りに於ては、プロレタリアートの力が増進しつゝあることによつて、日々あらゆる種類の微弱化を受けなければならないのだ。けれどもこの事はナポレオン

法典が、あらゆる大陸のあらゆる新たな法典編纂の基礎となつてゐる法典であることを妨げはしない。斯くの如くにして法律的發展なるものゝ進行はたゞ次の點にある——即ち、先づ經濟的諸關係の法律的諸原則への直接的翻譯から生ずるところの諸矛盾を除去すること、かくて調和的な法律體系をつくる努力が爲されること、然る後に一層の經濟的發展の影響と強制とによつてこの體系が幾度も突き破られ、新たな矛盾にまきこまれて行くこと。(私は此處では、第一着としてたゞ民事法についてのみ語つてゐるのである)。

法律的諸原理としての經濟的諸關係の反映は必然的に、同じく倒立的のものである。即ち、この反映は行爲者の意識に上ることなくして行はれる。法律家はアプリーの命題を取扱つてゐる積りでゐる、然しそれにも拘らずそれらの命題は經濟的反映に過ぎないのだ。斯くの如く總てが倒立してゐるのだ。そしてこの倒立——この倒立はそれが認識せられないでゐる限り、かゝる我々がイデオロギイ的見解と名づけるところのものを構成するのであるが——がそれ自身としても再び經濟的基礎の上に反作用を及ぼし、一定の限界内に於て基礎を變化せしめ得るといふことは、私にとつては自明の事に思はれる。相續法の基礎は、家族がこれと等しい發展段階にあることを前提するものであつて、經濟的なものである。それにも拘らず、例へばイギリスに於ては絶

對的な遺言の自由、フランスに於ては遺言の甚しい制限といふやうなことが、あらゆる微細な點に至るまでたゞ經濟的原因を有するのみであることを指摘するのは困難であらう。然し兩者とも經濟に反作用を及ぼす——財産の分配に影響することによつて——ことは甚だ顯著なものがある。

さて尙一層高く空中に浮んでゐる所のイデオロギイ的諸領域、即ち宗教、哲學、等々に關しては、歴史以前からの、歴史的時期には既に與へられて居り傳來されてきた所のストック——我々が今日痴愚と言ふであらう所のもの——が存在する。自然についての、人間そのものゝ性質についての、精神、魔力、等々についての諸種の誤れる觀念の根底には、概してたゞ消極的な經濟的なものゝみが存在する。即ち歴史以前の時期に於ける低い經濟的發展段階は、自然についての誤つた諸表象を、その補充と、だが時としては條件と、又は原因とすらもしてゐるのだ。そして經濟的要求が自然認識の前進にとつての主たる原動力であつたとしても、若くは益々原動力となつて來たとはしても、若しもこれ等すべての原始狀態的な痴愚には經濟的原因があると主張するならば、それは尙學たるを免れないであらう。諸科學の歴史は此の痴愚の漸次的除去の歴史、若くは此の痴愚を新しい、しかし益々少く背理的な痴愚によつて置きかへることの歴史

である。この事を爲す所の人々はまた特殊な分業領域に所屬し、そして彼等が一つの獨立な領域を作り出したものであるかの如くに見える。そして彼等が社會的分業の内部に於て獨立の一群を形成する限りに於て、その限りに於て彼等の諸生産——彼等の諸誤謬の生産をも含めて——は、全社會的發展の上に、經濟的發展の上にすらも、反作用的影響を及ぼすのである。然しながらこれ等すべての場合に於て彼等自身は更に經濟的發展の支配者的影響の下に立つてゐるのである。例へば哲學に於てはこの事はブルジョア時期に於て最も容易く指摘され得るのだ。ホツプスは最初の近代的唯物論者（十八世紀の意味に於ける）であつた、但し、絶對主義者——絶對的王政が全ヨーロッパに於てその繁榮期にあり、イギリスに於ては國民との鬭争を引き受けてゐた所の時期に於ける——であつた。ロツクは宗教に於ても政治に於ても一六八八年に於ける階級協調の息子であつた。イギリスの無神論者たち、及び彼等のより徹底的な繼續者たるフランスの唯物論者たちは純然たるブルジョアジーの哲學者であつた。これらのフランス人はブルジョア革命の哲學者ですらあつた。カントよりヘーゲルに至るドイツの哲學に於ては、ドイツの小市民が——或は積極的に或は消極的に——一貫して通つてゐる。然しながらあらゆる時代の哲學は、分業の特定の領域として、先行者によつて傳來されたところの一定の思惟の材料を前提として有し、これから出發す

るものである。だから經濟的に遅れてゐる諸國が哲學に於ては第一ヴァイオリンを弾くこともできるといふ様なことも起る——イギリス對十八世紀のフランス、しかもフランス人はイギリスの哲學を基礎としたのであつた、又後に至つて英佛兩者に對するドイツ。然しながらフランスに於てもドイツに於ても哲學は當時の一般的な文學の繁榮と同様に、やはり經濟的興隆の結果であつた。これらの諸領域に對する經濟的發展の窮極的優越は今や確立した。然しながらそれは個々の領域そのものによつて定められるところの諸條件の内部に於てのことである。例へば哲學に於ては、先行者が與へた所の現存の哲學的材料に及ぼす經濟的影響——これはまたその政治的等々の扮装の下に於て作用するのであるが——を通してである。この場合に於ては經濟は何物をも自ら創り出しはしない、だがそれは現存の思考材料の變更又は發展の仕様を規定するのである。そしてそれも概して間接的に——政治的、經濟的、精神的反映として哲學の上に極めて大きな直接的影響を及ぼすことによつて——である。

宗教についてはフォイエルバツハ論の最後の章に於て最も必要な點を述べて置いた。

だからバールトが、我々を稱して經濟的運動の政治的反映等々の經濟的運動そのものに及ぼす一切の且つあらゆる反作用を否定するものであると言ふのは、風車を攻撃するものに過ぎないの

だ。だが彼はたゞマルクスのブリュメール十八日をよく見てみさへすればよいのだ。この本では殆どたゞ政治的な闘争及び出来事が演ずる所の特殊な役割——勿論経済的諸条件への一般の依存の内部に於て演ずる所の——だけが取扱はれてゐる。或は又資本論の例へば労働日に關する章——こゝでは政治的行爲である所の立法が斯くも鋭い作用をなしてゐる——、若くはブルジョアジイの歴史に關する章（第二十四章所謂源泉の蓄積）を見るがよい。或は又、若しも政治的權力が経済的に無力なものであるならば、我々は一體何故にプロレタリアートの政治的××の爲めに闘ふのであるか、××（即ち國家權力）も亦一つの経済的な力である。

然しながら僕は今この書物を批判する時間はない。資本論第三卷が先づ第一に發行されなければならぬ。そして僕は、例へばベルンシュタインでもこんな事は十分立派にやつてのけることが出来るだらうと考へてゐる。

これ等の諸君すべてに缺けてゐる所のものは、辯證法だ。彼等は何時でも、此處にはたゞ原因のみを、彼處にはたゞ作用のみを見る。これが空虚なる抽象であること、現實の世界に於てはこんな形而上學的な兩極的な對立はただ危機に於てのみ存在するものであるといふこと、然しながら大いなる全體の経過は相互作用——非常に不平等な諸力の相互作用であり且つその中では經濟

的運動が遙かに最も強力な、最も根源的な、最も決定的なものであるとは云へ——の形態に於て進行するものであるといふこと、此處では何物も絶對的ではなく、一切が相對的であるといふことこのことを彼等は斷じて見ないのだ、彼等にとつてはヘーゲルは存在しなかつたのだ。

（F・エンゲルス、一八九〇年十月二十七日附コンラード・シュミット宛の手紙）

附録の十二

生産諸力と生産諸關係のマルクスレーニン主義的

理解の機械論的修正と觀念論的修正

この機械論的概念の直接の繼續は、あたへられた社會的構成の法則の、一般的超歴史的法則による代置である。經濟學的諸範疇の超歴史性の理論、抽象的労働の諸範疇のあらゆる社會的構成への擴大は、ボグダーノフとブハーリン的な「労働費出の法則」の基礎になつてゐる。この理論から出發して同志ブハーリンは、商品經濟の「衣裳」の拋棄と共に社會的發展の法則は「赤裸々」な形で現はれると云ふ結論を下す。同志ブハーリンの意見によると、社會主義社會においては労働費出の不變の法則が生産諸力の運動を直接統制するだらう、と云ふことになる。生産諸力を

のものはレーニンの批評に背いて、同志ブハーリンによれば、屢々、技術と同一視され、且つ一般にその特殊な社會形態の外部にとりあげられる。生産諸關係は簡單に、「空間における人間の配置」として純技術的關聯として描かれる。

かゝる設定から、過渡期における生産諸力の發展に關する非辯證法的な表象が成長する。それはあらゆる發展段階の社會的獨自性を特に考慮することをしない。プロレタリアートの××の諸條件のもとにおける生産諸力の成長は、富一般、國民收入一般、農業一般の成長として形而上學的に描かれる。各種の部分におけるこの發展の社會形態及びその矛盾は無視される。他ならぬ社會主義的諸形態における生産諸力の成長の必然性は抹殺される。社會主義的諸形態の發展のために資本主義的諸傾向との闘争は、窮極において我國における生産諸力の成長に對置される。

技術的諸關係と生産の社會的秩序との混同はさらに、機械論者(同志ブハーリン及びその學派)を、資本主義的生産と直接的に社會的勞働の過程との同一視に導く。機械論者は、資本による勞働の社會化が生産の社會的性質と領有の私人的性質との間の矛盾を排除しないで強めると云ふことを看過してゐる。勞働の社會化を云々しながら、彼等は資本の命令のもとに起るこの社會化の限定された形態を見ない。「機械論者は資本主義は意識的に「組織化された經濟」に向つての、生産諸

關係の「非物神化」に向つての方向に發展すると豫想してゐる。此處からして獨占は競争を、資本主義の無政府状態を排除すると云ふ同志ブハーリンの幻想が起る。彼はこの點において、個々の資本主義諸國の内部においては競争が排除されると云ふやうな、その「組織された資本主義」の理論をたてる。同志ブハーリンは「この獨占が資本主義的獨占、即ち資本主義から生れ出て、資本主義、商品生産、競争の、一般的情勢のうちに、この一般的环境との斷へざる且つ出口のない矛盾のうちに存在する獨占である」(註一)ことを理解してゐなす。

註一 (レーニン、全集第十三卷、三一四頁、一九二四年版)

同志ブハーリンは「自由競争」から生れ出た「獨占が自由競争を排除せず、自由競争の上に、それと並んで存在し、それによつて、いくたの特に尖鋭且つ大なる矛盾、磨擦、衝突を生む」(註二)ことを見なす。

註二 (レーニン全集、第十三卷、三一四頁、一九二四年版)

機械論者は再生産過程を、物質的並びに人間的生産諸要素の機械的運動として描いてゐる。同志ブハーリン及びその一派は再生産及びその比率の質的規定を全然看過し、従つて社會的再生産の性質の變化に伴ふ量的比率の變化の過程を理解しない。

機械論者は社會的再生産を、動搖する運動として、外部から與へられた、獨立に運動する均衡の水準からの「偏向」として描く。均衡は運動の性質及び形態によつて規定される運動の契機たることから、機械論者のもとにおいては理論的研究全體の、また現實的運動の出發點に轉化する。經濟法則は彼等により均衡の法則として公式化され、そして運動の法則に對置される。ここからして資本主義の存在の法則のその死滅の法則への對置が起る。均衡論は「レーニン主義と何等の共通點をも持たぬ」(スターリン)。均衡論は黨によつて指導される工業化の政策に對して勞働者階級に敵對的な諸要素を理論的論證によつて武装させる。それはブルジョア並びに小ブルジョア經濟理論家の手中にあつて、協同經營化に反對する個人的農民經濟の理論的擁護のために、社會主義工業及び協同組合の發展によつて追放される私人資本の立場の強化のために奉仕する。その反レーニン主義の本質のあらゆる明らかさにも拘らず、「可動的均衡」論は極端に廣汎に普及してゐる。同志ブハーリンの見解の政治的反對者並びに批判者さへもが、今までのところ完全には、この理論と分離してゐない。このことはまたしても經濟學における機械論的傾向の生活力を立證する。同志ブハーリンはその機械論的方法論にすつかり從屬し、且つ均衡論を徹底的に「バランス」化理論に發展させながら、必然的に次の結論に達する。即ちあらゆる與へられた瞬間にとつては

國民經濟の諸要素のあひだの純量的相互關係の圖式のみが可能である。經濟政策上の言葉に翻譯するとこれは「後れた」個所への整列の要求を伴ふ。同志ブハーリンは問題が比率の諸要素の單に各種の量的特徴描寫にのみあるのでなく、それらの諸要素の質的規定にもあるのだ——何故なら再生産の行程並にそれに内屬する矛盾の發展は再生産の社會的形態に依存するからである——と云ふことを理解しない。

同志ブハーリンの、再生産の平滑な圖式の創造による過渡期の階級的利害の諸矛盾から抽象せんとする空想的傾向の成り立たざることば明らかである。

資本主義におけるとは質的に異なるソヴェート經濟における再生産の型は社會的生産の他の秩序に、他の運動法則に從屬せしめられる。

最後に、機械論的觀念から出發すれば、ソヴェート同盟における階級闘争の發展の諸條件、生産の社會主義的形態の建設の事業におけるプロレタリアートの能動的役割及び我經濟の生産諸力の發展のための生産のこの社會主義的形態の意義は正しくは理解され得ない、と云ふことを特に強調しなければならぬ。ここからして同志ブハーリンによる我が可能性の過少評價、資本主義下では見られぬやうな工業化の高度のテムボに對する不信用が起る。

辯證法的唯物論の基礎の無理解は同志ブハーリンにおいては、經濟學の對象の非マルクス主義的理解に現はれてゐる。同志ブハーリンが「過渡期の經濟」において「理論的國民經濟學は商品の生産の上にたつ社會經濟の科學、即ち非組織的社會の科學である」と書いてゐるのに對し、レーニンは餘白に次のやうに註をつけてゐる。「二つの間違。(一)この規定はエンゲルスに對する一歩退却である。(二)商品生産も同じく『組織された』經濟である。同志ブハーリンが「經濟學は商品經濟を研究する」と書いてゐるのに對し、レーニンは次のやうに註をつけてゐる。「それだけではない」。また同志ブハーリンの「資本主義的商品社會の最後は經濟學の最後でもある」と云ふ主張に對してはレーニンは次のやうに云つてゐる。「間違ひ」。純粹共產主義においてさへ、たとへばIV+HCの交通及び蓄積にもせよそれがあるではないか？

經濟學の對象のブハーリン的理解から論理的に起るものは、「我が經濟における」自然成長的な組織されざる市場關係」の存在の程度に應じてのみ正當とされる——誤つて——、ソヴェート經濟の理論の必要の理解及び社會主義社會の生産諸關係の理論的研究の必要の無理解である。マルクス主義經濟學は「人間の社會的諸關係を生産によつて研究する」(レーニン)。それは生産諸關係をあたへられた社會的構成の生産諸力の發展形態として研究する。それによつてそれは經濟的構造

を自然史的過程として研究し、あたへられた生産諸關係の發生、發展及び没落の合則性を、即ち社會の運動の經濟法則を認識するのである。「あたへられた歴史的な、一定の社會の生産諸關係を、その發生、發展及び没落において研究すること、——これがマルクスの經濟學說の内容である。」(レーニン)。

同志ブハーリンの方法論的設定は直接、同志コン、ベツソフ、其他によつて攝取されてゐるI・I・ルビンの反マルクス主義的、新カント派の見解と鬭争しつつ、彼等は事實上、經濟學における觀念論的修正の克服のかはりに、この領域における機械論的傾向を深めそして支持しただけであり、それによつて事實上、觀念論的傾向の強化及び一層の發展に協力した。これらの同志達によつて掲げられてゐる間違つた諸命題の體系は同志ブハーリンの機械論的、反辯證法的觀念の直接の繼續である。同志、コン、ベツソフ其他は、黨の一般方針を擁護し、同志ブハーリンの政治的見解と背馳しないといへ、右翼的偏向の理論的基礎の事實上の擁護者である。

同志コン及びベツソフ達の機械論的誤謬の主要なものは次のやうなものである。

(一)抽象的勞働の範疇の超歴史性の主張。それは抽象的勞働の生理學的エネルギー的理解と結びついてゐる。(二)商品資本主義社會における交換の役割の無理解。それはマルクスの商品的

物神崇拜の理論の俗悪化と結びついてゐる。生産諸力と技術及び労働過程「そのもの」との同一視。

(四) 生産諸関係の直接生産諸力への機械論的還元。ここからして生産諸関係の物質性の粗雑な理解と、生産諸関係の各種のタイプの特殊性の技術の、發展水準による直接的特徴描寫とが起る。

(五) 經濟學の工藝學との混同。(六)「エネルギー的バランス」のボグダノフの理論「同志コン」。

(七) 均衡論とブハーリン的な「労働費出法則」。(八) 資本主義の社會主義への平和な轉入の命題を論理的にもたらず、資本主義の發展に従つての生産諸関係の「非物神化」のテーゼ(同志ベツソフ)。(九)ブハーリンの觀念を再生産してゐる帝國主義論におけるいくたの根本的な誤謬。

(同志、コン)。(十) 社會諸科學(法律、歴史其他)に關する非マルクス主義的表象。社會諸科學は社會××の問題を取扱はないやうに云はれる(同志ベツソフ)。凡べて上にあげられた誤謬を貫いてゐる形式と内容との同一視、及びいくた其他の誤謬。

これから起つてくる工藝學の對象と經濟學の對象の混同は同志ベツソフの次の命題のうちにて、特につきりと現はれてゐる。「作用における生産諸力、労働過程」は、かくの如きものとして、

「それによつて制約される生産關係の社會的形態のやうに經濟學の不可分の構成部分をなす。」

(註三) 同志ベツソフは會て、生産諸力と生産諸關係は「同等の權利をもつて」經濟學の對象と

なると云ふ粗雑な機械論的テーゼを掲げた。經濟理論家Ⅱ共產主義者の壓倒的多數の側からの決定的な抵抗に出遇つた後、同志ベツソフはこのテーゼを棄てた。だが單に形式的に棄てただけであつた。

註三 「經濟學の諸問題」四一五、二二〇頁。

同志コンはその最近の論文において次のやうに書いてゐる。「工藝學と經濟科學とは同じ物質的生產を研究する。併し一つの對象に對してこれら二つの科學の視角視座は全然別別である。經濟學と工藝學との境界——それを抹殺する事は罪惡である——は物質的生產に對するそれら各々の見地の差異にある。經濟學(?)は自然に對する人間の作用の効率性の見地から生産の物質的過程を研究する。工藝學(?)は物質的生產の一定の社會形態の見地から物質的生產を研究する」(註四)

註四 「經濟學の諸問題」六號、九四頁。

同志コンの主觀論的設定は瞭然たるものである。マルクス主義は工藝的過程と經濟的發展とを二つの客觀的に存在する運動形態として區別してゐる。同志コンは彼によつて選定される見地に從つて、同一の對象のある時はこの、ある時は別の側面を「見る」。同志コンは經濟學の出發點——「個人の社會的に制約された生産」(マルクス)——を労働の自然的に制約された過程(工藝學)

と混同しつつ、同志ベツソフの誤謬に類似の誤謬をやつてゐるのである。

「見地」のかやうな用ひ方についてレーニンはブハーリンの「過渡期の經濟」へのその註において次のやうにしるしてゐる。主觀論。唯我論。何人が「點檢するか」「何人に興味があるかと云ふ點に問題があるのではなく、何が人間の意識から獨立に存在するかと云ふ點に問題があるのである(註五)」

註五 「レーニン資料集」第十一卷、三八五頁。

論争によつて同志、コン及びベツソフ其他によつて提唱された命題のあらゆる不成立と機械論的性質とはつきりと曝露された。彼等の機械論的見解に對する容赦なき批判が全く必要である。何故なら彼等によつて導入された誤謬の體系は直接、同志ブハーリンの反辯證法的概念と結びついてゐるからである。

これらの誤謬は我々が最近、あきらかなボグダーノフ主義の復興の企圖を持つてゐる(ダシコフスキー及びシヤプス以後、コジマノフ及びフィンノエノタエフスキー)ので一層危険である。

發展の發條たる形態と内容との間の矛盾はそれらの統一を否定せず、反對に、この統一を豫想する。形態の内容からの如何なる分離をもマルクス主義は許さない。内容は形態なしのもので

ない。それは形態をまとつたマテリアリヤである。形態は内容を持つ。(註六)

註六 (形態は己れの規定の一つとして鞏固な存在、若しくはマテリアを己れのうちに内容とする。かくて

(内部的構造として——Y M及びB・B) 形態は内容であり、その發展した規定性においてそれは現象の法則である「ヘーゲル全集、第一卷、第二二三頁」。

形態も内容も歴史である。形態は能動的である。内容の優位はあらゆるあたへられた形態の能動的なることを、内容の發展の一定の歴史的段階によつて限定する。この發展に應じて形態と内容との間の矛盾が成長する。形態は發展の諸條件たることからその制動機となり、内容によつて「排斥される」。内容そのものの變化の基礎の上に發生する新しい形態のみがその最も完全な發展のための條件をつくる。この基礎の上のみ生産諸力及び生産諸關係の辯證法を、階級社會において社會革命となるそれらの間での矛盾の成長を理解することができる。辯證法的唯物論は如何なる他の「見地」をも知らない。

I・I・ルビンは形態を内容から切り離して、形態と内容との唯物論的理解の可能性を滅却し、形態を内容の上に超然たらしめる。彼は法律を直接經濟的構造の特徴描寫に關係づけ、法律的組織の特徴から生産諸關係の特徴描寫を引き出す。「經濟外強制の缺除、公的法律の原則の上にな

く、私的法律及び所謂自由契約の原則の上にたつ個人の労働活動の組織は現代社會の經濟的構造の特徴である。ここからして個々の私的經濟の間の生産諸關係の基本的形態——交換、交換せられる價值の平均化の形態も起つてくる。」(註七)かくてルビンの意見によると社會の經濟的構造がその法律を規定し且つ特徴づけるのではなく、法律が經濟的構造を規定し(「ここからして」)且つ特徴づけるのである。彼は資本主義的生産を形態のない過程と見なしてゐる。この過程に外部から、交換の過程から形態が加はる。(註八)

註七 「概論」第三版、九八頁。

註八 「概論」第三版、一八頁。

ルビンは個々の企業の内部に、直接的生産の過程のなかに技術的な「組織された」諸關係をのみ見てゐる。(「概論」の第二章を見よ。)資本主義的生産方法を特殊な社會的經濟構成として特徴づける社會的生產諸關係を、ルビンは諸企業の中の市場關係の範圍に、流通の範圍に移すその結果、ルビンによつて賣買の諸關係と同一視される生産諸關係は「物質の所有者」の諸關係として、平等なる經濟主體の諸關係としてのみあらはれ商品生産者の諸關係と「して」はあらはれ「ない」。(註九)生産の諸關係に對する交換の諸關係のこの對置の基礎の上に、さらに資本主義的

生産過程そのものの諸關係、搾取の諸關係が抹殺される。ルビンが生産諸關係の特徴描寫に際して「階級的」と云ふ術語を引用符のなかに入れたのは理由なきことでない。

註九 (ルビン、西ヨーロッパにおける現代經濟學者、一八八一—一八九頁。)

ルビンはマルクスの經濟學體系における生産と交換との相互關係を粗野に歪曲してゐる。彼は經濟的構造が生産過程における人間の諸關係によつて規定されると云ふ論争の餘地のないマルクス主義的命題を無視し、「交換過程、その社會形態、及び商品社會の生産との結びつき」が「マルクスの價值論の對象をなす、(註十)と云つてゐる。實際上は生産の形態は交換の形態を規定する。商品生産の形態は社會的再生産運動にとつての私的交換の必然性を包含する、資本主義的再生産はさらに労働力の賣買の必然性をも包含する。

註十 (概論九六頁。)

生産的労働の諸問題のルビンによる誤つた取扱ひはマルクスの理論の明らかなる修正である。この問題におけるマルクス主義からの逸脱はあらゆる種類の現代のブルジョア分配論に廣く戸を開いてやるものである。これらのブルジョア分配論は、餘剩價值占有の仕事においてブルジョアジー及びその地主達によつて遂行されるあらゆる種類の「労働」の生産性を認めることから出發

してゐる。生産的労働の諸問題の反マルクス主義的取扱ひは、それがソヴェート經濟に適用された場合には我黨に敵對的な、いくたの理論的概念——我が經濟建設の性質、見通し、及び任務を全く歪曲する——のための基礎となつてゐる。(ミリユーチン、及びブヂャリン「ボリシエヴィク」)

附録の十三

生産諸力の發展のメンシエヴィキ的理論に反對する

レーニンの所説

—

第一に第一回世界的帝國主義戦争と關聯せる革命がある。この革命のうちに新しき様相が、換言すれば戦争に従つて形を變化させた様相が現はれて來なければならぬ筈である。何故なら斯様な情勢のもとにおけるやうな戦争は世界に決して未だ曾てなかつたからである。今日まで我々は最も富める國々のブルジョアさへもがこの戦争後「正常な」ブルジョア諸關係を回復し得なかつたことを見てきた。併し革命家を氣取つてゐる我が改良主義者、小ブルジョアは正常なブルジョアの諸關係を限界(突破し得ぬ)と考へてきた。また現に考へてゐる。そして彼等はこの「正常

性」を極めて固定的に偏屈に考へてゐる。

第二にあらゆる世界史の發展には發展の一般的合則性が存在するけれども、それと同時に、この發展の形態または秩序の特殊性をなすところの個々の發展段階は除外されないうで却て充分可能であると云ふあらゆる思想に對して彼等は全然他人である。そして例へば文明國とこの戦争によつて始めてすつかり文明に引き入れられた國々、全東洋諸國、ヨーロッパ外の諸國との境界上にあるロシアが、この故に世界發展の一般的線に勿論横はるところの、併しロシア革命を西歐諸國におけるすべての從來の××から區別し、そしてその東洋諸國への過渡の結果としてこれに若干の部分的新味を與へるところの若干の特殊性を示し得る。また示さねばならぬと云ふことは彼等は夢にも考へないのである。

例へば彼等が西歐の社會民主黨の發展期において暗誦し、そして我々は未だ社會主義にまで熟してゐないとか、又我國には——彼等の間の諸々の「學識ある」お歴々が云つてゐる如く——社會主義のための客觀的經濟的前提が成熟しないと云ふことのうちにある結論は、底知れぬ固定的なものである。そして何人も次の如き疑問を起さうとは夢にもしない。第一回帝國主義戦争においてつくられたやうな××的情勢を迎へた民衆は自分の地位の××××××××から、彼等が文

ネツプ等のやうな發展のデイトール（世界史の見地からすればこれは疑ひもなくデイトールである）を見た。そして現在では根本において我々が×××得たと云ふことは疑ひがない。

スハーノフよりも右にゐる社會民主主義者について云はないまでも、我がスハーノフ派はこれ以外では一般に××は行ひ得ないと云ふことは夢にも考へない。我がヨーロッパの素町人共も無限に人口の多いそして無限に社會状態の多様性をもつた東洋諸國が、疑ひもなく、ロシア革命よりも尙より以上の獨特性をあたへるだらうと云ふことは夢にも思はない。

カウツキー風に書かれた教科書が、ある時代に非常に爲になつたと云ふことは勿論である。併しこの教科書が世界史の一層の發展のあらゆる形態を豫見してゐるなどと云ふ思想はもう棄ててもよい頃である。こんなことを考へるものは馬鹿だと一口に宣言してもいい時期である。（レーニン、全集、第二版、三九一—四〇一頁。）

三 社會的「經濟的諸構成に關するマル

クスーレーニンの學說

附録の十四

自然史的過程としての社會的發展

従つて階級闘争の理論は社會科學の大なる收穫をなす。それは個人的なものの社會的なものへのこの還元の状態を最も完全な正確さと明瞭さをもつて樹立する。第一にこの理論は社會的「經濟的構成の概念をつくり出した。あらゆる人間の社會生活にとつて基本的な事實——生活手段の獲得方法を出発点としつつ、この理論は人間間の關係をそれとの關聯のなかにおいた。人間間の關係は生活手段のあたへられた獲得方法の影響下につくりあげられる。この理論はこれらの諸關係の（マルクスの術語によれば「生産關係の」）體制のなかに政治的法制的形態及び一定の社會思想の傾向の衣裳をまといつてゐる、その社會の基礎を指摘した。生産諸關係のあらゆるかゝる體制は、マルクスの理論によれば、特別な社會的有機體であつて、その發生、活動及びより高度の形態への轉移、他の社會的有機體への轉化の特別な法則を持つ。客觀的、一般科學的な反復性の標準は、主觀論者によつて社會學へのその適用の可能性を否定されてゐたのであるが、この理論によつて社會科學に適用されることになつた。主觀論者達は社會現象の甚しい複雑性と多様性の結果、

重要なものを重要ならざるものと區別しなければこれらの現象を研究することは出来ない、そしてかゝる分出のためには「批判的に思想する」そして「道徳的に發達した」個人の見地が必要であると云ふ風に考へる。かくして彼等はお目出度くも、社會科學の、いくたの素町人的道徳の教訓への轉化に達するのである。この見本を我々は歴史の非合目的性と「科學の光りによつて」導かれる道程について哲學したミハイロフスキー氏のもとに見たのである。正にこんな考察がマルクスの理論によつて根を斷られたのである。重要なものと重要ならざるものとの區別のかはりに内容としての社會の經濟的構造と、政治形態及び觀念形態の間の區別がおかれた。經濟的構造の概念そのものは在來の經濟學者の見解を覆すことによつて正確に説明された。これらの經濟學者は特別な、歴史的に一定な生産諸關係の體制の法則のみが行はれるところに自然の法則を見てきたのである。主觀論者の「社會」一般に關する考察、無内容をなして素町人的ユートピアを出でない考察、何故なら社會的有機體の特別な種類への最も各種各様の社會秩序の一般化の可能性さへ明かにされなかつたから)のかはりに、社會組織の一定の形態の研究がなされた。第二にあらゆる、かゝる社會的經濟的構成の範圍内における「生ける個人」の行爲、無限に多様でそして如何なる體系化をも受け得ないやうに思はれる行爲は、生産諸關係の體制のなかで彼等が演じる役割、

生産條件從つて彼等の生活の仕組、この仕組みによつて規定される利害によつて相互に區別される個人の集團の行爲に一言に云へば階級の行爲に一般化され、還元された。そしてこれらの階級の闘争が社會の發達を規定した。これによつて、主觀論者の子供供した素朴な、全く機械論的な歴史觀、生きた個人が歴史をつくと云ふ何物をも説明せぬ命題で満足してゐる、そして如何なる社會的な仕組みにより、そして如何にしてこれらの行爲が制約されるかを研討しようとは欲せぬ見解が反駁された。主觀論のかはりに自然史的過程としての社會的過程に對する見解が、それなしには勿論、社會科學もあり得ないところの見解がおかれた。(レーニン全集、第二版、二八三―二八四頁。)(邦譯ナロードニキの經濟的内容、白揚社、一三五―一三七頁。)

附録の十五

人類の歴史は各種の社會的有機體の交代である

スツルルーヴェ氏はエヌ・オン氏に對する彼の反駁は「マルクスの相對的人口過剰の理論に對するエフ・ア・ランゲの一般的反駁と全く一致してゐる」ことを述べてゐるから(一八三)、我々は彼の

検証のために先づランゲのその一般的反駁に向はう。

ランゲはその著「労働者問題」の第五章において（ロシア譯一四六—一七八頁）マルクスの人口法則について論議してゐる。彼はマルクスの根本的命題、即ち「一般に各々の歴史的に特殊な生産方法には、たゞ歴史的意義のみを有する自己固有の人口増加の法則が適應する。増殖の抽象的法則はたゞ植物と動物のためにのみ存在してゐる」と云ふのから始めてゐる。ランゲはこれについて云ふ。

「然り、植物のためにも、動物のためにも嚴密に云へば何等の「抽象的」増殖法則も存在しない、何故ならば、一般に抽象とは幾多の同種現象の全體への抽出に過ぎないからと云ふことを指摘することが我々に許されるであらう。」（一四三）そしてランゲはマルクスに向つて、詳細に抽象とは何かを説明してゐる。彼が單にマルクスの叙述の意義を理解しなかつたことは明かである。マルクスはこの關係において人間を植物及び動物に對立させてゐるが、それは人間は社會的生產の、従つて、分配の體制によつて決定されるところの、相異なる・歴史的に交代されつつある・社會的有機體のうちに生活してゐるといふことに基いてゐる。人間の増殖の條件は直接に相異なる社會有機體の構成に依存し、そしてそれ故に人口の法則は各々の左様な有機體のために個人的に研

究されるべきであつて、「抽象的に」、社會的秩序の歴史的に相異なる形態に無關係に研究されるべきではない。ランゲの所謂、抽象とは同種現象から、一般的なものを分けることであると云ふのは全く彼自身に對して向けられる。我々は唯、動物と植物とのみの存在條件を同種のと考へることは出来るが、一度我々が、人間はその組織のタイプにおいて相異なる社會的同盟のなかに生活したことを知つた以上は、人間については如何にしてもそれを考へることは出来ない。（レーニン全集、第二版、三一八—三一九頁。）邦譯「ナロードニキの經濟的内容」白揚社二〇四—二〇六頁。）

附録の十六

經濟的社會的構成の歴史的經過的特性

故に封建的生産を適當に判斷せんがためには、對立に基く一つの生産様式として之を考察することが必要である。如何にして富がかゝる對立の裡に生産されたか、如何にして生産諸力は階級對立と時を同じくして發達したか、如何にして一方の階級が、悪しき方面が、その社會の害悪が自己解放の物質的條件が成熟の域に到達するまで不斷の成長を遂げたかを明かにすることが必要

である。この事は生産様式、即ちその裡に於て生産諸力が發展してゆく諸關係なるものが、決して永久的法則にはあらずして、人間及び彼等の生産力の一定の發展に照應せるものなること、また人間の生産力の中に生ぜる或る變化は、必然的にその生産諸關係の中に於ける或る變化を將來するものなること、を充分示すものではないか？ 何より先づ大切なことは、文明の成果、既に獲得された生産力を、奪はれないといふことなのであるから、かゝる生産力を生み出すに至つた傳統的諸形態は、これを破壊することが必要となる。この瞬間から、××階級は保守的となる。

(マルクス、哲學の貧困、木下氏譯、一八二頁)

……資本家的生産方法の科學的分析は次の事柄を論證する。即ちこの生産方法は特殊の歴史的發展によつて規定された特別の生産方法であるといふこと、それは他の規定された生産方法と同様に、社會的生產諸力の特定の段階とそれの發展の特定の形態とを自己の歴史的條件として前提するといふこと、而してこの歴史的條件はそれ自身また、先行する過程の歴史的な結果であり産物であつて、この歴史的條件を自己の與へられたる基礎としてそこから新たな生産の方法が出發するのであるといふこと、この歴史的に規定された特殊の生産の方法に照應するところの生産諸關係、即ち人間が自己の社會的生活過程に於て、自己の生活の生産に於て、相結ぶところの諸關

係、も亦特殊な、歴史的な、經過的な特性を有するものであるといふこと、最後に配分諸關係は本質に於てこの生産諸關係と一に歸するものであり、その裏面に過ぎないのであつて、同一の歴史的な經過的な性質が兩者に共通してゐるといふこと。(マルクス資本論、第三卷)

附録の十七

諸種の社會的經濟的構成の特性記述

階級前の社會

斯くてこの氏族制度は何といふ天真爛漫さをもつた不思議な制度であることよ！ 兵卒も憲兵も警官もなく、貴族も××も總督もなく、知事もなければ或は裁判官もなく、監獄もなく訴訟もなくして、萬事が圓滑に進行する。すべての喧嘩口論はそれに關係ある者の全體、即ち氏族又は種族乃至は個々の氏族の間でこれを解決する——たゞ極端な、稀にしか用ひられない手段として血の復讐だけが威嚇的に存在する。そして今日の死刑も亦、文明のあらゆる長所と短所とを附加された、この復讐の文明化された形態に外ならぬ。共同の事務は今日よりも遙かに多いけれども

——世帯は多くの家族に共同で共産主義的であり、土地は種族の所有であるが、たゞ小園のみが一時世帯に割り当てられてゐる——而も彼等はまた今日の廣大な複雑な行政機構の片鱗をも必要としない。すべてのものを關與者が決定する。しかも大抵の場合には數百年來の慣習が既に萬事を規律してゐた。貧者や窮民は有り得ない——共産主義的な世帯及び氏族は老者、病者、及び戰爭不具者に對するその義務を辨へてゐる。すべての人々は平等にして自由である——女も亦 奴隸の存在する餘地は未だ存在せず、他種族を隸屬せしむる餘地も亦通常存在しなかつた。イロクオイ人は一六五一年頃イリー人及び『中立國民』を征服した時、彼等に向つて同權者として同盟に加入するやうに提議した。被征服者はこれを拒絶するに及んで始めてその領域から放逐された。そしてかゝる社會が如何なる男女を生み出すかは、まだ腐敗しないインディアンと接觸したすべての白人が、これらの野蠻人の人格的威嚴、誠實、人格の強さ及び勇氣に驚歎することが之を證明する。……

種々の階級への分裂が行はれるまで人間及び人間の社會はこの様なものであつた。そして彼等の状態を今日の文明人の大多數者の状態と比較すれば、今日のプロレタリアや小農民と昔の自由な氏族員との間には法外な距たりがあるのである。

これはその一面である。吾々はこの組織が没落の運命にあつたことを忘れるものではない。それは種族以上に發達しなかつた。種族の同盟は、後に説く如く、またイロクオイ人の他種族に對する抑壓の企圖において既に示された如く、その崩壞の端初を既に示すものである。種族外の事は法律の外にあつた。明示的な平和條約がない所では種族と種族との戰爭が行はれ、そしてこの戰爭は人間のみにあつて他の動物には見られないやうな殘忍さを以て行はれた。そしてこの殘忍さは後に至つて始めて利害の點から緩和されたものである。その全盛期に於ける氏族制度は、吾々がそれをアメリカに於て見た如く、極めて未發達な生産を、従つて廣大な領域に於ける極めて稀薄な人口を前提する。従てそれは人間と無關係に對立する不可解な外的自然——それは幼稚な宗教的觀念に反映してゐる——によつて人間が殆ど完全に支配されることを前提とする。種族は人間にとつて依然として、種族外の者に對しても、種族自身に對しても、限界であつた。即ち種族、氏族及びそれ等の制度は神聖にして侵すべからざるものであり、自然から與へられたより高き權力であつた。この權力に對して個々人は感情、思想及び行動において無條件に服従してゐた。この時代の人々は吾々に如何に威風堂々と見えようとも、どれもこれも同じで殆ど一人々々の區別はなかつた。彼等はまた、マルクスの言ふ如く、自然生の共同體の臍の緒にくつついてゐたのであ

る。この自然生の共同體の權力は打破されねばならなかつた——それは打破された。然しそれは吾々には墮落、古代氏族社會の簡素な道德的高所からの墮落と見える諸勢力によつて打破された。新しい、文明化された社會をつくつたものは最も卑しい利益——野卑な貪慾、獸的な快樂慾、汚はしい吝嗇、共有財産の利己的な掠奪——である。古い、階級無き氏族社會の礎を掘り、これを崩壊させたものは卑劣極まる手段——盗み、暴行、詐欺、裏切——である。そして新しい社會それ自身は、その存在の二千五百年間を通じて、搾取され壓迫される大多數者を犠牲とする極めて少數者の發達に外ならなかつた。そしてこのことは今日過去の如何なる時よりも甚しいのである。(エンゲルス、家族、私有財産及び國家の起源、西雅雄譯、一三二——一三五頁)

奴隸所有制

一度び労働要具が生産の對象となるや、労働要具製作の可能性そのものも、丁度その製作の完成程度の良し悪しと同じく、その労働要具の製作に使ふ労働要具の如何に依つて全く決まる。この事は少しも説明せずとも誰にでも分かる事である。然し例へば次の事は一見したところでは全く合點の行かぬ事にもなる。即ちローマ人がシラクサを包圍した時代にアルキメデスの爲

した發明を記述して、プルトークは此の發明家を寛恕すべきであるとなしてゐる。彼は論じて云ふ。「哲學者が發明といふ如き仕事に携はるのは勿論、好ましくない。然しアルキメデスは祖國の危機を取去るのである」と。吾々は質問したい。一體、今日エディソンが發明といふ罪を犯したので、これを輕減する情狀はあるまいかと考へる人間があらうか？ と。今日我々は人間が機械を發明する能力を實施したからとて、それを不面目とは考へない、全くその反對である！ ところがギリシヤ人（或はお望みとあらばローマ人でもよい）は諸君の見らるる通り此の點の見方が全然異つてゐた。だからして彼等にあつては機械の發見及び發明の進み方が吾々に於けるよりも比較にならぬ程、緩漫に行はねばならなかつた、そして又事實上さういふ風であつた。此處でも矢張り、意見が世界を支配するやうに見える。然しギリシヤ人にあつては此の奇妙な意見は何故に生じたか？ 人間的「理性」の性質に依つて此の意見の起原を説明するわけには行かぬ。そこでギリシヤ人の社會的諸關係を念頭に置くより外に仕方がない、ギリシヤ及びローマの社會は周知の如く奴隸所有者の社會であつた。斯様な社會に於ては總ての筋肉労働、總ての生産事業は奴隸の受け持ちである。自由民はかゝる労働を恥ぢるのである、故に當然の事ではあるが生産過程に關係ある最も重要な發明に對してさへ、蔑視的態度を取る事になる。プルトークがアルキメ

デスを視る事、吾々が今日エディソンを視る如くでないのは此の爲めである。だが何故にギリシヤには奴隸制度が設けられたのであらうか？　ギリシヤ人が自己の理性に何かの錯誤を來した爲に奴隸組織を最上のものと考へたが爲ではないか？　否、その爲ではない。ギリシヤ人にも奴隸制度の存在しない時代があつた、そしてその時代には彼等は奴隸所有者の社會組織を自然的なるもの不可避的なるものとは決して考へなかつた。その後ギリシヤ人に奴隸制度が発生して、それが彼等の生活上に徐々に益々重要な役割を演じ始めた。その時、奴隸制度に對するギリシヤ市民の見解も變化した。即ち彼等はこれを全く自然的な、そして絶対に必要な制度として固守し初めたのである。然し何故にギリシヤ人に奴隸制度が発生し、發展したか？　その原因は確かに一定の社會的發展段階に達した他の諸國に於て、此の奴隸制度を發生せしめ、發展せしめた原因と同じものであらう。此の原因は明かである、即ちそれは生産諸力の状態の中に在る。事實、征服せられた敵を焼肉にして食ふよりもこれを奴隸に仕立てて、一層の利益を得る爲には、此の敵の強制労働から生ずる産物を以て敵自身の生計ばかりでなく、少くとも一部分は征服者の生計をも維持し得る様にせねばならぬ。これを云ひ代へれば、自己の統制する生産諸力が一定の發達段階に達してゐる事が必要である。まさに奴隸制度は此戸口を潜つて歴史の中へ這入り込むのである。奴

隸労働は生産諸力の發達を殆んど助長しない。即ち奴隸労働の下に於ける生産諸力の發達の進み方は極度に緩慢である。然しそれにも拘らず現實に前進してゐるのであつて、終には奴隸労働の搾取が自由労働の搾取よりも不利になるモメントが到來する。その時、奴隸制度は交替する、或は徐々に一部分づつ消滅する。奴隸制度を歴史の中へ導き入れた生産諸力の發達そのものが奴隸制度を放逐する。かくしてプルタークを振返つて見ると、アルキメデスの發明に對する彼の見解がその當時の生産諸力の状態に依つて條件づけられてゐた事が分かる。此の種類の見解は疑もなく爾後の發見及び發明の進行上に巨大な影響を及ぼすものであるが故に、吾々は尙更に次のやうに云ふ事が出来る。即ち各々の一定の國民に於ける、その一定の歴史時代の各々を見るにその國民の生産諸力の爾後の發達は、考察さるる時代の生産諸力の状態に依つて決定せられる、と。

(アレハーフ、史的元論、川内唯彦譯)

奴隸制度が生産の支配的形態であるところでは、労働は奴隸のする行爲となり、従つて自由人にとつては不名譽なものとなる。これによつて斯かる生産方法からの逃れ路は閉ざされることになるが、一方更に發展した生産は奴隸制度に制限を感じ、この制限の排除へと押し迫られる。奴隸制度を基礎とするすべての生産及びその上に立つ所の社會は、かかる矛盾によつて滅亡する。

多くの場合解決は先行の社會が、他のより強力な社會によつて暴力的に隸屬させられることによつてもたらされる。(エンゲルス、自然辯證法)

封建社會

第三の形態は封建的若くは身分的財産である。古代は都市及びその領域から出發したが、中世は農村から出發した。所與の人口が稀少にして大面積の土地に散在してゐたこと——この人口は征服者によつて何等大した増加も與へられなかつた——がこの出發點の變遷の原因であつた。それ故にギリシヤ及びローマとは反對に、封建的發展はローマ征服並びに初めそれと結びついて行はれたところの農業の普及とによつて準備されたところの、古代に比すれば遙かに廣大な、土地の上に於て始まつた。ローマ帝國の崩壞期の數世紀及び蠻人による征服そのものは多くの生産力を破壊した。ために農業は衰微し、工業は販路の缺乏の爲めに没落し、商業は活氣を失ひ若くは暴力によつて杜絶せしめられ、農村及び都市の人口は減少してゐた。かかる既存の諸關係及びそれによつて條件づけられたところの、征服組織の方法はゲルマン人の軍制の影響の下に封建的財産を

發達せしめた。この封建的財産も亦種族財産及び公共自治體財産と同様に、一つの共同體に基礎を置いてゐる。然しながら古代の共同體に奴隸が對立してゐたのとは異つて、この共同體には農奴的な小農が直接に生産に携はる階級として對立してゐる。封建制が完成すると同時に、尙この上に都市に對する對立が加つてくる。土地所有の教權制的構成並びにそれと關聯する武裝せる從臣は貴族に農奴を支配する力をあたへた。この封建的構成は、恰も古代の公共自治體財産と同様に生産に携る被支配階級に對立する一つの結合であつた。只結合の形態及び直接生産者に對する關係を異にしてゐたに過ぎなかつた。蓋しこれは異なる生産の諸條件が存在してゐたがためによるものである。

土地所有のかくの如き封建的構成に對應して都市に於いては職業團體的財産、即ち手工業の封建的構成が存在してゐた。都市におけるこの財産は主として各個々の人の勞働から成立してゐた。聯合せる掠奪貴族に對抗するために聯合することが必要であつたこと、製造家が同時に商人であつた時代においての共同の市場家屋を必要としたこと、繁榮せる都市へ流れ込んでくる逃亡農奴の競争が甚しくなつたこと、全國に封建的組織が行はれてゐたこと、これらの諸事情は相俟つて同業組合を發達せしめた。個々の手工業者が漸次に僅かではあるが資本を蓄へたことと人口が増

加しても彼等の數が増加しなかつたことは職人及び徒弟關係を發展せしめたが、この關係は都市に農村におけるそれと類似の教權制的關係を成立せしめた。

上述の如く、封建時代においては、主要なる財産は、一つは農奴労働が結びつけられてゐた土地財産であり、他は職人の労働を支配する僅かの資本をもつ自分自身の労働であつた。兩者の構成は狹隘な生産諸關係——土地耕作の僅少と未發達及び手工業的工業——によつて制約されてゐた。分業は封建制度の開花期にはあまり行はれなかつた。いづれの國々も都市と農村との對立を内包してゐた、身分的構造は勿論極めて劃然としてゐたが、併し乍ら農村における王侯貴族僧侶及び農民、都市における親方、職人、徒弟及び間もなく後には日傭賤民と云ふ區別の外には重要な分割は殆ど行はれなかつた。農業においてはそれは零細耕作によつて困難ならしめられてゐたのみならず農民は傍ら家内工業さへ營む状態であつた。工業市においては、労働は個々の手工業の内部においては全然分割されてなく、各手工業間においても極めて僅かしか分割されてゐなかつた。工業と商業との分割は比較的古い都市では既に存在してゐたが、比較的新しい都市においては後に都市が相互に接觸するに至つた時になつて初めて發展した。

比較的大きい國々を封建的な王國に統合することは、都市にとつてさうであつた如く、土地貴

族にとつて必要なことであつた。それ故に支配階級の即ち貴族の組織は何處においても一人の帝王を上に乗せてゐた。(マルクス・エンゲルス・「フォイエルバッハについて」マルクス・エンゲルス・アルヒーフ第一冊、二五四—二五六頁。)(邦譯、ドイチェ・イデオロギー(永田書店)一四七—一四九頁。)

附録の十八

資本主義的構成の特徴

先づ單純なる協力作業と工場的手工業とによる、産業における變革、次に從來散在してゐた生産機關の大工場への集中。従つて個人的生産機關の社會的生產機關への變化、但しその變化は大體において交換の形式に影響を及ぼさない。領有の舊形式は依然として存してゐる。資本家が出現する。資本家は生産機關の所有者たる資格においてその生産物をも領有し、そしてそれを商品とする。生産は既に社會的行爲となつてゐる。交換及びそれと同時に領有は、矢張り、個人的行爲、個々人の行爲となつてゐる。社會的労働生産物が個々の資本家によつて領有されてゐる。この根本からして今日の社會を動かしてゐる所の一切の××が起つてくる。大工業はその一切

の矛盾を曝してゐる。

A 生産者が生産機關から分離される。労働者が終身賃労働を宣告される。プロレタリアートとブルジョアジーとの對立。

B 商品生産を支配する法則が、段々優勢となり、段々有效となる。無制限の競争。個々の工場内における社會的組織と、全生産界における社會的無政府状態との矛盾。

C 一方には、競争の結果として、凡べての製造家に強制される機械の完成。それは即ち段々多くの労働者を工場より追ひ出すことを意味する。即ち産業豫備軍。そして一方には、矢張り凡べての製造家が競争のために強制せられて、生産が無制限に擴大される。この兩方面からして、生産力の發達は前代未聞となり、供給は需要に超過し、生産の過剰となり、市場の充塞となり、十年目毎の恐慌となり、悪循環となる。即ち、こちらには生産物と生産機關の過多、あちらには仕事のなく衣食の道のない労働者の過多、然るにこの二つの、生産の原動力、社會安寧の原動力が、一緒に結びついて働くことが出来ない。なぜと云ふに、資本主義的生産方法にあつては、生産力が先づ自ら資本に化しないではそれを運轉させることも、その生産物を流通させることも出来ない。所が、その生産力が多すぎるため、資本に化することができないのである。この矛盾は

如何にも馬鹿々々しい點にまで達してゐる、生産の方法が交換の形式に對して反逆する。ブルジョアジーは自分の所有する社會的生産力を、これ以上に經營する能力のないことを自認する。

D 資本家自身も餘儀なく、生産力の社會的性質を部分的に承認する。生産及び交通の大設備を、初めは株式會社と爲し、次にトラストと爲し、終りには國有となす。ブルジョアジーが無用の階級たる事が示される。彼等の社會的職分は凡べてそれに備はれてゐる手先によつて果される。

(エンゲルス・アンチヂューリング論)

資本主義的生産における三つの主要事項。

(一) 生産機關が少數人の手に集積されること。これがため、生産機關は直接の労働者の所有物としては現はれなくなり、寧ろ生産の社會的能力に轉化される。もつとも最初は、それが資本家達の私有物として現はれることは事實である。彼等はブルジョア社會の受託人であつて、その受託から生ずる一切の果實を己れの懐ろに收めて了う。

(二) 協業や、分業や、労働と自然科學との結合やによつて、労働それ自身が社會的労働として組織されるやうになること。

資本主義的生産方法は對立的の形態をもつてであるとは云へ二つの方面から私有と私労働とを

止揚するものである。

(三) 世界市場の成立。

資本主義的生産方法の内部には、人口に比して驚くべき程度の生産力が發達し、更らにこれと同一の比率をもつてではないにしろ、兎に角人口に比し遙かに急速に増殖するところの資本價值（單にその物質的地盤のみではなく）が發達してくるのであるが、此等のものは富の増殖に比して益々狹隘となるところの、かゝる異常な生産力の作用を受ける基礎、及びこの膨脹しつゝある資本の價值増殖事情と衝突することになる。かくして恐慌なるものが生じてくるのである。（マルクス、資本論、第二卷、第一部二四八—二四九頁。）（邦譯、新潮社版、三三〇—三三一頁。）

ブルジョアジイが成立した基礎なる生産手段及び交易手段は、封建社會のなかにおいて發生した。この生産手段の一定の發展段階において、封建社會において生産と交換が行はれた諸條件、即ち農業及び工業の封建的組織、一言に云へば、封建的財産關係が既に發達した生産力にもはや適合しなくなつた。それらは生産を促進せず、却つて沮害した。それらは邪魔物に變じた。それらは××されねばならなかつた。そして××されたのである。

その跡には自由競争が、それに適合した社會的、政治的秩序を伴つて、即ちブルジョア階級の

經濟的的政治的支配を伴つて現はれた。

今我々の眼前にもこれと同様な動きが進行しつゝある。この偉大な生産手段及び交易手段を魔術的に現出せしめたところのブルジョア的生産交易關係、ブルジョア的財産關係、即ち現代ブルジョア社會は自分が呪文を唱へて呼び出した地下の魔物を自分で××することが××××なつた魔術師の如きものである。數十年この方、商業及び工業の歴史なるものは、近代的生産諸力がブルジョアジイとその支配の存立條件たる近代的生産諸關係並びに財産關係に對してなしたる××の歴史である。その例證としてはかの××××を挙げれば足りる。それは周期的に回期して一回毎に益々脅威的に、全ブルジョア社會の××××からしめるものである。商業恐慌に際しては出來上つた生産物の多大な部分が定期的に破壊されるばかりでなく、既に作られた生産諸力も亦破壊される。恐慌においては一種の社會的流行病——それは過去のあらゆる時代ならば不合理のことと見えたであらう——が發生するのである。即ち過剰生産の流行病が。社會は突如として一時の野蠻状態に還つたやうに見える。飢饉と大破壊とが社會から一切の生活手段を杜絶したやうに見える。工業も商業も破壊されたやうに見える。それは何故か？ 外でもない。社會があまり多くの文明を、あまり多くの生活手段を、あまり高度に發展した工業を、商業を有するからであ

る。社會の用を務むべき生産諸力は、もはやブルジョア的生產諸關係を促進させる役には立たない。反對にそれはこの財産關係に對してあまりに強力になり、財産關係によつて沮害されることになつた。そして生産諸力がこの阻害を突破するや否や、全ブルジョア社會は××××××、ブルジョア財産の××××××される。ブルジョアの諸關係は自分の作り出した富を包擁するのあまりに狭過ぎるものとなつた。——何によつてブルジョアは恐慌を切り抜けるか。一面には多量の生産諸力の止むに止まれぬ強制的な破壊によつて、他面には新市場の獲得と舊市場のより根本的な搾取とによつて。そうしてどうなるのか？ 結局より全面的な、より××××××を準備し、恐慌を防遏する手段を減少せしめることになる。

ブルジョアが封建制度を倒したその武器が今はブルジョアに××××××されてゐる。

併しブルジョアは、自分に××××××武器を鍛えあげたばかりでなく、××××××××××××××××。即ち近代の労働者、プロレタリアを作り出した。

附録の十九

帝國主義

帝國主義は資本主義一般の基本的諸性質の發展及びその直接の繼續として生長した。だが資本主義は甚だ高度の一定の發展段階に至つて初めて資本主義的帝國主義となつたのである。この段階において資本主義の若干の基本的性質はその對立物へ轉化し始め、資本主義からより高度な社會經濟的構成への過渡時代の特徴は全線に亘つて形成され、且つ發現した。この過程裡における經濟的基礎は資本主義的獨占による資本主義的自由主義競争の交替である。自由競争は資本主義及び商品生産一般の基本的性質である。獨占は自由競争の直接の對立物である。ところがこの自由競争が、我々の眼前において獨占到轉化し始め、大生産を生ぜしめ、小生産を驅逐し、大生産には最大の生産をもつて置換し、遂に生産と資本の集積をしてそのなかより獨占、即ちカルテル、シンジケート、トラスト及びこれ等と融合せる數十億の金を運轉する十ばかりの銀行の資本が既に發生し、また今も發生しつゝある程の境地に達せしめた。同時に獨占は自由競争から生長しつゝ、自由競争を排除せず、その上に、且つそれと並んで存在し、これにより特に尖鋭化する、激烈なる幾多の矛盾、軋轢、衝突を生むのである。獨占は資本主義からより高度の秩序への過渡である。

帝國主義に最も簡略な規定を與へねばならぬとすれば、帝國主義は資本主義の獨占的段階であ

ると云ふべきであらう。この規定は最も重要なものを含んでゐる。何んとなれば、一方、金融資本は獨占的工業家同盟の資本と融合せる獨占的少數最大銀行の銀行資本であり、他方、世界の分割は、何れの資本主義的強國にも占領されざる地方に何等の妨害も受けずに擴大さるべき植民地政策から、既に分割され盡してゐる地球上地域を獨占的に領有する植民地政策への過渡だからである。

ところが餘りに簡略な規定は、それが重要な點を要約してゐるので便利なことは便利であるが規定すべき現象の最も本質的な特徴を特に導き出さねばならなくなると、矢張りこれでは不充分である。だから我々は、一切の規定は一般に、完全なる發展における現象の全面的聯契を決して包括し得ないものであるといふ條件的、相對的意義を忘れずに、次に示す五つの根本的徵表を包含するやうな帝國主義の規定を與へねばならぬ。(一)生産及び資本の集積は甚だ高度の發展段階に到達した、従つてこの集積が經濟生活において決定的役割を演ずる獨占を作り出したこと。

(二)産業資本と銀行資本との融合。及びこの「金融資本」に基づく金融寡頭政治の成立。(三)商品輸出と異なる資本輸出が特に重要な意義を獲得してゐること。(四)世界を分割する國際的、獨占的、資本家同盟の形成。(五)最大資本主義列強に依る地球の領土的分割の完了。帝國主義と

は、獨占と金融資本の支配が出来上り、資本輸出が優越的意義を持ち、國際トラストに依る世界の分割が開始され、最大資本主義諸國による地球全領域の分割が完了されたやうな發展段階にある資本主義である。

基本的な純經濟概念(上述の規定はこれのみに限られてゐる)を考慮する許りでなく、資本主義一般に對する資本主義の一定段階の歴史的的地位或ひは労働運動内の基本的二傾向と帝國主義の關係をも考慮に入るゝ場合には、帝國主義に尙別個の規定を與ふることができ、又與へねばならぬこと、このことを我々は後で見るとあらう。我々はこの意味に解釋されるべき帝國主義が疑ひもなく、資本主義發展の特殊段階であることを直ちに注目しなければならぬ。(レーニン資本主義最高の段階として帝國主義、全集、十九卷(第一版)一四一—一四二頁)(邦譯、川内唯彦譯、レーニン、帝國主義論體系、一〇八一—一〇二頁。)

……帝國主義の最も深い經濟的基礎は獨占である。この獨占は資本主義的獨占である。即ちこれは資本主義のなかより成長して、資本主義、商品生産、競争と云ふ一般的环境内にあつて、この一般的环境に對して不斷の救ふべからざる矛盾をなしてゐる。だがそれにも拘らず、この獨占は、あらゆる獨占と同じく、不可避的に停滯と腐爛の傾向を生む。例へ一時的にせよ、獨占價格

が設定される限り、それに應じてある程度まで技術的進歩、従つてまたその他のすべての進歩、前進運動を促進する諸原因が消滅する。更にまた技術的進歩を人為的に阻止する經濟的可能性が現はれる。例へばアメリカでは、オウエンス某が壘製造業に革命を齎すに足る製壘機械を發明した。ところがドイツの壘製造家カルテルは、オウエンスの特許を買ひ取つて、その實施を止め、その使用を抑へた。勿論、資本主義の下における獨占は完全に、そして甚だ長い期間、世界市場上の競争を排除することは決して出来ない。勿論、技術の改良を取り入れて生産費を低下せしめ、利潤を高騰せしめる可能性は、改良に有利な影響を及ぼすものである。だが獨占到固有な停滯と腐爛の傾向も亦作用を續ける。そして個々の産業部門、個々の國においては一定の期間はこれが支配することになる。

特に廣汎で、富裕な、或ひは便宜の地位にある植民地の獨占的領有もこれと同じ方向に作用する。

更に、帝國主義は、既に我々の知つてゐる通り、少數國內における、有價證券にして千億乃至千五百億フランに達する貨幣資本の蓄積である。かくして金利生活者、即ち「利札を切つて」生活する人々、如何なる企業にも全く關係しない人々、遊惰安逸を職業とする人々の階級、或ひは

もつと正確に云へば層が不可避免的に増大する。帝國主義の最も本質的な經濟的基礎の一つたる資本輸出は生産に對する金利生活者層のかゝる最も完全なる乖離をさらに強化し、若干の海外諸國及び若干の殖民地の労働を搾取することによつて生活してゐるあらゆる國に寄生生活と云ふ烙印を押すのである。(レーニン、資本主義の最高の段階としての帝國主義全集、第二版、一五二―一五二頁。)

(邦譯、レーニン、帝國主義論體系、川内譯、一三三―一三四頁。)

附録の二十

同志フハーリンの規定における社會

同志フハーリンが社會及び經濟のいくたの基本的な具體的問題において、ボグダーノフの「社會的組織的見地」を引き入れてゐるのに對して、レーニンが如何に評價してゐるかを見よう。

社會を社會的生產諸關係の總體だと見るマルクス主義的な近づき方は、全く唯物論的な、社會に對する見地なのだが、同志フハーリンは、ボグダーノフの影響を受けて、社會現象の研究への新たな近づき方を發明する。フハーリンにとつては、社會は單に生産及びその他の社會的諸關係の總

體なのではなく、彼は社會を組織的方面から、「社會的組織的見地」から觀察しようとする。さればこそ、ブハーリンは「社會は自然に於ける諸要素の體系だ」といふ如き、理論的に「明白な」表現を自ら許すのである。「我々は、社會を自然に於ける諸要素の體系としてとりあげてきた」とブハーリンは書いてゐる。

レーニンはこの空辭を讀んで餘白に只一言「救けて！」と書き入れるのが必要だと考へた。かゝる俗流自然主義的な、超唯物論的な社會の定義は、レーニンには手柔らかに扱つても辯證法的唯物論の命題とは殆んど一致してゐないものゝやうに思はれた。

ブハーリンがボグダーノフと同じやうに、社會諸現象の分析に取り入れやうと努めた。「社會的組織的見地」については、レーニンは同様雄辯な、そして皮肉な評註を加へてゐる。「だが、組織的見地でない（社會的）見地があり得るだらうか？」と。

特に注目に値ひするものは、再生産過程を社會的内容から離れて分析せんとする、同志ブハーリンのスコラ哲學的試みである。周知の通り、經濟現象を特定の社會形態または社會的内容を離れてとりあげ、かくして社會の根本法則を發見せんとすることは、ボグダーノフ派の間に人氣を博した方法である。ブハーリンもこの規則を求めてゐる——「プロレタリアートの當面の任務は大

體において、形式上は、即ち過程の社會的内容を離れて云へば、消極的擴張生産の場合におけるブルジョアジーの任務と同一である。即ちあらゆる資源を節約すること、それを計畫的に利用すること、集中を最大限まで行ふことである。」

社會的内容（または形態）を捨象せんとするこの試みは、再生産の過程そのものを、空虚化することは全く明かである。この書物の餘白に、以上の引用句に對するレーニンの次の評價を讀むのは當り前のことだ。「私の」ボグダーノフ的スコラ哲學は「私の」最大の敵である。」

マルクス主義は、社會及び社會現象の點檢に、社會的生産的並びに階級諸關係を重要視しつゝ、近づくが、これに反してボグダーノフブハーリンの「社會的組織的見地」は必然的にこの決定的な契機を閉却するに至る。ブハーリンの「社會的組織的見地」が屢々、階級的契機、階級諸關係の抹殺を伴つてゐるのは恐らく偶然ではあるまい。「社會學的體系」「組織學」等々の蔭にかやうにして屢々著者は、他ならぬ階級及び階級諸關係を閉却してゐる。「社會的體制」「社會的構成」と幾度となく云はれてゐるが、この概念が「階級」の概念を離れて作らるれば、殆んど何等の内容をも有しなくなる。「社會的體制」「社會的構成」——これらのすべては「階級」及び「階級社會」の概念なくしては充分に具體的でない（レーニン）

同志ブハーリンはボグダーノフの哲學的術語の上にたつて、「社會的階級諸關係」について一再ならず述べてゐる。これについてレーニンが與へてゐる註は興味がある。同志ブハーリンはカウツキーの誤謬を指摘して次の如く書いてゐる――

「資本主義社會の生産諸關係は、同時にまた社會的階級諸關係並びに技術的勞働諸關係である」これに對するレーニンの註はかうである――「まさにこの術語が正しくない。――社會的でない階級諸關係といふものはない。もつと簡單にもつと正確に（理論的に）かう言ふべきであつた彼（カウツキー――ボリーリン）は階級闘争を忘れてゐる、と。」（B・S ボリーリン、ソヴェート經濟及び同志ブハーリンの誤謬について、二一―三頁。）（邦譯、白揚社版、マルクス主義の旗の下に、第十冊六一―六三頁。）

四 ソヴェート同盟における生産諸力と生産諸關係

附録の二十一

過渡期の經濟組織に關するレーニンの特徴づけ

ロシアの經濟問題に身を入れた人で、恐らくは唯の一人と云へども、この經濟の過渡的性質を否定した者はあるまい。また「社會主義ソヴェート共和國」といふ表現は、社會主義への移行を實現せんとするソヴェート權力の決意を意味するものであつて、決して現在の經濟秩序を、社會主義的であると認めることを意味しないといふことを、否定するやうな共產主義者は恐らく一人もあるまい。

然らば「過渡」といふ言葉は、何を意味するであらうか。過渡といふ言葉は、これを經濟に適用した場合には、與へられた制度のうちには、資本主義と社會主義との要素と部分と斷片とがあるといふことを意味するのではあるまいか。すべての人々は然りと承認するだらう。けれどもこれを承認したすべての人々もロシアに存在する種々なる社會經濟上の關係はどんなであるかを、必ずしも熟考してはゐない。然るにこゝに問題の全神髓がある。

これ等の構造を舉げてみると、

- (一) 父家長制的な、即ち著しい程度に自然的な農業。
 - (二) 小規模な、商品生産（穀物を賣る農民の大多數はこれに屬する）
 - (三) 私經營的資本主義。
 - (四) 國家資本主義。
 - (五) 社會主義。
- である。

ロシアは非常に大きくて多様だから、すべてこれらの社會經濟組織の各種のタイプが、そこに織り込まれてゐる。狀勢の獨自性はこの點にある。（レーニン全集、第十八卷。）（邦譯、レーニン著作集、第一卷、五頁―七頁。）

附録の二十二

我々は社會主義の時期に這入つた

我々の時期は普通、資本主義から社會主義への過渡期と云はれてゐる。それは一九一八年に過渡期と云はれた。その時レーニンは、その有名な論文「『左翼小兒病』において、初めて經濟生活

の五つの構造をもつこの時期を特徴づけた。それは現在、一九三〇年にも過渡期と云はれてゐる。今やこれ等の構造のうちの若干のものは、陳腐なものとして既に姿を消しつゝある。然るに一方工業及び農業の領域における新しい構造は、未聞の速度を以て、成長し、發展しつゝある。これ等二つの過渡期は同じであるとか、それ等は互ひに根本的に區別されるところがないとか言ひ得るであらうか。そんなことが言へないのは明かである。我々は一九一八年に國民經濟の領域において、何を持つてゐたであらうか。破壊された工業及び焼け残り、大衆的現象としてのコルホーズ及びソフホーズの缺除、都市における「新」ブルジョアジーと、農村における富農の成長である。現在我々は何を持つてゐるであらうか。復興され、そして再建された社會主義工業、單に夏のみについても、ソヴェート同盟のあらゆる耕地の四十パーセント以上を持つソフホーズ及びコルホーズの發展した體制、都市における死滅しつゝある新ブルジョアジー、農村における死滅しつゝある富農を持つ。そこにも過渡期があり、こゝにも過渡期がある。併し尙それ等は天と地のやうに根本的に互ひに違つてゐる。併し尙、我々が最後の重大なる資本主義的階級、富農の階級の清算の門口に立つてゐるといふことを否定することは何人もできない。我々は既に古い意味の過渡期から抜け出た。あらゆる戦線にわたる直接的な、そして展開した社會主義建設の時期に

這入つた。我々が既に社會主義の時期に這入つたといふことは明かである。何故なら、例へ社會主義社會の建設及び階級的差別の絶滅までには遠いとは云へ、現在、社會主義的分野が、全國民經濟のあらゆる經濟的桿杆をその手に握つてゐるからである。(スターリン、レーニン主義の諸問題、七〇九頁。

附録の二十三

資本主義的經濟體系と社會主義的經濟體系

我々はかくしてソヴェート同盟の國內狀態の形像を持つてゐる。

我々はそれと共に主要資本主義諸國の國內狀態の形像を持つてゐる。

思はずも次のやうな問題が起つてくる。もしこれ等二つの形像を互ひに對置し、そして比較したなら、結論はどうなるだらう。

この問題は、あらゆる國々のブルジョアの活動家が、あらゆる段階と等級の、ブルジョア新聞雑誌が、はつきりと資本主義的なものから、メンシエヴィキルトロツキー主義的な新聞までが資

本主義諸國の「繁榮」と、ソヴェート同盟の「死滅」、ソヴェート同盟の「財政的及び經濟的破産」等々を叫んでゐるので、一層興味がある。

それで我が、ソヴェート同盟における狀態と、彼等、資本主義諸國における狀態との分析の結果はどうなるか。

主要な、一般に知られた事實を記さう。

彼等、資本家の下においては、工業の領域においても、農業の領域においても、經濟恐慌と生産の沈滞が見られる。

我が、ソヴェート同盟では、經濟的高揚と國民經濟のあらゆる領域における、生産の成長がある。

彼等、資本家の下では勤勞者の物質的状態の悪化、勤勞者の勤勞賃銀の低下、及び失業の増大がある。

我が、ソヴェート同盟では勤勞者の物質的状態の向上と、勤勞者の勤勞賃銀の騰貴及び失業の減退がある。

彼等、資本家の下では、何百萬の勤勞日の喪失となるストライキと示威運動の増大がある。

我が、ソヴェート同盟では、ストライキはなく、労働者と農民の労働の昂揚の成長がある。それは、我々の秩序に何百萬もの追加的な労働日を與へてゐる。

彼等資本家の下には、國內狀勢の×××と、資本主義的××に反對する労働階級の×××の成長がある。

我が、ソヴェート同盟には、國內狀勢の鞏固化と、労働階級の何百萬もの大衆の、ソヴェート權力を廻つての、結合がある。

彼等資本家の下には、民族問題の尖鋭化と、印度、印度支那、印度ネシア、ヒリツピン諸島等々における國民解放運動の成長がある。それは國民戦争に轉化しつゝある。

我がソヴェート同盟には、民族的友愛の基礎の鞏固化と、保證された民族的平和とソヴェート同盟の何百萬もの各民族のソヴェート權力を廻つての結合がある。

彼等資本家のもとには困惑と情勢の一層の悪化の見通しがある。

我がソヴェート同盟には自分の力に對する確信と情勢の一層の改善に對する見通しがある。

彼等はソヴェート同盟の「破滅」、資本主義諸國の「繁榮」などを吠えまはつてゐる。かくも「突然に」經濟恐慌の渦に捲き込まれ、そして今尙××の××から抜け出ることの出来ない者の不可

避的な××を云々した方が正しくはないか？

彼等資本家のもとにおけるかくも重大な××と我がソヴェート同盟における眞面目な成功の原因は何處にあるか？

人々は國民經濟の狀態は多く、資本の多少によると云つてゐる。これは勿論正しい。資本主義諸國における恐慌とソヴェート同盟における昂揚は我國に資本が豊富で彼等のもとに資本が不足してゐる、と云ふことによつて説明されるか？ 否、勿論否である。ソヴェート同盟における資本が資本主義諸國におけるよりもはるかに少いと云ふことはあらゆる人々が知つてゐるところである。若し問題があたへられた場合において蓄積の狀態によつて決定されるのなら、我々は恐慌を持ち資本主義諸國は昂揚を持つだらう。

人々は經濟の狀態は多く、經濟的幹部の技術的並びに組織的鍛錬に依存すると云つてゐる。資本主義諸國における恐慌とソヴェート同盟における昂揚は彼等のもとにおける技術的幹部の不足と我國におけるその豊富さによつて説明されるのではないか？ 否、勿論、否。技術的に熟練を積んだ幹部が我がソヴェート同盟におけるよりも資本主義諸國にはるかに多いと云ふことは何人も知つてゐる。我々は技術の領域でドイツ人、イギリス人、フランス人、イタリア人及び何より

我が、ソヴェート同盟では、ストライキはなく、労働者と農民の労働の昂揚の成長がある。それは、我々の秩序に何百萬もの追加的な労働日を與へてゐる。

彼等資本家の下には、國內狀勢の×××と、資本主義的×××に反對する労働階級の××××の成長がある。

我が、ソヴェート同盟には、國內狀勢の鞏固化と、労働階級の何百萬もの大衆の、ソヴェート權力を廻つての、結合がある。

彼等資本家の下には、民族問題の尖鋭化と、印度、印度支那、印度ネシア、ヒリツピン諸島等々における國民解放運動の成長がある。それは國民戦争に轉化しつゝある。

我がソヴェート同盟には、民族的友愛の基礎の鞏固化と、保證された民族的平和とソヴェート同盟の何百萬もの各民族のソヴェート權力を廻つての結合がある。

彼等資本家のもとには困惑と情勢の一層の悪化の見通しがある。

我がソヴェート同盟には自分の力に對する確信と情勢の一層の改善に對する見通しがある。

彼等はソヴェート同盟の「破滅」、資本主義諸國の「繁榮」などを吠えまはつてゐる。かくも「突然に」經濟恐慌の渦に捲き込まれ、そして今尙××の××から抜け出ることの出来ない者の不可

避的な××を云々した方が正しくはないか？

彼等資本家のもとにおけるかくも重大な××と我がソヴェート同盟における眞面目な成功の原因は何處にあるか？

人々は國民經濟の狀態は多く、資本の多少によると云つてゐる。これは勿論正しい。資本主義諸國における恐慌とソヴェート同盟における昂揚は我國に資本が豊富で彼等のもとに資本が不足してゐる、と云ふことによつて説明されるか？ 否、勿論否である。ソヴェート同盟における資本が資本主義諸國におけるよりもはるかに少いと云ふことはあらゆる人々が知つてゐるところである。若し問題があたへられた場合において蓄積の狀態によつて決定されるのなら、我々は恐慌を持ち資本主義諸國は昂揚を持つだらう。

人々は經濟の狀態は多く、經濟的幹部の技術的並びに組織的鍛錬に依存すると云つてゐる。資本主義諸國における恐慌とソヴェート同盟における昂揚は彼等のもとにおける技術的幹部の不足と我國におけるその豊富さによつて説明されるのではないか？ 否、勿論、否。技術的に熟練を積んだ幹部が我がソヴェート同盟におけるよりも資本主義諸國にはるかに多いと云ふことは何人も知つてゐる。我々は技術の領域でドイツ人、イギリス人、フランス人、イタリア人及び何より

も先づそして主としてアメリカ人の弟子であると云ふことを決して匿さなかつた、また匿さうとは思つてゐない。幹部の問題は國民經濟の發展にとつて重大な意義を持つとは云へ、此處では問題は技術的幹部の多少によつて決せられはしない。

問題の解答は、文化狀態の水準が資本主義諸國におけるよりも我國に高いと云ふ點にあるだろうか？ それもまた否である。恐慌は資本の支配が始まると共に生れた。そして既に一世紀以上も資本主義の定期的な經濟恐慌が起つてゐる。そして十二—十八年、或ひはそれ以下の年數毎に繰り返されてゐる。あらゆる資本主義の政黨、最も「天才的な」人々から最も凡庸な人々にまで至るあらゆるいくらかでも著名な資本主義の活動家は自分の力を恐慌の「防止」若しくは「絶滅」の事業のなかで試みた。併し彼等は凡べて敗北の浮目を見た。フーヴァーがその仲間と共に敗北をなめたと云ふことに何の驚くことがあらうか？ 其處では問題は資本主義の指導者や政黨にあるのではない。たとへ資本主義の指導者や政黨は此處では少からぬ意義を持つてゐるにして

も。

それなら問題は何處にあるか？

ソヴェート同盟は文化的におくれてゐるにもかゝらず、資本が不足してゐるにもかゝらず、技術的に鍛へられた幹部が少いにもかゝらず、成長しつゝある經濟的昂揚の狀態のうちにある經濟的建設の戦線において、決定的な成功を得てゐるのに、先進資本主義諸國は、資本が豊富で、技術的な幹部が豊富で、そして高い文化水準にあるにもかゝらず、成長しつゝある經濟恐慌の狀態にあり、經濟的發展の領域において、敗北につぐに敗北を得てゐる原因はどこにあるか？

原因は、我々と資本家の下における經濟體制の相違にある。

原因は、資本主義的經濟體制の無力さにある。

原因は、ソヴェート經濟體制の資本主義體制に對する優越にある。

ソヴェート經濟體制とは何か。

ソヴェート經濟體制とは次のものを意味する。

- 一、資本家の階級の××××され、そして労働階級の権力と代置されてゐる。
- 二、生産要具、及び生産手段、土地、工場等は資本家から取り上げられ、労働階級と勤勞農民大衆の所有に引き渡されてゐる。

三、生産の發達は競争と資本家的利潤の保證の原則に従屬せず、計畫的指導と、勤勞者の物質的並びに文化的水準の系統的昂揚の原則に従屬する。

四、國民收入の分配は、搾取者の階級の富裕化と彼等の無数の寄食者的下僕のために行はれず、労働者と農民の物質的狀態の系統的向上と、都市及び農村における社會主義的生産の擴大のために行はれる。

五、労働者の物質的狀態の系統的改善と、彼等の需要の（購買力の）斷えざる成長は、生産の擴大の不斷に成長する源泉となり、労働階級をして過剰生産、失業の増大等から免かれしめる。

六、労働階級は、資本家のためにでなく、自分自身のために働く國內の主人である。

資本主義的經濟體制とは何か？

一、國內の権力は資本家に屬する。

二、生産要具及び手段は、搾取者の手に集中されてゐる。

三、生産は労働大衆の物質狀態の改善の原則に従はず、高度な資本主義的利潤の保證の原則に従ふ。

四、國民所得の分配は、労働者の物質狀態の改善のために行はれず、搾取者の利潤を最大限に保證するために行はれる。

五、資本主義的合理化と、生産の急速な成長とは、資本家に高度な利潤を與へることを目的と

し、何百萬もの労働大衆の貧困な状態と、物質的保證の低下にその障害としてつき當る。これ等の労働大衆は、最少限度の範圍内においてさへも、自分の要求を満足する可能性をつねに持つてゐるとは云へないのである。このことは必然的な過剰生産恐慌、失業の増大等の地盤をつくる。

六、労働階級は自分のために働くのでなく、別の階級、 $\times\times\times$ のために働く、 $\times\times$ される階級である。

かやうなものが、ソヴェート經濟體制の、資本主義體制に對する優越である。かやうなものが社會主義的經濟體制の、資本主義體制に對する優越である。

我がソヴェート同盟には、成長しつゝある經濟的昂揚があり、彼等資本家の下には成長しつゝある經濟恐慌があることの原因は、まさにそこにある。

我がソヴェート同盟には、大衆の需要（購買力）の成長が都合よく、生産の成長を追ひ越し、それを前進させてゐるのに、彼等資本家の下では反對に、大衆の需要（購買力）の成長が決して生産の成長に追いつかず、つねにそれからおくれ、生産を時々恐慌に導いてゐることの原因はまさにそこにある。

彼等資本家の下においては、恐慌に際しては高い價格を維持し、高い利潤を保證するために、

商品の「餘剰」を廢棄し、農業生産物の過剰を焼き拂ふことが、全く正當なことだと考へられてゐるのに、我がソヴェート同盟では、かゝる犯罪の罪人は狂人病院に入れられるといふことの原因は、まさにこゝにある。

彼等、資本家の下においては、労働者は現存資本主義的權力に對する××的××を起して、ストライキや示威運動をやつてゐるのに我がソヴェート同盟では、我々は何百萬もの労働者及び農民の偉大な労働上の競争の光景を持つてゐることの原因はまさにこゝにある。そしてこれ等の労働者農民は身を以てソヴェート權力を守らうとしてゐる。

ソヴェート同盟における國內狀勢の安定と鞏固、資本主義諸國における國內狀勢の不安定と動搖の原因は、まさにこゝにある。

自分の生産の「餘剰」を、どこにさばくべきかを知らない、そしてそれ等を、大衆の間には窮乏と失業、飢餓と荒廢が支配してゐるときに、××××ねばならぬ××××、かゝる××××は自づと已れに死刑の宣告を下してゐるのだといふことを認める必要がある。

最近の數年は、二つの相對立する經濟體制ソヴェートの經濟體制と、資本主義的經濟體制の實踐における試練期、試験期であつた。これ等の數年にソヴェート體制の「死滅」と「破産」の豫

言は充分である以上になつた。資本主義の繁榮に關する論議と讚美は、益々多くなつた。そこでどうしたか。これ等の數年は又しても資本主義的××××は××し××××であり、ソヴェート經濟體制は、資本主義的經濟體制が最も「民主主義的」であり、「全國民的」等であらうとも、一つのブルジョア××もが夢想し得ないやうな優越さを持つてゐることを示した。

一九二一年の五月における、全同盟共產黨（ボリシエヴィキ）の會議における演説において、レーニンは次のやうに云つてゐる。

「現在、我々は國際革命に對する自分の主要な影響を、自分の經濟政策によつて與へる。あらゆる人々、世界のあらゆる國々における労働者は、少しの例外も少しの誇張もなく、ソヴェートロシア共和國を見てゐる。これは達せられた。資本家は黙×し、匿すことができない。そこで彼等は何よりも我々の經濟上の誤謬や、我々の弱點をかり立てゝゐる。この競技場において、鬭争は世界的規模に移された。我々はこの任務を解決しよう。そのとき我々は國際的規模においてきつと、そして終局的に勝利を得るだらう。」（全集第十八卷第一部二八二頁）

レーニンによつて提起された任務を、我が黨は成功裡に遂行したといふことを認むべきである（スターリン、全同盟××黨ボリシエヴィキ、第十六回大會への政治報告）（邦譯希望閣版、スターリン、モロトフの報告、結語及び決議）

社會主義の生産諸力の發達に關するレーニンの所説

資源を固め、社會主義的社會を建設する眞實の唯一の基礎は、只一つ大工業であり、只大工業のみである。資本主義的大工場と高度に發達した大工業なくしては、一般に社會主義は問題でない。農業國においては、尙更問題でない。我々は今日ロシアにおいて、今までよりもより具體的にこれを知るのである。それ故に我々は、大工業の復興といふ、從來の漠然たる抽象的な形式を用ひる代りに、一定の精密に立案された、具體的な電化計畫を口にするようになった。我々は全く精密に立案された計畫を持つてゐる。これはロシアの最良の専門家と學者との協力によつて作成されたものであつて、ロシアの自然的特質を考慮に入れて、我々は如何なる資源を用ひてこの大工業の基礎を、我々の經濟に適合せしめることができ、また適合せしめねばならぬかについて、我々に一定の表象を與へるものである。これなくしては、我々の經濟生活の、眞實に社會主義的な基礎は問題でない。(レーニン、現物税に關する報告、全集、十八卷、第一部、第一版、二〇〇頁。)(邦

譯、レーニン著作集、第一卷、一六五—一六六頁。)

社會主義は、最新の科學の最後の言葉によつて打ち建てられた大資本主義的技術と、計畫的な國家組織と、幾干もの人間が、生産物の生産と分配との事業において、嚴格に、單一な規範に従ふことなしには考へることができぬ……社會主義はそれと同時に、プロレタリアートが國家を支配することなしには、考へることができぬ。(レーニン、現物税について全集、第十八卷、第一部、一版、九〇六頁。)

勝利を得るためにはプロレタリアートは二つの或は二つが一つになつた任務を解決しなければならぬ。第一にXXに對するXXXのその限りなき英雄主義によつて、勤勞被搾取者のあらゆる大衆を惹きつけなければならぬ。ブルジョアジーのXXとブルジョアジーの側からのあらゆるXXのXXなXXのために、これ等の大衆を惹きつけ、XXし、XXしなければならぬ。第二に勤勞被搾取者のあらゆる大衆、及びあらゆる小ブルジョア層を新しい經濟的建設の道に新しい社會主義的聯繫、新しい勞働規律、新しい勞働組織の道に引き寄せなければならぬ。そしてそれ等は科學の最後の言葉と、資本主義的技術と、大社會主義的生產をつくり出す意識的な勞働者の大衆的な結合と結びつけるものであるべきである。

この第二の任務は、第一の任務よりもより困難である。それは個々の斷續的な英雄主義では決して解決し得ぬからである。そして最も長期に亘る、最も必要な、最も困難な、大衆の、そして日々の活動における英雄主義を要求するからである。併しこの任務は第一の任務よりも、より實現されなければならぬ。何故ならば、ブルジョアジーに對する××のための、最も××な××の源泉、及びこれ等の勝利の鞏固にして且つ唯一の保證は、結局新しいより高度な社會的生産の方法、資本主義的及び小ブルジョアの生産の大××××××××による××であるからである。(レーニン、偉大なる創意、全集、第十六卷、第一版、二五一頁。)

附録の二十五

社會主義の生産諸力の發展に關する同志スターリンの所説

今や我々に對して、工業發達の急速なるテムボを命令してゐる内外の秩序の、この狀勢並びにこれ等の諸條件の點檢に移ることを許せ。

外部的条件。我々は國內の政權を握つたが、この國の技術は驚くべき程おくれたものである。

多かれ少かれ新技術の上に基礎づけられた、大工業單位の多くの數と相俟つて、近代的成果の見地からは何等の批判にも堪へ得ない、數百數千の工場がある。然も我々は我國よりも遙かに發達し、完成されたる工業技術を所有するいくたの資本主義國にかこまれてゐる。これ等の資本主義諸國を見たまへ。そしたら諸君はそこにおいて技術が生産技術の舊形態を追ひ越して進みつゝあるばかりでなく、驅け足で前進してゐることに氣づくであらう。こゝにおいて、我々は一方において我國において全世界に於いて最も先頭的な政權を持つてゐながら、他方においては、社會主義及びソヴェート政權の基礎をなす、著しくおくれた工業技術を持つてゐる、といふ結論を得るであらう。この矛盾を當面に控へて、終局的勝利を戦ひとり得ると諸君は考へてゐるか？ この矛盾を清算するためには何をすることが必要であるか？ そのために必要なことは、發達せる資本主義國の先驅的な技術に追いつき、またそれを追ひ越すべく努力することである。我々は新たな政治秩序、ソヴェート秩序の意味においては、先頭的資本主義國に追いつき、これを追ひ越した。これは非常によろしい、だがこれのみでは充分でない、社會主義の終局的勝利を得るためには、技術—經濟關係においてもまた、それ等の國に追いつき追ひ越すことが必要である。我々がそれをやり遂げるか、我々が打碎かれるかいつれか一方である。このことは、たゞに社會主義建設の見

地から見ても正しいばかりでなく、また資本主義包圍下の狀勢から我が國を獨立せしめるといふ見地から見ても正しいのである。防衛のための十分な基礎を持たずして我國家の獨立をまもることは不可能である。工業における高度の生産技術を持たずして、さうした工業的基礎をつくることは不可能である。工業發達の急速なるテムボを我々に必要とし、命令するのは即ちこれである。

我が國における技術的、經濟的未發達は、我々によつて考へ出されたものではなく、我が國の全歴史によつて遺産として、我々に譲り渡されたる、年代的のものである。この事實は、革命前の時期においても一つの病根として感じられてゐたし、革命後の時期においてもさうである。ピョートル大帝が、西歐の先進國に倣つて、軍需品及び國防強化のために、熱心に、工場を設立したことがあるが、これは未發達の枠内から、脱け出る獨特の試みであつた。併し乍ら、我々が完全に理解してゐることは、舊階級——封建貴族もブルジョアジも——の、たゞ一つでもが、我が國土の未發達を、清算する任務を解決することができなかつたといふことこれである。それのみではない。これ等の階級は、それ等の任務を解決できなかつたのみではなく、彼等は多少でも満足する形において、それ等の任務を提起することさへできなかつた。我が國土の年代的未發達は社會主義建設の成功の基礎の上のみ清算できる。而してこれの清算は自分の××を打ち建て

その手に××の指導を握るプロレタリアートのみがなし得る。

我が國の未發達が、我々の思ひつきではなく、我が國の全歴史によつて遺産として我々に渡されたものであるから、我々としてはそれに對して責任を持つことはできず、又責任を持つべき筋合ではないとして自己慰安に耽ることは、愚の骨頂である。同志諸君、それは正しくない。政權が一度我々の手に歸し、社會主義の基礎の上に國家を改造する任務を引き受けて立つた以上、我々はすべてのものに、悪いことにも、良いことにも、責任を持たねばならぬ。我々がすべての責任を負ひ、我が國の技術的、經濟的未發達を征服せねばならないのは、その故である。もしも我々が實際に先進的資本主義國に追いつき、それを追ひ越さうと望むなら、我々は當然、その義務を果さねばならない。然もこれをなし得るのは我々ボリシェヴィキであつて、他の何人でもない。この使命を實現するためには、我々は、我が國の工業發達の急速なテムボを組織的に實現せねばならぬ。そして我々が既に工業の發達の急速なテムボを實現しつゝあると云ふことは現在凡べての人々が見てゐる。

技術的經濟的方面において先進的な資本主義諸國に追ひ付き追ひ越すと云ふ問題、この問題は我々ボリシェヴィキにとつては何等か新しいもの、若しくは不意打のものではない。この問題は

我國においては既に一九一七年に、十月革命の時期に提起されてゐた。レーニンはこの問題を一九一七年の九月に、十月革命の前夜に、帝國主義戦争の時期に、その小冊子「威嚇しつゝある異變及び我々は如何にこの異變と闘ふべきか」において提起してゐる。

次に記すのがこれについてレーニンの語つてゐるところである。

「革命は、ロシアが數ヶ月のうちにその政治的秩序において前衛的諸國に追いつくと云ふことをなした。併しこれだけでは足りない。戦争は斷固としてゐる。それは容赦なき峻嚴さをもつて死滅するか、或ひは經濟的にも前衛的諸國に追いつき且つそれを追ひ越すかと云ふ問題を提起してゐる。……死滅するか、さもなければ全力をあげて突進するかである。問題は歴史によつて斯様に提起されてゐる。」(第十四卷第二部二二三頁)

レーニンは我が技術的並びに經濟的未發達の清算について問題を斯様に峻嚴に提起してゐる。

レーニンは凡べてこれらを十月革命の前夜に、プロレタリアートによる權力獲得の以前の時期に、ボリシェヴィキが權力も社會化された工業も、何百萬もの農民を捉へてゐる、廣汎に枝葉を出してゐる協同組合網も、コルホーズもソフホーズも持たなかつた時期に書いたのである。我々が技術的、經濟的未發達を根本から清算するために本質的な何ものかを持つてゐる現在には、我

々はレーニンの言葉を大體次のやうに移すことができる。

「我々はプロレタリアートの××を建設して政治的方面では前衛的資本主義諸國に追いつき且つ追ひ越した。併しこれだけではたりない。我々はプロレタリアートの××を、我々の社會主義化された工業を、運輸、信用制度等を、協同組合、コルホーズ、ソフホーズ、等を經濟的にも先驅的資本主義諸國に追いつき且つ追ひ越すために利用しなければならぬ。」

工業の發展の急速なテムポの問題は、若しも我々が例へばドイツにおけるが如き發達せる工業及び發達せる技術を持つてゐたならば、また若しも我が全經濟における工業の比重が例へばドイツにおける様に高度のものであつたならば我が國において今見る程に尖鋭化しはしなかつたであらう。この條件があれば、我々は我が工業が資本主義國家よりもおくれてゐることを恐れず、一擧にして彼等を追ひ越し得ることを知つて、これより急速でないテムポでそれを發達させ得るのである。併し其時には現在我々が持つてゐるやうな重大な技術上、經濟上の未發達は存在しないであらう。併しこの方面で我々はドイツの後方にあり、技術的方面においては、我々は尙彼等に遙るかに及ばないのである。

若しも我々がプロレタリア××の一國であるばかりでなく、プロレタリア××諸國の一つであ

るならば、若し我々がプロレタリア××諸國を我國に持つのみでなく、他のより先驅的な諸國に、例へばドイツ及びフランスにも持つならば、工業の急速な發達のテムボの問題は斯様に尖鋭化しはしなかつたであらう。この條件の下においては資本主義國の包圍の問題も、それが今日示されたのでなく、また我國の經濟的獨立問題も自然第二義である様に我々にとつて重大な危険を持つものになるであらう。我々は體制のなかにより發達したプロレタリア國家を加へることが出来るであらうし、我々は、我が工業及び農業の豊富化のために機械を彼等から手に入れ、原料品、食料生産物を彼等に供給し得るであらうし、我々は従つてより急速ならざるテムボをもつて我が工業を發展せしめうるであらう。だが我々はそうした條件をまだ持つては居らず、我々はなほ未だ唯一つだけのプロレタリア××國家であり、それは資本主義諸國に包圍されて居り、それら資本主義國家の多くは技術的經濟方面において遙かに我々に先んじてゐる。

經濟的に先進的な諸國に追いつき、これを追ひ越すべき問題をレーニンが我國發展の死活問題なりとした所以は實にこゝにある。

我が工業發達の急速なテムボを我々に命令しつゝある外部的な條件は斯様である。

國內的條件。併しながら外部的な條件以外に尙我が全經濟の指導的基礎としての我が工業の發

達の急速なテムボを我々に命令しつゝある國內的條件がある。自分は我國の農業、我國の技術、我國の文化が極度におかれてゐることを云つてゐるのである。

私は我が國には分散した、全くおくれた生産を持つ小商品生産者の壓倒的多數（それと比較すると、我が社會主義大工業は、恰も大洋中の孤島のやうであり、そしてその基礎は日々擴張されつゝあるとはいへ、それは依然として大洋中の孤島である）といふことをいつてゐるのである。工業は農業を含む全國民經濟の指導的基礎であること、工業はそれによつて未發達な、且つ分散せる農業を協同經營の基礎の上に改造すべき基礎であることは、我が國において、普通云はれてゐる。この言葉は全く正しい。このことを我々は一瞬間たりとも看過すべきでない。だが工業はよし指導的基礎であるとしても、農業も又工業生産品を吞下すべき市場として、及び原料、食料品の提供者として、又國民經濟にとつて必要な機械類を輸入するために缺くべからざる輸出準備品の源泉として、工業發達の基礎をなしてゐるといふことを想起すべきである。農業をおくれた技術状態に残しておき、工業のために農業の基礎を保證せず、農業を改造せず、そしてそれを工業に追従せしめずして工業の發達を進めることができるであらうか。否、できない。この點からして新しい技術的基礎の上への農業の改造の事業を促進させ、前進させるに必要な、生産要具並び

に手段を最大限に農業に與へるといふ任務が出てくる。併しこの任務の實現を得るためには、我が工業の發展の急速なテムボが必要である。勿論細分されたそして分散した農業を改造することは、統一され、且つ集中化された社會主義的工業を改造するよりも、比較にならぬ程より困難な事業である。併しながら、我々はこの任務に當面してをり、我々はそれを解決しなければならぬ。而してそれを解決するには、工業の發展の急速なテムボの基礎の上に行ふ以外には不可能である。ソヴェート權力及び社會主義建設を、際限なく、即ち餘りに長い期間に亘つて、二つの異つた基礎の上に、最も大なる、且つ統一された社會主義的工業の基礎及び、最も細斷された、且つ小品生産者の農業の基礎の上におくことは誤りである。農業を社會主義的工業に引き寄せ乍ら、それを新しい技術的基礎の上に、大生産の基礎の上に漸次的に、しかし系統的に、執拗に導いていくことが必要である。もし、我々がこの任務を解決せんか、その時こそ終局の勝利が保證される。もし、我々がこの任務から退却せんか、この任務を解決し得ないか、その時こそ、資本主義への復歸は不可避免的な現象となつてくる。

レーニンはこれについて次のやうに云つてゐる。

「我々が小農民國に暮してゐる限り、ロシアにおける資本主義にとつては、××主義にとつて

よりもより鞏固な經濟的基礎がある。このことは想起しなければならない。都市の生活と比較しての、農村の生活を、注意深く觀察したあらゆる人々は、我々は資本主義の根を絶やしてゐず、國內における敵の基礎、土臺を打倒してゐないといふことを知つてゐる。この基礎は小經濟の上に維持されてゐる。そうしてそれを打倒するには、一つの手段が農業をも含む國內の經濟を、新しい技術的基礎の上に、近代的大生産の技術的基礎の上に、置くといふことである。かゝる基礎は電氣のみである。共產主義はソヴェート權力プラス全國土の電氣化である。」（全集第一七卷、四二七—四二八頁）

諸君が見られるやうに、レーニンは國土の電氣化といふ言葉を、個々の發電所の孤立的な建設でなく、それ或ひはこの様相を以て直接にか、間接にか、電氣化の事業と結びついてゐる「新技術的基礎の上への、近代的大生産の技術的基礎の上への、農業（傍點スターリン）をも含む全國内の經濟の」漸進的「移行」といふ意味にとつてゐるのである。

レーニンはこの演説を一九二〇年十月の第八回ソヴェート大會において、彼が所謂、電氣化計畫、即ち國家電氣化委員會の計畫を基礎づけたネツプ施行の直前に、語つたのである。若干の同志たちは、この基礎の上に、このレーニンの引用文の中で云はれた命題は、現在の現實とは既に融

和し得ないと云つてゐる。何故か、と問ひたくなる。するとそれ以來、澤山の事態が起つたから、と人々は云ふ。これは勿論正しい。それ以來、いくたの事態が起つた。我々は現在、發展した社會主義的工業を持つてゐる。我々は大衆現象としてのコルホーズを持つてゐる。我々は舊來の、そして新しいソフホーズを持つてゐる。我々は、發展した協同組合組織の豊富な網を持つてゐる。我々は農民の經濟に奉仕すべき、賃貸場を持つてゐる。我々は現在、新しいスミチカの形態としての契約の方法を持つてゐる。我々は、これ等の、及びいくたその他の槓杆を、農業を新しい技術の基礎の上に、漸次おくために、動員し得る。すべてこれ等は正しい。併し、すべてこれ等のことにもかゝはず、我々は尙依然として小生産の壓倒性を持つ小農民國であるといふことも同様に正しい。そしてこのことは根本的なことである。そしてこの根本的なものが残つてゐる限り、「我々が小農民國に暮してゐる限り、我が資本主義にとつては、 \times 主義にとつてよりも、より鞏固な經濟的基礎がある。」資本主義の復活の危險は單なる空辭ではないといふレーニンのテーゼも力を持つてゐるのである。

ネツプの施行後（一九二二年四月―五月）に書かれた「現物税について」といふ小冊子の草案の中では、レーニンは同じことを、併しよりはつきりした形で云つてゐる。

「もし電氣化があれば、十年、二十年後には小農業者の、個人主義も、その地方循環における自由商業も、少しも恐しくはないであらう。もし電氣化がなければ、資本主義への復歸は尙不可避的であらう。」

更に次のやうに云つてゐる。

「農民との正しい關係の十年、二十年は、全 \times 的規模においても、(\times \times \times \times \times \times \times が延引した場合にも)勝利を保證するであらう、さもなければ、二十年、四十年後には白色テロルの苦痛がくるだらう」

まさにこのやうに峻嚴にレーニンは問題を提起したのである。電氣化、即ち農業をも含む國內の經濟の新しい技術的基礎への、近代的大生産の技術的基礎への移行か、さもなければ資本主義への復歸であるか、と。(スターリン、國內の工業化と全同盟共產黨の右翼的偏向について)。白揚社版、續レーニン主義の基礎二二五―二三六頁)

附録の二十六

社會主義の經濟的基礎の創造とは何か

我々はプロレタリアートの××を獲得し、それによつて社會主義への進展の政治的基礎をつくり出した。我々は自分自身の力によつて、社會主義の經濟的基礎と、社會主義の建設にとつて必要な、新しい經濟的基礎をつくり出し得るであらうか。社會主義の經濟的本質と經濟的基礎はどこにあるか。地上に「極樂」をつくり、一般の満足をつくることにあるのではないか、否。ここにあるのではない。それは社會主義の經濟的本質に關する凡俗な、素町人的な考へである。社會主義の經濟的基礎をつくることは、農業を社會主義的經濟と一體になつた經濟に結合し、農業を社會主義的工業の指導に従屬させ、農業及び工業の生産物の直接的交換の基礎の上に、都市と農村との關係を整へ、それによつて階級が生れ且つ何よりも先づ資本が生れるあらゆる溝を埋め、且つ掃蕩し、そして直接階級の絶滅をもたらすやうな、生産及び分配の條件を結局つくり出すといふことを意味する。

次に擧げるのが、ネツプを施行した時期に、そして國民經濟の社會主義的基礎の建設の問題が黨の前に脊丈一杯にのび上つた時に、レーニンがこれについて語つたところである。「徵發を租税とかへること、その原則的な意義。「戰時」××主義より正しい社會主義的基礎へ、徵發でもなく

租税でもなく、大に社會主義化された工業の生産物の農民の生産物との交換、これが社會主義の經濟的本質であり、その基礎である」(レーニン資料集第四卷三七二頁)

レーニンは社會主義の經濟的基礎の問題をこのやうに理解してゐるのである。

併し農業を社會主義的工業と鍛え合はせるためには、何よりも先づ豊富な、生産物の分配機關の網が、協同組合機關の豊富な網が必要である。例へば消費組合や、農業協同組合や、生産協同組合のやうな。レーニンはその小冊子「協同組合について」をかいた時には、まさにこの命題から出發したのである。「我が國の條件の下における協同組合は全く社會主義と一致する。」と(全集第十八卷第二部一四四頁)(スターリン、反對派について、四五三—四五四頁)。

附録の二十七

社會主義の生産諸關係

プロレタリアートの獨裁は……私が屢々指摘したやうに——單に搾取者に對する暴力ではない。否、必ずしも暴力ではないのである。この××的な××の經濟的基礎、即ちその永續と成功との保證となるものは、プロレタリアは資本主義よりも一層高級な社會的勞働組織の型であり、

且つそれを創造したといふことにある。こゝに本質がある。そしてこゝにこそ力の源泉であり、
××主義の必然、××的な且つ勝利の保證がある。

社會的勞働の農奴制的組織は、鞭の規律と、勤勞大衆の極度の無智と遲鈍とを基礎として維持
せられ、ほんの少數の地主が彼等を掠奪し、嘲弄して居つた。社會的勞働の資本主義的組織は、
飢餓の規律によつて維持せられてゐる。そして勤勞者の莫大な大衆はブルジョア文化のあらゆる
進歩とブルジョア民主主義にも拘らず、最も進歩した、文明的な民主的共和國においてすらも、
少數の資本家によつて搾取され、嘲弄される無智にして遲鈍な賃銀奴隸乃至は農奴的農民の大衆
であつた。社會的勞働の××主義の組織——社會主義はこれに進む第一歩である——は、地主と
資本家との鞭を××した勤勞者自身の、自由にして目的を意識した規律を基礎とするものである。
そして先へ進めば進むほど、愈々益々、かうした目的を意識した自由な規律を基礎とするものと
なるのである。

この新しい規律は天から降るものでもなく、また善い心掛けからのみ生まれるものでもなく、
それは大規模な資本主義的生産の物質的條件から生ずるものであり、またそれのみから生ずるの
である。この物質的條件なしには、それは考へることはできぬ。そしてこの物質的條件を把持し

てゐる者、乃至はこれを實現する者は、或る一定の歴史的階級であつて、この階級は大資本主義
によつて形成され、組織され、結合され、教育され、啓蒙され、鍛錬せられたものであつて、こ
の階級こそ、即ちプロレタリアートである。(レーニン、偉大なる創意、全集、第十六卷、第一版、二
四七—二四八頁)(邦譯、レーニン著作集、第五卷、二七六—二七八頁。)

附録の二十八

ソヴェート工業の原動力は何か

アメリカ代表の質問と同志スターリンの答

第六問 資本主義諸國においては、生産を發展させるための刺激は、利潤獲得の希望にある。
かかる刺激は勿論比較的ソヴェート同盟には除外してゐる。これに代る刺激は何か、そしてか
ゝる刺激の更替はどの位の程度まで効果があると考へるか？ それは永續的なものであるか？

答 資本主義的經濟の原動力が利潤の獲得にあるといふことは正しい。利潤の獲得が我が××
××的産業の目的でもなく、又原動力でもないといふことも亦同様に正しい。ではこの場合我が

國産業の原動力は何か？

この原動力は、先づ第一に、我が國においては工場が全民衆のものであり、××家のものではないといふ事情、工場が××家の代理人によつて管理されてゐるのではなくて、労働者階級の代表者によつて管理されてゐるといふ事情である。労働者は資本家のために働いてゐるのではなくて、彼等自身の國家のために、彼等自身の階級のために働いてゐるのだといふ意識——この意識は、我が國産業を發展させ、完成させるための巨大な原動力である。工場管理人の大多數は、労働組合との協議の結果最高國民經濟會議により任命された労働者から成り、如何なる管理者も労働者或は當該労働組合の意志に反してその地位に止まることはできない、といふことを記しておかなければならない。更に又、あらゆる工場には工場委員会があつて、それは労働者により選舉され、且つ企業管理の活動を統制してゐる、といふことも亦記しておかなければならない。最後にあらゆる工業企業には労働者の生産委員会があつて、當該企業の全労働者はこれに所屬してをり、この委員会において労働者は企業管理者の全活動を検討し、工場管理の活動計畫を審議し、誤謬及び缺陷を明かにし、かくてこれ等の缺陷を労働組合、黨、ソヴェート××の諸機關によつて匡正する可能性を確保してゐる、といふことも記しておかなければならない。これ等一切の事情が、

労働者の地位並びに企業内における全秩序を根本的に變化せしめるといふことを、理解するのは困難なことではない。資本主義の下における労働者は工場を××と考へてゐるが、ソヴェート體制の下における労働者は最早や工場を××とは考へずに、彼等に密接な關係のある、彼等と血のつながつたものと考へ、その發展と改良とに對しては彼等は非常な關心を示してゐる。この新しい労働者對企業の關係、労働者と企業との接近のこの感情が、我國全産業の偉大なる原動力であるといふことは、殆んど證明の必要はない。この事情からして、生産技術の領域における労働者出身の發明家の數及び労働者出身の工業の組織者の數が日に日に増加してゐる事實が説明されなければならぬ。

第二に、産業の収益は我國では個人を富ますために使はれるのではなくて、産業の一層の擴大のために、労働者階級の物質的及び文化的地位を高めるために、労働者及び農民の必要とする工業商品を安くするため、即ち勤勞大衆の物質的地位を向上させるために使はれるといふ事情である。資本家は、彼の収益を労働者階級の幸福を向上させるために使ふことはできない。彼は利潤のために生きてゐるのである。さうでなかつたら、彼は決して資本家ではないであらう。資本家が利潤を得ようとするのは、これを剩餘資本と爲し、資本缺乏に悩んでゐるところの後進國へこ

れを輸出し、かゝる方法によつて新しいより大なる利潤を獲得せんがためなのである。かくて資本は北アメリカから支那へ、インドネシアへ、南アメリカへ、ヨーロッパへ、又フランスからフランスの殖民地へ、イギリスからイギリスの殖民地へと流出するのである。我が國においては、事態はこれと異つてゐる。何となれば、我々は斷じて殖民政策を行はないし、又これを認めもしないからだ。我國においては、産業の収益は更に産業を擴大し、労働者の状態を改良し、産業製品の廉價販賣によつて農民市場を含む國內市場の抱擁力を高める目的のために、國內に留めておかれる。我が國では工業の収益の一〇パーセントは労働者の階級生活を改善する爲に使はれる。我國では労働者の貨幣賃銀の一三パーセントだけが、國家負擔の労働者階級の保険金となる。(この額は年に八億ルーブル以上になる)。収益の一定部分(私は今直ちにそれがいくら程だか明言することができないが)は文化的な必要に、又工場における教育及び労働者の休暇のために使はれる。この収益の可成りな部分、(これもいくら程か今即座にいふことができないが)労働者の貨幣賃銀を毎年増額するために使はれる。産業の収益のその他の部分は、更に産業を擴大するために、古い工場の修繕、新しい工場の建設最後に又工業製品の價格を安くするために使はれる。かゝる事實の我國全産業に對する偉大な意義は、一、農業と工業とを接近させ、都市と農村との

間の對立の平均化を容易ならしめること、二、都市及び農村における國內市場の抱擁力を促進し、かくすることによつて工業のより以上の發展のために、不斷に擴大するところの基礎をつくることこれである。

最後に、工業が國有化されてゐるといふ状態は、工業經營全體を計畫的に指導することを容易ならしめる。

我國工業のかゝる刺激及び原動力は、恒久的な要因として存続するであらうか？ それは恒久的に作用する要因であり得るだらうか？ 然り、それ等は無條件に恒久的に作用する刺激及び原動力であるだらう。そして我國工業が更に發展すればする程、これ等の諸要因の力及び意義は益々大きくなるであらう。(スターリン、レーニン主義の諸問題。)(邦譯、續レーニン主義の基礎、四四―四八頁。)

附録の二十九

コルホーズの性質について

コルホーズは、經濟の型として社會主義經濟の一形態である。これについては何等疑問の餘地がない。

演説者の一人がこの席において演説をなし、コルホーズを非難したのである。彼は經濟組織としてのコルホーズが、經濟の社會主義的形態と何等の共通點を持つものでないと信じてゐる。同志諸君、私はかくの如きコルホーズの特徴づけは全然誤りであると言明せざるを得ぬ。この特徴づけがレーニン主義と何等の共通點を持つものでないのは云ふまでもない。

經濟の型は何によつて規定されるか？ 勿論生産過程における、人間の關係によつてである。

コルホーズ内に、果して生産手段の所有者たる人間階級と、これ等の生産手段を所有しない人間階級とが存在してゐるか？ コルホーズ内には、果して搾取階級と被搾取階級が存在してゐるか？ コルホーズは國家の所有に屬する土地の上に基本的生産要具の社會化ではないのか？ 經濟の型としてのコルホーズが社會主義經濟の一形態でないと主張すべき如何なる論據があるか？ 勿論コルホーズ内には矛盾がある、そして勿論、コルホーズ内には個人主義的な、時には富農の殘滓さへもある。だが彼等は今日まで尙ほ脱落しなかつたのであるが、コルホーズが強化するに従つて、それが機械化するに従つて、彼等は必ずや脱落するにちがひない。併し乍ら、矛盾

と缺陷を内包した、全體としての經濟的事實としてのコルホーズが、根本において農村發展の新たな道、換言すれば、富農的資本主義的發展の道に對立する社會主義的農村の發展の道であることを、果して否定し得るであらうか？ コルホーズが（私はコルホーズについて言つてゐる）で似而非コルホーズについて言つてゐるのではない。我が國の條件の下において、農村における社會主義的建設の基礎と搖籃——それは資本主義要素との必死の鬭争のうちに成長しつゝあるところの——であるといふことを果して否定し得るであらうか？

一部の同志たちがコルホーズをこき下し、これをブルジョアの經濟であると説明しようとする企圖は、何等の論據を持つものでないといふことが果して明白でないであらうか？

一九二三年においては、我國に未だ大衆的なコルホーズ運動がなかつたのである。レーニンは彼のパンフレット「協同組合論」においてあらゆる種類の協同組合、即ち低級な消費組合から、高級なコルホーズ形態のものに互つて考察を下してゐる。當時彼は協同組合及び協同組合企業に關し如何に述べてゐるか？ 次に示すものが彼の著書「協同組合論」からの引用である。

「我が國の現秩序の下には、協同組合企業は集團的企業としての私人的、資本主義的企業とは異つてゐる。そして、それ等の企業が國家、即ち勞働階級に屬する土地を基礎とし、同様に

國家即ち勞働階級に屬する生産手段を以てする限り、社會主義的企業と異なるものではない。」

これによつて明かなる如く、レーニンは協同組合企業をそのまま取りあげたのではなく我國の現秩序と相關聯し、換言すれば、國家に屬する土地において、生産手段が國有である國土において、それが有する機能と關聯してこれを是認し、そしてレーニンは協同組合企業をかゝる秩序の中に點檢し、それが社會主義企業と異なるものではないと主張してゐるのである。

協同組合企業一般に關し、レーニンは以上のやうに云つてゐる。この大きな事實に基いて、現時のソルホーズに關し、同様の説明を下し得るといふことは明かでないか？

この事實によつて、就中、また次のことが説明され得る、即ちレーニンは、我國の條件の下において、「協同組合の單なる成長」を「社會主義の成長と同一なもの」に見てゐるといふことである。(スターリン、レーニン主義の諸問題。)邦譯、戦旗社版、ソヴェート國家の現勢、九五—九八頁。)

附録の三十

社會主義競争

我が建設の最も重要な事實でないにしても、最大の事實の一つが、あたへられた瞬間において廣

汎に展開しつゝある何百萬もの勞働者大衆の競争であると云ふことは殆ど疑ふことができない。我が廣汎な國土の最も多様な隅々のあらゆる工場の競争、勞働者と農民の間の競争、ソルホーズとソフホーズとの間の競争、勞働者の特別な契約のこの大衆的生產的點呼の強化——凡べてこれらは、大衆の社會主義競争が既にその力を發揮し出したと云ふことに疑問を残さないやうな事實である。

勤勞大衆の偉大な生産的昂揚が開始された。

このことは現在最も絶望的な懷疑論者さへ、認めざるを得ない。レーニンは次のやうに云つてゐる。

「社會主義は競争を消滅させないばかりか、反對に初めて、それを眞に廣汎に、眞に大衆的な規模に適用し、眞に澤山の勞働者を彼等が己れを現はし、自分の能力を發展させ、手腕を發揮する——これらは民衆の間に泉のやうに澤山匿れて居り、また資本主義によつて何千、何百となく壓しひしがれ、抑壓され、窒息させられてゐる——ことのできるやうな勞働の舞台に引き出す可能性をつくりだすものである。」

「社會主義的政府が政權を握つた現在における我々の任務は競争を組織することである。」

全同盟共産黨（ボリシエヴィキ）第十六回會議はレーニンのこれらの命題から出發した。そして労働者及び勤勞者に向つて競争に關する特別な激を發した。

官僚出身の若干の「同志」達は、競争はボリシエヴィキの當面の流行であり、そして流行として「季節」の終了と共に凋落するに違ひないと考へてゐる。官僚出身の「同志」達は勿論間違つてゐる。實際は競争は、何百萬もの勤勞大衆の最大の活動性を基礎とする社會主義建設の××主義的方法である。實際は競争はそれによつて労働階級に國內の經濟生活並びに文化生活を社會主義の基礎の上に轉向させるべく召集する槓桿である。

屢々サレゾフ、ツァニエ、コシクレナヤ社會主義競争は競争と混同される。これは大きな誤謬である。社會主義競争と競争は二つの全然別々な原則である。競争の原則は一方の敗北と死滅であり、他方の勝利と支配である。社會主義競争の原則は一般的昂揚の獲得を伴ふ先驅的な側からの遅れたものに對する僚友的援助である。競争は叫ぶ。自分の支配を固めるために遅れたものを倒せ、と。社會主義的競争は叫ぶ。一人は悪しく、他の者はよく、そして第三のものは一番よく働く。最もよく働くものに追いつきそして一般の昂揚を戦ひ取れ。社會主義競争の結果、勤勞者大衆を捉へた未開の生産的熱意はこと自身によつて説明される。競争が大衆のかゝる熱意に少しでも似た何ものをも呼び起し得

ないと云ふことは明かである。

最近我國の新聞雑誌には競争に關する論説や評論を見ることが出来る。競争の哲學や、競争の根據や、競争の可能な結果や、其他について書かれてゐる。併し競争が大衆自身によつて如何に行はれてゐるかの有様を、何百萬もの大衆が競争を實現し、契約に署名しつゝ體驗しつゝあるものの有様を、労働者の大衆が競争の問題を自分自身の、生來の事業と考へてゐる有様を少しでも脈絡をもつて描いたやうな記事には殆ど出遇ふことができない。併し問題のこの側面は我々にとつて最高度に重要な競争の側面である。（スターリン、E.ミクリナヤの著書「大衆の競争」の序文。）

附録の三十一

計畫について

同志スターリンのレーニンへの手紙

最近三日間に私は「ロシアの電氣化計畫」と云ふ論集を読み終へることが出来た。それは病氣のおかげで。（轉んでも只は起きない！）素晴らしい、立派に編輯された書物である。括弧なしに

眞に單一的な、そして眞に國家的な計畫の素晴らしいスケッチである。經濟的におくれたロシアのソヴェートの上層建設のもとに眞に現實的なそして現在の諸條件のもとにたつた一つ可能な技術的生産的基礎を導入しようとする現在においてたつた一つの素晴らしい試みである。戦前の工業の破片への非熟練工的労働者農民の大衆（「労働軍」）の労働の大衆的適用の上にたつロシアの「經濟的復興」と云ふトロツキーの今年の「計畫」（彼のテーゼ）を想起せよ。國家電化委員會の計畫に比較して何たる貧弱さ、何たる時代おくれであらう！ ロシアを昔話しによつて「救済」しようとするイブセンのヒロイン氣取りの中世紀的な家内工業ではないか。我々に恥辱をあたへつゝ、我々の新聞雑誌にいつも同じことを繰り返りかへしてゐる何十もの「單一計畫」に何の價値があらうか？ それは子供らしい準備の舌もつれである。……また、相變らずに國家電化委員會を「批判し」、且つ夢中になつて月並に沈みつゝあるルイコフの凡俗な「現實主義」（實際は山カン主義）も。さうである。……

私の意見は次の通りである。

- (一) これ以上一分間も計畫に關する無駄話しに時間をつぶさぬこと。
- (二) 仕事への即刻の實踐的著手に取りかゝり始めること。

(三) 材料及び人間の運搬、企業の復活、労働力の分配、食糧の獲得、給養の基礎及び給養そのものゝ組織等に關する我々の仕事の少くとも三分の一（三分の一は「當面の必要に割かれる」）をこの著手の利害に従屬させること。

(四) 國家電化委員會の活動家のもとには、そのあらゆるよい性質にも拘らず、尙、健康な實行主義が不足してゐる（諸論文には教授的な萎縮が感ぜられる）から、「仕事を期限までに運びをつけ遂行する生き生きした實踐的人間を「計畫委員會」に入れる義務がある。

(五) 「プラヴダ」、「イズヴェスチヤ」、特に「エコノミチエスカヤ・ジーズニ」をして「電氣化計畫」の普及に根本的に、そして個々の領域を取扱つて具體的に従はしめること。そして一個の「單一的經濟計畫」のみがあるにすぎない、そしてこれは「電氣化の計畫」であること、また凡べて他の「諸計畫」は、空虚なそして有害な一個の無駄話にすぎぬことを人々に想起させること。

貴方のスターリン。

附録の三十二

富農的反革命の相貌

工業の領域及び農業の領域における展開した社會主義的建設の成功は階級闘争の最も強烈な尖

鋭化を、ソヴェート同盟に對する攻撃を鋭意準備してゐる帝國主義諸國家の支持をたのみにしてゐる反革命的、反ソヴェートの要素の特別の活動化を叫び起しつゝある。反革命的勢力の活動化が、ソヴェート權力が資本主義的諸要素の制限の政策から全面的協同經營化を基礎としての階級としての富農清算の政策に移るのに比例して強化された、と云ふことは特徴的である。

最近の數年にいくたの妨害者の團體が曝露した。石炭工業の領域において、労働者の給養の領域において、工業其他の領域において現在、教授コンドラチエフ、チャヤノフ、マカロフ、ユロフスキー及びいくた其他の人間の指導の下にある反革命的妨害者團體や直接それに結びつひてゐるグロマン、スハーノフ其他のグループが曝露した。この團體、その構成、その綱領及び戰術は富農の反革命の現在の相貌のはつきりとした表象をあたへてゐる。

凡べてこれらの團體にとつては、これらの團體が主要な反ソヴェートの政黨の代表者をそこに結成させてゐると云ふことが非常に特徴的である。

新たに發覺した組織のなかには次の三つの基本的舊流派を見ることが出来る。即ち、カデット派、人民派、社會革命派及びメンシエヴィキ派である。第一の、カデット派、グループはリトシエンコ、ユロフスキー、ドヤレンコ及びいくた其他の人間のやうなカデット派の活動家の巨頭によつ

て代表されてゐる。この本質においてカデットの立場に、發覺した團體の指導者、教授コンドラチエフは移行したばかりでなく、その活潑なイデオログとなつた。彼は社會革命派（一九一七—一九一九年には彼は社會革命黨員であつた。）からカデット主義に特に複雑な道を歩んだのである。衆知の如く社會革命派とカデット派との間には一般にソヴェート權力に反對する鬭争において最も緊密な結びつきがある。彼等は手に手をとつてその反ソヴェートの活動を共に同に行つた。カデット化しつゝある教授等のこのグループはいささかの粉飾もなしに國內の發展の資本主義的な道を公然説教した。工業の領域においては彼等は大資本の發展に志した。農業の領域においては彼等はクートルとオトルーバの發展の道を、鞏固な富農經濟の建設の道を、一言にして云へばストルイピン政策の道を志した。このグループは公然西ヨーロッパ及びアメリカのブルジョア地主科學に合流した。

コンドラチエフのグループはソヴェート同盟に資本主義の復興を志したのみでなく、世界資本主義の昂揚と發展とを志した。その理論的な構成においてこのグループは所謂景氣大循環論から出發した。この理論の政治的意味は資本主義的昂揚の新しい大なる循環の開始と云ふ思想の主張にある、この理論は戰後における資本主義經濟の繁榮と云ふブルジョア經濟學者の議論にすつか

りくつついて了ひ、且つ「組織された資本主義」の教義と直接結びついてゐる。これらの理論はその熱心な擁護者を第二インターナショナルの代表者のなかに、即ちヒルフアーディング其他のなかに見出してゐるばかりでなく、全同盟共産黨（ポリシエヴィキ）及びコミンテルンの陣列内における右翼日和見主義者のなにも見出してゐる。

コンドラチエフのグループは全組織の中核であり且つその基本的綱領的命題をつくつてゐる。第一のものと結びついてゐる曝露された反革命組織における第二のグループは、チャヤノフ、チエリソツエフ其他を先頭とする新ナロドニキ派のグループである。

コンドラチエフのグループと異りこの新ナロドニキ派のグループは尙、農民經濟發達の特殊の道、その家族的労働性質、等の小ブルジョアの偏見で充されてゐる。新ナロドニキ派のこのグループは農村には資本主義的分化の餘地はなく、農民の家族の發展を地盤とする人口學的分化のみがあり得ると主張した。この理論は農民經濟の發展を農民の家族の成長及び發展と結びつけた。經濟の擴大はこの理論によると家族の擴大のあとに續く。家族が一定の大きさに達するとそれはいくたの新しい家族的配偶に分裂する。そしてこの家族的配偶が新たにその發展を始める。この理論はその言葉の完全な意味において農民的限界性の議論であつた。それは眞に農民的富農界のイ

デオロギーであつた。政治的にはこれは特にはつきりとチャヤノフによりイワン、クレムネフの假名の下に一九二〇年に出版されたその小冊子、「我が兄弟アレクセイの農民理想郷への旅行」に解説されてゐる。この書物のなかで著者は農業化、プロレタリアートに對する農民の勝利、都市の絶滅と農村の勝利等について語つてゐる。かやうにチャヤノフの理論は典型的な富農の理論である。

新ナロドニキ派のグループは一九一八——一九二四年の時機に、戦時××主義並びにネツプの最初の數年に特に活潑であつた。一九二三——一九二四年以前の時期には新ナロドニキ派は農學者界に、また最高農業學校にさへ可成り大きな勢力を占めてゐた。少くとも農業最高學校の基本的な講座はこの傾向の代表者によつて占められてゐた。ネツプの初期の數年における商業關係の發達、富農の成長の開始及び私人的蓄積の成長、ソヴェート經濟體制の資本主義への變化に對する目標轉換派の期待、凡べてこれらは家族的労働の理論の没落の條件をつくつた。個々の新ナロドニキ派に對してヨーロッパ及びアメリカの資本主義經濟に對する智識が影響をあたへたことは疑ひがない。（マカロフ教授）。

一九二八——一九二九年にチエリソツエフ及びチャヤノフはいくたの論文及び手紙を掲げて進出した。この手紙のなかで彼等は自分の理論のいくたの命題を抛棄した。外面的にはこれは個人的小農民

經濟に對するコルホーズ及びソフホーズの優越の是認のこの形態をもつてさへ假面づけられた。

併し實際にはこれは小經濟に對する大經濟、何よりも先づ大資本主義經濟の優越の是認であつた。

第三のグループはグロマン、スハーノフ及びこれにくつついてゐるバザーロフのグループであつた。この際特徴的なのはグロマンも、バザーロフも衆知の如くボグダーノフ派であると云ふことである。衆知のやうに、社會學、經濟學、哲學及び歴史の領域において右翼日和見主義的、機械論的理論にその影響をあたへてゐたボグダーノフ主義は、妨害者組織のイデオロギーにも獨特な形態において影響をあたへてゐたのである。そしてこれは偶然ではない。衆知のやうにボグダーノフ派は既にネツプの始めからいくたの反黨的且反ソヴェートのグループをつくつてゐる。

メンシエヴィキグループにとつての特徴的人物はスハーノフである。スハーノフ主義は革命前のロシア及びソヴェート同盟の現在の現實の獨特な情勢における第二インターナショナルのイデオロギー、綱領及び戰術である。併しスハーノフ主義の若干の獨特さ、即ち第二インターナショナルのイデオロギーとナロドニキ主義との獨特な混交を見ないのは正しくない。

スハーノフはその著述においてナロドニキ主義とメンシエヴィキ修正主義との奇怪な折衷的混交をあたへてゐる。スハーノフ主義の理論的基礎は收穫率遞減の「法則」の修正派的理論、反マ

ルクス主義的な地代論、農業發達の特別な道の理論、大經濟に對する小經濟の優越性、農業の領域における大農業生産の非妥當性、工業資本主義の發展に伴ふ農業における資本主義の漸次的崩壊論等である。正に此處からして既に革命前の諸條件のもとにおける、協同組合を通じての、資本主義の諸條件下にある農民經濟の社會主義への平和な成長轉化と云ふスハーノフの理論が出てくるのである。現在の諸條件のもとにおいてスハーノフは農村における階級的矛盾、階級分化の抹殺を掲げて進出する。スハーノフは富農の問題を塗りつぶし、富農の、協同組合を通じての社會主義への平和的引き込みを説教した。コンドラチエフ派やあらゆるメンシエヴィキ派のやうに、彼も我が諸條件のもとにおいての、資本主義社會のあらゆる法則の作用と云ふ見地にたつてゐた。彼は我が經濟、我が社會主義的建設におけるあらゆる困難をこの法則の破棄によつて説明した。經濟政策の問題においてスハーノフは右翼日和見主義者の進出のうちにはつきりと表現されてゐる立場を根本において擁護した。右翼日和見主義者の見解との完全な一致をスハーノフは特にはつきりと、彼が一九二八年の終りに共產主義アカデミーにおける商品飢饉の原因に關してなした報告において述べた。スハーノフは偽善的に自分を十月革命の成果の擁護者らしくふるまつたが、併し彼はソヴェート權力の最も妥協し得ぬ仇敵の一人である。スハーノフはソヴェート政權の死

滅は不可避的であると考へた。彼はこの死滅を準備することを必要と考へた。スハーノフの基本的な立場は工業の線においても、ソヴェート經濟の線においても資本主義の復活であつた。そしてその際偽善者のなメンシエヴィキ的なため息を吐いた。

今や、如何なる地盤の上にこれらのカデツト的、メンシエヴィキナロドニキ的グループが結成したのであるか、彼等を互に結合させたものは何であつたか、と云ふことが問題となる。

彼等は凡べてプロレタリアートの××に對する鬭争の立場の上に合流する。彼等はプロレタリアートの××の顛覆を外國の干涉の助けをかりてさへも、資本主義の復興・土地國有の廢止、私有財産の復活其他の立場の上に獲得しようとする。かやうなものが彼等の公然反革命的な綱領である。彼等のイデオロギーは細斷された個人的小農民經濟の存在のうちに基礎を持つ國民經濟の發展における資本主義的傾向であり、そして全同盟共產黨（ボリシエヴィキ）の陣列内における右翼日和見主義の根據を養つてゐる。この見地からして彼等は右翼派の綱領を支持した。

いくたの基本的問題——理論的及び實踐的——においてコンドラチエフ派は直接右翼日和見主義者に影響をあたへてゐる。例へば彼等の景氣の大循環論は資本主義の安定の右翼日和見主義的評價と結びついてゐる。コンドラチエフの理論の趣旨は、共產主義インタナショナルが考へてゐ

るやうに資本主義は戰後において破産と崩壞の段階に入つたと云ふのでなく、反對に資本主義は新しい昂揚の循環に入つたと云ふことを證明することに歸する。國際資本主義の繁榮の見通しを甚だ樂觀的に評價しつゝ、コンドラチエフ派は、甚しく否定的にソヴェート同盟の社會主義建設の可能性を評價した。ソヴェートの國の經濟的發展の條件をコンドラチエフ派はソヴェート同盟において國際資本に道を開くことであると考へた。彼等は對外貿易の獨占の清算の線に沿うて、利權政策其他の線に沿うていくたの實踐的提案をなした。對内政策の線に沿うてはコンドラチエフ派は何よりも先づ農業の領域における資本主義の發展に志した。ソヴェート權力のあらゆる社會主義的方策を彼等は國家資本主義、若干のソヴェートの歪曲を有する資本主義經濟とのみ見なした。いくたのその證據文書において、特に例へば彼等の編纂した一九二三—一九二九年度における農業人民委員會の見通し計劃において、彼等はつねに國家資本主義への志望を強調した。彼等の綱領は右翼日和見主義者の實踐的提案並びに政策と一致した。コンドラチエフ派は工業化の可能性の悲觀論的な評價及び工業化の捕捉されたテムボに對する激しい否定的態度の部分についても右翼派と一致した。彼等は輕工業のためにの重工業の屈曲のために鬭争した。右翼派及びコンドラチエフ派のもとには、ネツプを富農及びネツプマン經濟の基礎の上にたつ市場の自然

力の解放の政策として理解することにおいて完全な接近を見た。彼等は富農に反対な黨及びソヴェート權力のあらゆる政策に反対し猛烈な煽動を行った。

その綱領を妨害者達はソヴェートの機關を通じて、土地人民委員會、財政人民委員會、國家計劃部、協同組合中央部、農業信用制度等を通じて行はうと努めた。彼等の妨害者の活動の最もはつきりとした圖解は、彼等によつて土地人民委員會の土地計劃部においてつくられた一九二二—一九二八年の農業發展五ヶ年計劃である。然も遺憾なことにこの計劃は土地人民委員會や國家計劃部によつて是認されてゐる。この計劃のイデオロギー的基礎は全體としての經濟及び特に農業の粗雑なブルジョアの進化論である。この計劃においては農村の階級的分化が抹殺されてゐる。個人的富農經濟の發展があてにされてゐる。全計劃が個人經濟の發展の自然成長に適用し得るやうにたてられてゐた。重工業の指導的役割は考慮されて居らず、工業化に對する期待が否定されてゐた。この計畫においては發展の最少限のテムボが計劃されてゐた。一九二八年までに、この計劃の實現された場合にも疑ひもなく國內における食糧並びに原料上の困難が倍加されるやうな農業の遅々たる發展テムボが計畫されてゐた。一九二四—一九二六年に土地人民委員會の妨害者は鋭意、ソフホーズの土地の分配に協力してゐた。これによつて彼等は社會主義的農業の基礎を切

り崩さうとしたのである。土地人民委員會におけるあらゆるその活動において妨害者達は土地活動のあらゆる方針について富農經濟の發展を助けようとして圖つた。土地制度の方針について妨害者達はクートル及びオトルーバをあてにしてゐた。富農經濟への協力のこの方針は彼等によりあらゆる實驗事業上の方針についても行はれた。他ならぬ正にこの實驗場をめぐつて妨害者共は富農的要素を政治的にも結成し出したのである。

廣汎な農民大衆への奉仕の事業において直接的な妨害活動が行はれた。不必要な農業要具が配られたり、故意にその土地に適しない種子があたへられたりした。

財務人民委員會においても大なる妨害活動が行はれた。財務人民委員會の清掃は、教授ユロフスキー及びコンドラチェフを先頭とする妨害者達がソヴェートの財政政策に對して活潑な鬭争をやつてゐたと云ふことを明かにした。彼等は先づ第一に租稅政策における階級方針に對して鬭つた。彼等は富農經濟に對する課稅の低下、個人稅の廢止等を要求した。こゝでも彼等は國內の工業化とソフホーズ及びコルホーズの發展に對して鬭争した。

彼等の報道的活動、例へばコンドラチェフ派によつて編纂された財務人民委員會の景氣研究所

の報告におけるその如きは極度に特徴的である。傾向的に選擇された材料によつて彼等はソヴェート同盟の經濟は工業への投資を負擔し得ぬと云ふことを證明しようと試み、農村における富農の要素の後退の結果經濟に與へられた害毒其他を指摘した。この傾向的な報告によつてコンドラチェフは我が政策に影響をあたへやうとした。

反革命活動は國家計劃部においても行はれた。労働者の給養の領域における妨害者達は、彼等がその活動において國家計劃部の農業部の妨害に依存してゐると云ふことを自ら認めてゐた。同様な例を我々は協同組合及び信用制度の方針についても見ることが出来る。ここでは農業機械及び要具の供給は信用の供給との緊密な關聯のうちに、富農經濟を助け、農村の貧中農大衆の不満をよび起すやうに行はれた。

自づから問題となるのは如何にしてこれの發生が助長されたか？ と云ふことである。これが發生し得たのは何よりもまづ、彼等がその保護者を、全く階級的感覺を失つて了ひ、彼等を信任し、彼等の影響下にあり、すつかり彼等の方針を行つてゐた個々の共產主義者のうちに見出してゐたからである。右翼日和見主義者とのこの結合（スミチカ）は疑ひもなく基本的イデオロギー的設定の共通性と近似とに基くものである。若干の××主義者は例へばコンドラチェフを完全な

信任を得てゐる「自分の下男」だと考へてゐた。此處に基本的イデオロギー的設定及び何よりもまづソヴェート同盟の經濟的發展の評価並びに經濟政策の任務の領域における近似があつた。

コンドラチェフ主義、スハーノフ主義、チャヤノフ主義、マカロフ主義等は本質上主として農業ブルジョアジー——富農、即ち我國において清算の運命にある、併し建設されつゝある社會主義にはげしい抵抗を示してゐる階級の利害を代表してゐる。妨害活動が死滅しつゝある、併し尙はげしく食ひついてゐる仇敵の鬭争であることは全く明かである。それ故に農業及び工業の領域における妨害活動の清算の問題は、それを養つてゐる社會的基礎の清算の問題である。全面的協同經營化を基礎とする階級としての富農の清算、資本主義的要素に對する展開された社會主義的攻撃、工業化、協同經營化等の政策、即ち、黨の一般方針の實現はあらゆるこれらの敵對的反革命組織の國內の社會的基礎の絶滅のための鞏固な基礎をあたへる。

それ故に妨害活動に對する我々の解答は一般方針の實現のための鬭争でなければならぬ。この任務の實現は二戰線における、そして何よりもまづ右翼日和見主義に反對する斷乎たる鬭争なしには不可能である。

コンドラチェフ主義、チャヤノフ主義、スハーノフ主義は黨の分裂をあてにしてゐた。そして觀

念的にも組織的にも右翼日和見主義に結びついてゐた。彼等のうちの若干の者はトロツキー主義者との聯契を持つてゐた。こゝからして全同盟共産黨（ポリシエヴィキ）内の富農の手先に對する、中心的なそして主要な危険に對する、右翼日和見主義に對する、トロツキー主義の殘滓に對する事實上右翼と共同して進む「左翼」日和見主義者に對する斷乎たる且つ容赦なき闘争の任務が生れる。言葉の上では黨の一般方針に同意しつつ、事實上是黨内におけるコンドラチェフ主義の手先である右翼日和見主義の兩刀使ひに對する容赦なき闘争が必要である。

次の任務は、組織方針についてのみならず、觀念的方針についてもコンドラチェフ主義、チャヤノフ主義、スハーノフ主義等の根據の掃蕩にある。専門家の間には、特に農學者、協同組合運動者のなかにはコンドラチェフ及びチャヤノフの思想が尙強い。農業最高學校の方針について、科學研究所の方針について彼等が行つた活動はその影響を残した。それ故にコンドラチェフ主義、チャヤノフ主義、スハーノフ主義等のあらゆる種類のものゝ斷乎たる曝露が必要である。

これは直接専門家のための闘争と結びついてゐる。妨害者との容赦なき闘争、コンドラチェフ派との分離、社會主義的建設の側に動搖しつつあるものの誘引が必要である。主要なことは専門家の新しいプロレタリア的幹部の最も急速な養成の必要である。

最後に農業家マルクス主義者の陣列内におけるはげしい自己批判が必要である「屢々、赤面すべきことだが、我が同志Ⅱ××主義者によつて普及させられ、我が實踐家の頭を塞いでゐる、」(スターリン)あらゆるブルジョア理論を根こぎにすることが必要である。

コンドラチェフ主義、チャヤノフ主義及びスハーノフ主義は、プロレタリアートに反對し、自分の存在のために闘争してゐる富農及び都市ブルジョアジーの進出の一つである。社會主義の成功的建設と資本主義要素に對する成功的攻撃とがやがてすぐに搾取者の諸階級とそのイデオロギーに對し、××をあたへるであらう。(S・ドゥブロフスキー「イズヴェスチヤ」一九三〇年十一月七日。)

研究家のページ

(第三部への方法論的指示)

「生産諸力と生産諸関係」の部は三課目に豫定されてゐる。この部の基本的なモメントは次のやうになる。(一) 社會的發展の基礎及び社會生活のマルクス主義的分析の出發點としての物質的生產諸力と生産諸關係の辯證法的統一の特性叙述。(二) この問題の一般的提起における、生産諸力と生産諸關係のマルクス學說の機械論的並びにメンシェヴィキ觀念論的曲歪に對する批判。

(三) 土台と上層建築に關する學說。(四) 社會的經濟的構成の個々のタイプの分析を持つ、これらの構成に關するマルクス主義學說の特性叙述。(五) ソヴェート同盟における經濟の分析の、妨害者的、右翼日和見主義的曲歪に對する批判を持つソヴェート同盟の生産諸力と生産諸關係、

ソヴェート同盟における諸關係の分析にあてられた最後の章は、この部の基本的な章と見なされるべきである。生産諸力及び生産諸關係の一般理論との關聯の下に發展させられた命題はソヴェート同盟の具體的諸條件の分析との緊密な關聯のもとにとりあげられなければならない。

研究資料は課題全部の役にたつやうにと考へて選定された。併しいくたの場合に、サークルの

メンバーは直接スターリンの「レーニン主義の諸問題」をひもどく必要がある。この部の若干の個所は研究資料のうちに、それに相當する文書をあたへられなかつた。それは、それらの研究がサークルの指導者と共にやり遂げられることを豫想したためである。

昭和七年六月三日印刷
昭和七年六月七日發行

辯證法講座
第二編
生產力論

定價 金九十錢

檢

譯者

プロコト同盟研究會

發行者

東京市神田區美土代町二ノ一
中村 徳二郎

印

印刷者

東京府下下落合一五五七
溝口 榮

發兌

東京市神田區美土代町二ノ一
振替東京二五四〇〇番

白揚社

電話神田(五)二二八五番

唯物辯證法新刊書

書名	型	頁	價	送	内容
アイゼンベルグ其他數氏著 廣島定吉譯 「辯證法的唯物論」教程	製並判菊	430	1.20	0.12	本書はソヴェートに於ける黨の要人數氏の共著でソ同盟中央委員會に於て教科書(最新)に指定せられたものである。デボリン一派の批判後の唯一最新の著述として、過去の一切の誤謬を清算し平明透徹、從來難解とされし所も明快に説明し盡されて旭日濃雲を打拂ふ壯觀を示して居る。殊に本書は政治社會經濟等々全領域に亘つて説明してある故、實に本書一冊に依つて辯證法的唯物論は基礎的に把握出来る。
ソ同盟中央委員會依囑編纂 プロ科ソ同盟研究會譯 唯物辯證法	製並判六四	250	0.90	0.06	辯證法講座の第一編、マルクス・エンゲルス、レニン、スターリン、黨決議等に依つて唯物辯證法を建設的に究明したもの、最も安心信頼して學ぶ事が出来る特長を持つ。譯文平易明快!
同 生産力論	製並判六四	200	0.90	0.06	辯證法講座の第二編、生産力の問題を扱つて根本的に説明を加へたもの、地代論は本篇に依つてのみ始めて明らかにさるゝであらう。正確透徹! 生産力に於ける辯證法の基礎理論を打建てる貴重文字!

609
374